高松市埋蔵文化財調査報告　第26集

一般国道11号高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第四冊

井手東Ⅰ遺跡

（本文編）

1995.3

高松市教育委員会
建設省四国地方建設局

井手東Ⅰ遺跡正誤表

頁	行	誤	正
はじめに		山口　寮弐	山口　寮弋
例言①	25	鈴木山男	鈴木三男
	28	皇学館大学	皇學館大學
②	13	棚列	柵列
目次Ⅲ	31	長頚壺・無頚壺	頸
Ⅴ	4	第97図　SK07土層部	図
5	23（左）	23査区	23調査区
6	29（右）	土状況図	出土状況図
9	26	掘上　幸子	堀上　幸子
		掘上　真理子	堀上　真理子
	31	掘　　純子	堀　　純子
13	24	周溝墓遺跡に	周溝墓に
17	2	三尊像仿仏片	塼
	23	香川県教育委員会	高松市
	26	「讃岐国弘福寺領の調査第２章第３節」1993	「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第５冊　井手東Ⅱ遺跡」1995

	27	1993	1992
	30	1993	1992
18	2	1993	1992
	4	高松市教育委員会	高松市教育委員会1992
31	12	ていたそうである。	層
43	14	2条の半載竹管	截
	24	「く」の事情に	字状に
52	4	外反する底部をもち	胴
	8	甑	甑
63	写真	紡鐘車	紡錘車
73	26	つくられている。が同	つくられているが同
99	5	ているもの，等の一群と，	削除
118	31～32	挿入	ＳＫ０１ 用水路の西側に位置する。 土坑の東半分は（を挿入）
120	5～6	出土遺物は，陶器擂鉢2点，陶器蓋1点が出土している。	削除
120	16	挿入	は，陶器擂鉢2点，陶器蓋1点が出土している他は
124	14	不正形	不整形

	23	る土層埋土は	る。土層埋土は
125	20	不正形	不整形
〃	26	直径	長径
126	31	土坑内からの竹の木検出	削除
128	31	短編	短辺

1．第１遺構面完掘状況（南から）

2．第１遺構面完掘状況（東から）

1．第２遺構面完掘状況（南から）

2．第２遺構面完掘状況（東から）

1．アカホヤ火山灰堆積状況（北壁）

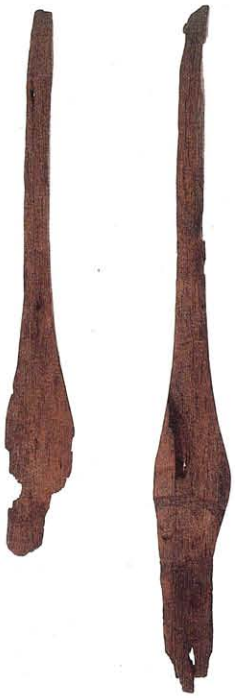
2．ＳＤ11遺物出土状況（北東から）

ＳＤ10・11出土土器

ＳＤ10・11出土木器

ＳＤ10・11出土木器（１）

SD10・11出土木器（2）



ＳＤ10・11出土木器（３）

は　じ　め　に

未曾有の阪神大震災の被害を受けた皆様に深くお悔やみを申し上げます。

高松市は地震も少なく、大洪水もない、温暖な地域と考え、安心していた市民も対岸の火事でなく目をさまされた思いだと存じます。

ところで、井手東Ⅰ遺跡でも自然災害の痕跡が検出されました。約6,000年前の火山灰、アカホヤの検出でございます。聞きますところによると、噴火の中心は現在の鹿児島県トカラ列島硫黄島で、南九州の縄文人は全滅しただろうと考えられている大災害だそうです。

遠く離れたここ高松の地でも、60cmほどの火山灰が降り積もったのではないかといわれています。おそらく、草木は枯れ、緑は失われたことでしょう。その記録を井手東Ⅰ遺跡は留めていました。

その他、付近の発掘では、地震による液状化現象の痕跡である噴砂も確認いたしました。さらに、そもそも地層が洪水に起因する土砂の堆積であります。

発掘調査の結果により、その土地の性質、そこが受けた災害の履歴等がわかることが多々あります。それらの結果を生かし災害に備えるための予備知識を蓄積することが求められる時代が、そこにやってきているのではないか。文化財調査の新たな命題ではないでしょうか。

そのようなことを考慮して文化財行政を進めたいと考えております。

最後に、四国地方建設局をはじめとした関係者の皆様方に紙面ではございますが、厚く御礼申し上げます。

平成７年３月

高松市教育委員会
教育長　山口寮弐

例　　言

1　本書は、一般国道11号高松東道路建設にともなう埋蔵文化財発掘調査報告書の第４冊で、高松市伏石町に所在する井手東（いでひがし）Ｉ遺跡の調査報告を収録した。

2　本事業は、高松東道路、上天神－前田東間８kmのうち太田第２土地区画整理事業地に含まれる約1.7kmを対象とする。

3　本事業は、建設省四国地方建設局から高松市が受託し、高松市教育委員会が発掘調査を実施した。

4　事業費は、建設省四国地方建設局が全額を負担した。

5　調査にあたって下記の関係諸機関ならびに方々の助言と協力を得た。記して謝意を表したい。

建設省四国地方建設局　　建設省四国地方建設局香川工事事務所
香川県教育委員会　　財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
高松市都市開発部太田第２土地区画整理事務所

香川大学　丹羽佑一　東京大学　石上英一　京都大学　金田章裕
奈良国立文化財研究所　工楽善通　上原真人　牛嶋茂　深澤芳樹　立命館大学　高橋学
放送大学　笠原　潔　（敬称略）

6　本書の報告にあたっては、次の方々に分析および鑑定を依頼した。

木製品樹種鑑定	金沢大学教養部生物学教室	鈴木山男
	森林総合研究所木材利用部	能城修一
火山灰分析	㈱京都フィション・トラック	檀原　徹
プラントオパール分析鑑定	皇学館大学	外山秀一

（敬称略）

7　調査全般を通じて、末光甲正氏、中西克也氏の協力を得た。

8　本遺跡の調査および整理作業は、文化財係長藤井総括のもと山本、中西、山元があたった。本報告書の執筆分担は第2章を山本が、第3章第2節2を中西が執筆した以外は山元が行った。全体の編集は山本、中西の協力を得て、山元が行った。

9　写真は、遺構については調査担当者が撮影し、遺物写真については写房　楠華堂（楠本真紀子）に委託した。

10　本遺跡の調査における各業務の委託先は次のとおりである。

遺跡写真測量業務	朝日航洋株式会社
出土木製品保存処理業務	財団法人元興寺文化財研究所

11　本書で使用する遺構略号は次のとおりである。

ＳＢ　掘立柱建物　　ＳＡ　棚列　　ＳＫ　土坑　　ＳＥ　井戸　　ＳＤ　溝状遺構
ＳＲ　自然河川　　ＳＸ　性格不明遺構

12　本文の挿図中で国土地理院発行の5万分の1地形図「高松」、「高松南部」、「丸亀」、「玉野」を一部改変して使用した。

13　発掘調査で得られた資料のすべては、高松市教育委員会で保管している。活用されたい。

14　井手東Ｉ遺跡の概要はこれまでに下記の文献によって一部報告をおこなっているが、いずれも調査終了時点のものや、整理作業中の成果であり、その後の整理作業の中で事実誤認が確認されたり、新しい成果が加わり遺構・遺物に対しての見解に違いがでてきている。これらの相違については、今回の報告をもって正式なものとする。

・山元敏裕　「井手東Ｉ遺跡」『香川県埋蔵文化財調査年報　平成3年度』香川県教育委員会　1992.3
・山元敏裕　「井手東Ｉ遺跡」『讃岐国弘福寺領の調査』　高松市教育委員会　1992.3
・『むかしの高松　第3号』　高松市教育委員会　1992.3

井手東Ⅰ遺跡発掘調査報告書

目　　次

第一分冊　本文編

はじめに
例　　言
第１章　調査の経緯と経過…… 1
　第１節　調査の経緯…… 1
　第２節　調査の経過…… 2
　第３節　整理作業の経過…… 7
第２章　地理的環境・歴史的環境…… 11
　第１節　地理的環境…… 11
　第２節　歴史的環境…… 13
第３章　発掘調査の成果…… 21
　第１節　調査区の設定…… 21
　第２節　遺跡の概要と層序…… 22
　第３節　アカホヤ火山灰降灰前後の遺構…… 32
　第４節　弥生時代中期・後期の遺構と遺物…… 35
　第５節　古代から中世の遺構と遺物…… 115
　第６節　近世の遺構と遺物…… 117

第二分冊　自然化学分析・考察編

第４章　自然化学分析・考察
　第１節　井手東Ⅰ遺跡出土の木製品の樹種
　第２節　井手東Ⅰ遺跡出土火山灰分析
　第３節　井手東Ⅰ遺跡におけるプラント・オパール分析結果
　第４節　調査のまとめ
第５章　おわりに

第三分冊　観察表・写真図版編

観察表

写真図版

付　図

挿　図　目　次

第１図　試掘トレンチ設定図…… 2
第２図　高松東道路路線内遺跡
調査位置図……3～4
第３図　調査位置図……11
第４図　遺跡分布図……15～16
第５図　調査区設定図……21
第６図　井手東Ｉ遺跡周辺微地形図…23～24
第７図　遺構配置図(1)
アカホヤ火山灰降灰前後……25～26
第８図　遺構配置図(2)弥生時代……27～28
第９図　遺構配置図(3)古代～近世……27～28
第10図　調査区内基本土層図……29
第11図　アカホヤ火山灰検出範囲図……32
第12図　ＳＤ15土層図……33
第13図　ＳＤ16土層図……33
第14図　ＳＤ17土層図……33
第15図　ＳＤ19土層図……34
第16図　ＳＤ09土層図……35
第17図　ＳＤ09出土遺物実測図……35
第18図　ＳＤ10・11地区割図……36
第19図　ＳＤ10・11土層図……37～38
第20図　ＳＤ10・11出土
遺物実測図(1)広口壷……40
第21図　ＳＤ10・11出土
遺物実測図(2)広口壷……41
第22図　ＳＤ10・11出土
遺物実測図(3)広口壷……42
第23図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(4)
長頸壷・無頸壷……43
第24図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(5)
壷体部……44
第25図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(6)
壷底部……45
第26図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(7)
甕……46
第27図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(8)
甕……47
第28図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(9)
甕……48
第29図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(10)
甕……49
第30図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(11)
甕……50
第31図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(12)
甕底部……51
第32図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(13)
高坏、鉢……52
第33図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(14)
鉢……53
第34図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(15)
鉢底部……54
第35図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(16)
石鏃……56
第36図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(17)
石鏃……57
第37図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(18)
石庖丁、石鎌……58
第38図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(19)
楔形石器……59

第39図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(20)
石鏃・石槍……59
第40図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(21)
削器……60
第41図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(22)
石斧・敲石……61
第42図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(23)
砥石・石皿……62
第43図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(24)
土製紡錘車……63
第44図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(25)
斧柄……65
第45図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(26)
箆状木製品……66
第46図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(27)
広鍬……67
第47図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(28)
狭鍬……68
第48図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(29)
又鍬・横鍬……70
第49図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(30)
曲柄平鍬……71
第50図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(31)
曲柄又鍬……72
第51図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(32)
農具柄……74
第52図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(33)
鋤……75
第53図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(34)
臼・竪杵……77
第54図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(35)
作業台……78
第55図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(36)
機織具……79
第56図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(37)
弓……80
第57図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(38)
杓子形木器……81
第58図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(39)
高杯・片口……83
第59図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(40)
琴……84
第60図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(41)
祭祀具……85
第61図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(42)
箱部材……86
第62図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(43)
編物……87～88
第63図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(44)
杭……90
第64図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(45)
杭２……92
第65図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(46)
先端加工棒……93
第66図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(47)
先端加工木……94
第67図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(48)
先端加工木２……95
第68図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(49)
有頭棒……96
第69図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(50)
両端加工木１……97
第70図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(51)
両端加工木２……98

第71図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(52)
両端加工木３……99
第72図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(53)
板材…… 100
第73図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(54)
板材…… 101
第74図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(55)
板材…… 102
第75図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(56)
有孔板…… 103
第76図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(57)
加工棒…… 104
第77図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(58)
加工木…… 105
第78図　ＳＤ10・11出土遺物実測図(59)
庖丁形木製品他…… 106
第79図　ＳＤ14遺物出土状況図……109～110
第80図　ＳＤ14出土遺物実測図…… 111
第81図　遺構外出土遺物実測図(1)…… 112
第82図　遺構外出土遺物実測図(2)…… 113
第83図　ＳＤ01断面図…… 115
第84図　ＳＤ01出土遺物実測図…… 115
第85図　調査区西端包含層
出土遺物実測図…… 116
第86図　ＳＢ01実測図…… 117
第87図　ＳＢ02実測図…… 118
第88図　ＳＡ01実測図…… 118
第89図　ＳＡ02実測図…… 119
第90図　ＳＡ02柱材実測図…… 119
第91図　ＳＫ02土層図…… 119
第92図　ＳＫ02出土遺物実測図…… 119
第93図　ＳＫ03土層図…… 120
第94図　ＳＫ04土層図…… 120
第95図　ＳＫ04実測図…… 120
第96図　ＳＫ04出土遺物実測図…… 120
第97図　ＳＫ07土層部…… 121
第98図　ＳＫ07出土遺物実測図…… 121
第99図　ＳＫ08実測図…… 122
第100 図　ＳＫ08出土遺物実測図…… 122
第101 図　ＳＫ10出土遺物実測図…… 123
第102 図　ＳＫ11土層図…… 123
第103 図　ＳＫ11出土遺物実測図…… 123
第104 図　ＳＫ13出土遺物実測図…… 124
第105 図　ＳＫ16土層図…… 124
第106 図　ＳＫ16出土遺物実測図…… 124
第107 図　ＳＫ17出土遺物実測図 ……125
第108 図　ＳＫ26土層図…… 126
第109 図　ＳＫ26出土遺物実測図…… 126
第110 図　ＳＫ27実測図…… 127
第111 図　ＳＫ28出土遺物実測図…… 127
第112 図　ＳＫ29・30実測図…… 128
第113 図　ＳＫ29・30出土遺物実測図… 128
第114 図　ＳＥ01出土遺物実測図…… 129
第115 図　ＳＤ05土層図…… 130
第116 図　ＳＤ07土層図…… 131
第117 図　ＳＤ08土層図…… 131
第118 図　ＳＤ08出土遺物実測図(1)…… 132
第119 図　ＳＤ08出土遺物実測図(2)…… 133
第120 図　遺構外出土遺物実測図…… 134

挿　表　目　次

第１表　一般国道11号高松東道路
埋蔵文化財調査事業工程表……１
第２表　整理作業工程表……７

巻頭図版目次（カラー）

図版１－１　第１遺構面完掘状況（南から）
－２　同　（東から）
図版２－１　第２遺構面完掘状況（南から）
－２　同　（東から）
図版３－１　アカホヤ火山灰堆積状況（北壁）
－２　ＳＤ11遺物出土状況（北東から）
図版４　ＳＤ10・11出土土器
図版５　ＳＤ10・11出土木器
図版６　ＳＤ10・11出土木器(1)
図版７　ＳＤ10・11出土木器(2)
図版８　ＳＤ10・11出土木器(3)

写　真　目　次

写真１　ＳＤ10発掘作業風景…… ５
写真２　ＳＤ11出土遺物実測作業…… ６
写真３　ＳＤ10・11出土遺物　紡錘車……63
写真４　遺構外出土石器…… 114

付　図　目　次

付図１　遺構配置図(1)
アカホヤ火山灰降灰前後
付図２　遺構配置図(2)　弥生時代
付図３　遺構配置図(3)　古代～近世
付図４　調査区内土層断面図
付図５　ＳＤ10・11遺物出土状況(1)
付図６　ＳＤ10・11遺物出土状況(2)
付図７　ＳＤ10・11遺物出土状況(3)
付図８　ＳＤ10・11遺物出土状況(4)
付図９　ＳＤ10・11遺物出土状況(5)

第 1 章

調査の経緯と経過

第１節　調査の経緯

昭和53年の一般国道11号高松東道路の都市計画決定にともない、香川県都市計画審議会は、昭和62年２月２日、路線周辺の計画的な市街化および都市基盤整備をすすめるとともに、民間事業の活性化を目的として香川中央都市計画事業太田第２土地区画整理事業の施行を決定した。事業は太田、木太、林、多肥の４地区にまたがる約360haにおよび、この範囲に含まれる高松東道路約1.7km分の用地も区画整理事業の換地処理によって確保されることとなったため、この区間の東道路用地については、高松市教育委員会が発掘調査を実施することで、昭和62年12月15日に四国地方建設局、香川県教育委員会、高松市の三者間で覚書が取り交わされた。

現地調査は平成元年夏の区画整理事業仮換地指定を受けて着手し、浴・長池および浴・松ノ木部分の試掘調査を実施して遺跡の範囲ならびに性格を確定した。そして８月15日から平成２年３月20日で浴・長池遺跡の発掘調査を実施した。

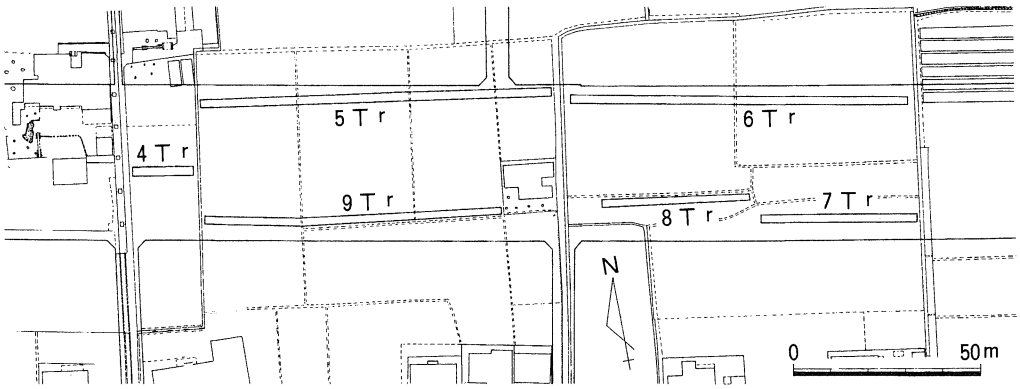
そして平成２年度以降は、前年度の試掘調査で遺跡の所在と範囲が確定しているものの発掘調査と、新たに用地が確保された部分の試掘調査を平行して実施し、平成４年９月末日をもって東道路予定地すべての発掘調査を終了した。

整理作業は、現地での発掘調査が進行している平成３年度後半から分類基礎整理に着手し、発掘調査が終了した平成４年10月から本格的な作業にかかった。そして平成５年３月に第１冊目として浴・長池遺跡の報告書を刊行し、昨年度までに、浴・松ノ木遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡の刊行を終了している。今年度は、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡の報告書の刊行を予定しており、平成７年度中に残る居石遺跡、蛙股遺跡の報告書の刊行をもって事業が完了する。

<table>
<tr><th>年　度</th><th>試　掘　調　査</th><th>発掘調査</th><th>整理作業</th><th>報 告 書 刊 行</th></tr>
<tr><td>平成元</td><td>浴・長池、浴・松ノ木</td><td>浴・長池</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>2</td><td>浴・長池Ⅱ
井手東Ⅰ、Ⅱ、居石</td><td>浴・松ノ木
浴・長池Ⅱ</td><td></td><td></td></tr>
<tr><td>3</td><td>蛙股</td><td>井手東Ⅰ、Ⅱ
居石、蛙股</td><td>浴・長池</td><td></td></tr>
<tr><td>4</td><td></td><td>蛙股</td><td>浴・松ノ木</td><td>浴・長池</td></tr>
<tr><td>5</td><td></td><td></td><td>浴・長池Ⅱ
井手東Ⅰ、Ⅱ</td><td>浴・松ノ木
浴・長池Ⅱ</td></tr>
<tr><td>6</td><td></td><td></td><td>居石、蛙股</td><td>井手東Ⅰ、Ⅱ</td></tr>
<tr><td>7</td><td></td><td></td><td></td><td>居石、蛙股（予定）</td></tr>
</table>

第１表　一般国道11号高松東道路埋蔵文化財調査事業工程表

第２節　調査の経過

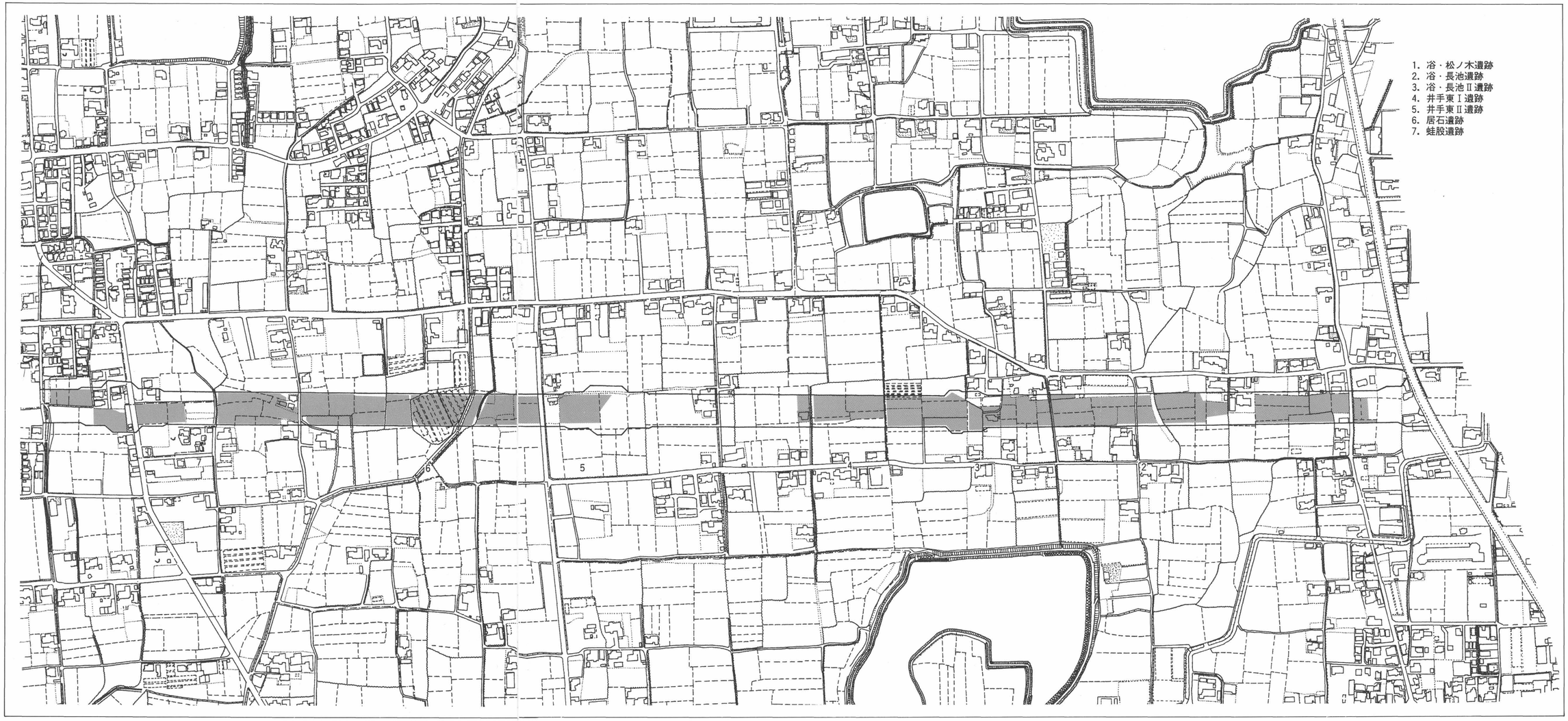


第１図　試掘トレンチ設定図

井手東Ⅰ遺跡の試掘調査は、平成２年度の仮換地指定を受けて確保された東道路予定地約40,000㎡について、平成２年７月30日から８月24日にかけて実施した。試掘による実掘面積は1,674㎡である。調査は、従来どおり東道路予定地のほぼ境界に路線に沿って試掘溝を設定し、バックホーによって掘削を行いながら土層観察等によって遺跡の有無を判断した。試掘範囲内には最終的に21本の試掘溝を設定し、掘削を行った。その内、井手東Ⅰ遺跡の調査範囲である４～９Trにおいて溝状遺構、幅30～40ｍの旧河道（埋没谷状地形）を検出した。谷部内には黒色シルト層が累積しており、何層かの土壌層も確認できた。また、黒色シルトの土壌層中には、火山灰（アカホヤ火山灰）の堆積が確認され、アカホヤ火山灰降灰前後の遺構の存在の可能性もでてきた。

以上の試掘成果を検討した結果、細かな調査対応が必要であると考えられ、従来の工事請負方式にかえて直営方式で調査を実施することになった。

現地での発掘調査は平成３年３月６日～９月18日にかけて実施し、無事終了することができた。最終的な調査面積は4,120㎡である。その結果、当初想定していなかった弥生時代中期の溝から土器、石器とともに多量の木器および木製品を確認し、これらの木質遺物の遺存状態も良好であったため、当初を上回る成果を得た。中でも木器は、多量の農耕具をはじめ、県内では類例がなく、全国的にも確認例の少ない琴が出土したことは注目される。また、同時に出土した土器から弥生時代中期中葉の一括遺物として扱えることから、九州と近畿の中間地点である当地域の木器の変遷を考えるための貴重な成果となった。出土したこれらの木器については、重要なものから記録作成後、全容がわかるものを中心に順次保存処理を行った。処理の終了したものの一部は、高松市歴史資料館にて公開している。発掘調査の経過については調査日誌抄を参照されたい。



第２図　高松東道路路線内遺跡調査位置図（高松市教育委員会調査分）

調査日誌抄

（平成２年度）

3. 3. 6　本日より作業員による就労開始。調査区西端より重機による床土掘削。

8　調査区西端、灰黄色シルト（包含層）除去。

15　SD01検出状況撮影、遺構掘り下げ終了。

18　調査区東半上面精査。溝、ピット等確認。

22〜23　天候不良の為、現場作業を中止する。

26　北側側溝壁面精査、SD01（北側）平面実測（Ｓ＝１／50）終了。

27　立命館大学　高橋　学氏来現。今後の調査について御教示を得る。本日で今年度の作業を終了する。

（平成３年度）

3. 4. 16　平成３年度の現場作業を開始する。重機による床土除去。

22　作業員の就労を開始する。

23　査区東半SD14検出。弥生時代後期末頃の土器が出土。

25　SD14完掘。（北部）

5. 9　谷状地形上面精査。近世頃と考えられる溝、土坑などを多く検出。

13　SD14（南部）遺物出土状況図（Ｓ＝１／10）作成。

20　上面精査継続中。

27　上面精査の終了した北東部、北西部について平板による遺構配置図作成。

30　検出した近世遺構掘り下げ中。

6. 4　遺構掘り下げ中。各遺構断面写真、実測図継続。

10　遺構掘り下げ継続中。調査区南部で確認した円形土坑内においてタガ状の組物確認。座棺の可能性。

11　航空測量の為の清掃。遺構掘り下げ、写真撮影、実測図継続中。

12　第１回航空測量終了。第１遺構面完掘状況写真撮影。

17　雨天のため、現場作業を中止する。

19　十字トレンチにおいて、確認した弥生時代中期頃と考えられる溝の平面検出を行う。

20　雨天のため、現場作業を中止する。

21　SD10, 11の平面検出継続中。上層部の遺構が深く、遺構検出に手間取る。

26　SD10, 11の検出を終了。検出状況写真撮影。

27　SD10, 11掘り下げ開始。

写真１　ＳＤ10発掘作業風景

7. 3　用水路から調査区に水が流入。一日中排水作業。

4～ 5　天候不順のため、現場作業を中止する。

6　立命館大学　高橋　学氏来現。当遺跡における地形分析の為。

10　SD11Ⅰ～Ⅳ区掘り下げ中。Ⅳ区付近にて琴、鍬、編物を含む木質遺物を多量に確認。出土状況写真、図面を作成の後、一部重要な物取上げ。（S＝1／100）
北側トレンチ土層断面図終了。SD10Ⅳ区遺物出土状況図作成。

12　調査区南東部分宅地跡、重機による表土掘削。

17　宅地跡部分SD01検出終了。SD11Ⅲ～Ⅳ区掘り下げおよび出土状況図作成継続中。

19　SD10掘り下げ中。SD11同様多量の土器、木器を確認。（箆状木製品、鍬、加工木等）

写真２　ＳＤ11出土遺物実測作業

22　SD10遺物出土状況図および出土状況写真撮影。

30　SD10完掘状況写真撮影。

31　第２回航空測量の為の清掃。

8. 1～ 3　SD10, 11出土木製遺物写真撮影（牛嶋茂氏）。

2　第2回航空測量。SD10, 11完掘状況アカホヤ火山灰検出状況写真撮影。

7　アカホヤ火山灰除去。アカホヤ火山灰下の溝状遺構検出中。アカホヤ火山灰を切る（SD15）掘り下げ。遺物無し。

11　SD11Ⅰ区東端にて竪杵出土。調査区。

8　アカホヤ火山灰層下で確認した溝状遺構掘り下げ中。遺物無し。

21　SD10（仮設道部分）掘り下げ中。谷状地形最終面まで重機により掘り下げ中。

23　SD10　把手付容器他木製遺物、土器等出土。

27　SD10　遺物出土状況図作成の後、遺物取上げ。

28　第３回航空測量（最終遺構面）無事終了。完掘状況写真撮影。

29　調査区内の土層断面図作成。

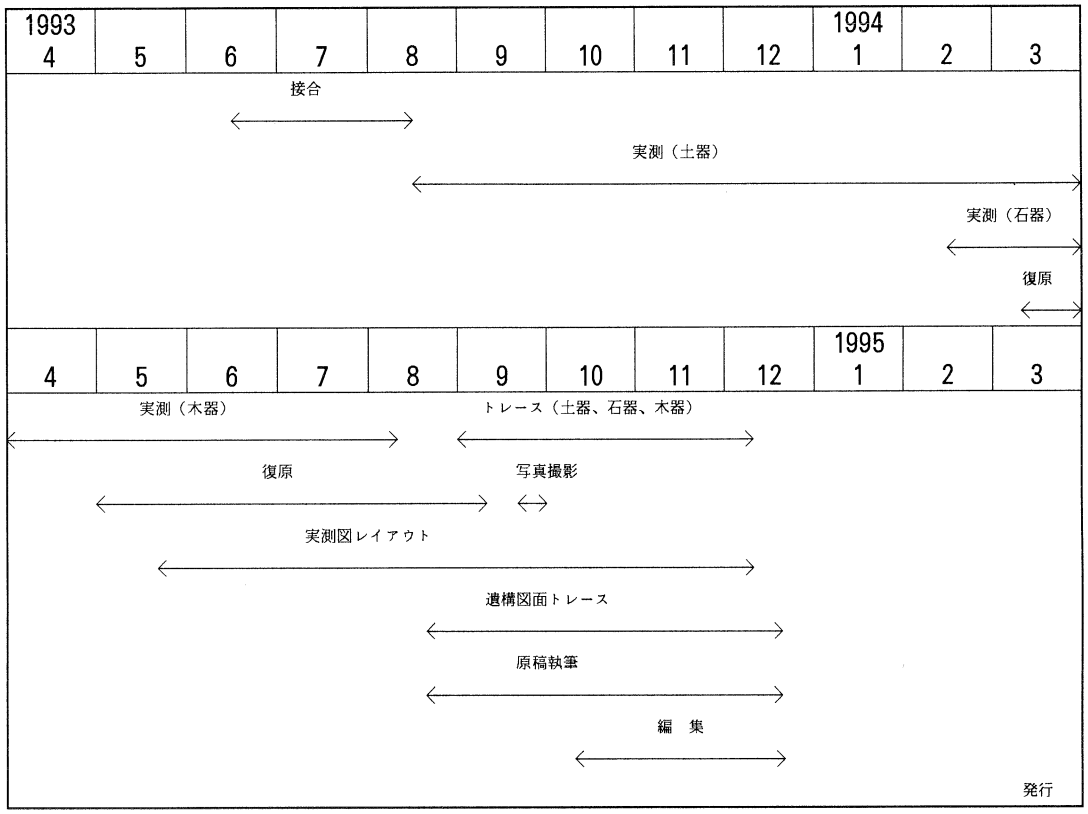
9. 9　SD11東西ベルト部分掘り下げ終了。調査区内の分析用土壌サンプル採集。

12　分析用土壌サンプル採集。

18　ＳＤ11東西ベルト部分掘り下げ終了。土状況図、出土状況写真撮影の後、遺物取上げ。完掘状況写真撮影。本日にて井手東遺跡の現場作業を終了する。

第３節　整理作業の経過

整理作業は、浴・松ノ木遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡の整理作業が終了した後、出土した土器の接合作業から開始した。整理作業は、調査担当者を中心として、当初、整理補助員５名の援助を受けて実施していたが、平成６年５月から１名増員し作業能率を高めるよう努力した。経過については別表に示したとおりである。整理作業は当初、出土遺物が少ないこともあり、早急に完了する予定であったが、本格的に作業を開始した後、出土遺物を再度検討した結果、特に木器の残りが良好で、点数についても当初の予想を上回っていた。しかも、近県にはこの時期の良好な一括遺物がなく、多量の遺物を図化する必要が生じた。出土遺物の実測を行っている整理補助員が、木器の実測に慣れていないこともあり、当初予定した日程では終了せず、日程を大幅に超過することとなった。その後、時間がたつ毎に作業能率も上がり、何とか、ここに報告書の作成を完了することができた。報告書の作成に携わっていただいた多くの方々に感謝したい。



第２表　整理作業工程表

なお、発掘調査および整理作業の関係者は次のとおりである。

発掘調査（平成３年度）

教育長	三木　義夫			
教育部長	多田　　孜			
教育部次長	増田　昌三			
文化振興課長	多田　恒男			
文化振興課長補佐	亀井　　俊			
	藤田　容三			
文化財係長	藤井　雄三			
文化財係主事	山本　英之			
	川畑　　聰	文化振興課	中西　克也	
	山元　敏裕	非常勤嘱託	岡田　信子	
太田第２土地	小坂　信夫		玉田　和子	
区画整理事務所	為定　典生		金森　澄子	
			井口　敬三	
			宮内　秀樹	

発掘調査（平成４年度）

教育長	三木　義夫（～Ｈ４．９）			
	山口　寮弐（Ｈ４．10～）			
文化部長	増田　昌三（～Ｈ４．９）			
	上里　文麿（Ｈ４．10～）			
文化部次長	上里　文麿（～Ｈ４．９）			
文化振興課長	多田　恒男			
文化振興課長補佐	藤田　容三			
文化財係長	藤井　雄三			
文化財係主事	山本　英之	文化振興課		
	山元　敏裕	非常勤嘱託	中西　克也	井口　敬三
太田第２土地	小坂　信夫		岡田　信子	宮内　秀樹
区画整理事務所	為定　典生		玉田　和子	松田　重治
			金森　澄子	

整理作業（平成５・６年度）

教育長	山口　寮弍
文化部長	上里　文麿（～Ｈ６．３）
	宮内　秀起（Ｈ６．４～）
文化部次長	宮内　秀起（～Ｈ６．３）
	中村　栄治（Ｈ６．４～）
文化振興課長	多田　恒男（～Ｈ６．３）
文化振興課長補佐	藤田　容三
文化財係長	藤井　雄三
文化財係主事	山本　英之
	山元　敏裕
太田第２土地	為定　典生（～Ｈ５．４）
区画整理事務所	小田　　薫（Ｈ５．５～Ｈ６．４）
	西池　孝博
文化振興課	岡田　信子　　吉本みどり
非常勤嘱託	竹林　弘子　　出石真理子
	井口夫美子　　佐々木由美子（～Ｈ５．７）
	大川　玲子　　山中　規子（Ｈ６．４～）

発掘調査作業に携わっていただいた方々

井口　政一	石川　悦子	井下　嘉一	一村　正治	岩田　　明	上野きみ子
大森　正智	小笠原正義	岡田　充弘	鎌田　春子	鎌野キクエ	亀井　正博
川田ミツコ	北村　　実	櫛田　英子	久保　重男	久保キミ子	久保田常太郎
国宗　敏一	黒川　　巌	黒川ヤス子	酒井　俊子	篠原　密夫	島田　琢治
嶋本石太郎	高木　繁夫	高橋キヨ子	高橋　豊子	田中　朝弘	谷　　繁雄
種田千寿子	中川　經子	中西　弥生	中村　芳子	西尾　　馨	林　テル子
樋口ヤス子	藤井サヨ子	細谷スミエ	掘上　幸子	掘上真理子	前田　繁一
松本　照雄	三宅　正宏	松尾マサエ	村川ツヤ子	村川　照美	森　　敏雄
森　　當子	森延　将司	森本シゲ子	森安　秀幸	山内ウメ子	山田　君子
吉峰　　茂					

整理作業に携わっていただいた方々

王　　姿人	小野澤正子	塩崎　誠司	西中　一伸	掘　　純子	松田　重治
松野　裕子	山中　規子				

第 2 章

地理的環境・歴史的環境

第１節　地理的環境

第３図　調査位置図

高松市は、四国の北東部、香川県のほぼ中央部に位置する。瀬戸大橋架橋前はＪＲ連絡船、国道フェリー等で本州と連結し、四国の表玄関の役割を果たし、架橋後も中央省庁の出先や大手企業の地方支店が多く集中し、四国の中枢管理機能を担う地方都市として33万人余の人口が集中している。

瀬戸内海沿岸に東西に連なる香川県の平野部は、一般に讃岐平野として総称されるが、実際は東から長尾平野、高松平野、丸亀平野、三豊平野といった地域単位の小平野に細分でき、いずれも南部の阿讃山脈に源を発する中小河川によって形成された沖積地である。このうち高松平野は、北を瀬戸内海、東を立石山系、南を阿讃山脈、西を五色台山塊に限られた総面積約19㎢、丸亀平野に続く規模をもち、大部分が高松市の行政区域に含まれる。

平野の境界を画する低位山塊及び屋島、紫雲山等の島状の独立丘陵は、侵食の容易な花崗岩層（三豊層群）が風化侵食に抵抗の強い安山岩層に覆われたことによって侵食解析から取り残されて形成された、メサ、またはビュートと呼ばれるもので、讃岐ののどかな田園風景の象徴

のひとつとなっている。

高松平野には、西から本津川、香東川、春日川、新川といった河川が瀬戸内海に向けて北流しているが、平野形成の大部分は塩江町に源を発する香東川に負っている。ただ春日川以東の部分のみが春日川、新川といった小河川の影響下になるものの扇状地の発達は見られない。

現在、石清尾山塊の西側を直線状に北流する香東川は、17世紀はじめの河川改修によるもので、それ以前には石清尾山塊の南側から回り込んで、平野中央部を東北流するもう一本の主流路が存在していた。この旧流路は、現在では水田地帯及び市街地の地下に埋没してしまっているが、空中写真等から、林から木太地区にかけての分ケ池、下池、長池、大池、ガラ池を結ぶ流路等数本の旧河道が知られており、発掘調査でもその痕跡が確認されている。なお17世紀の廃川直前の流路は、御坊川として今でもその名残をとどめている。

これらのため池は、年間1000㎜前後と降水量に乏しい讃岐平野において農業用水確保のために不可欠なものであるが、林、多肥地区周辺では扇状地末端部にあたることから、ため池に加えて出水と呼ばれる自噴地下水脈の利用が古代から盛んで、両者を併用した特徴的な配水網と厳格な水利慣行を伝えてきた。これらの水源毎の受益範囲（水掛）は、近世以降の三条池、野田池等、微高地上に四周に堤防を巡らせ堤防の全部または一部が条里の阡陌に沿った皿池や山麓部の三谷三郎池、神内池といった大規模なため池が整備されてからも大きな変化なく踏襲されてきた。しかし、昭和50年の香川用水の通水によって、この一帯は三郎池の受益範囲に取り込まれ、農業用水確保の不安が払拭された反面、大池、長池等のため池が三郎池の子池となり、地元水源を核とした水利慣行が急速に消滅するとともに、ため池や出水の水源自体もその役割を失いつつある。

今回高松東道路の横断によって一連の調査を実施した太田、林地区は、地形的には扇状地の末端部にあたり、香東川の本流に接するとともにまさにこの“出水”に古くから農業と生活の多くを依存してきた地域であるといえる。

現在、東道路建設（平成５年開通）をはじめとする区画整理事業、空港跡地開発等に伴う大規模発掘調査によって、弥生時代から井戸、出水の確認例が頻繁で、水田も弥生時代期から大規模に開発されていたことが明らかになりつつある。

参考文献

「讃岐国弘福寺領の調査」　高松市教育委員会　1992

「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊　浴・長池遺跡」高松市教育委員会　1993

「　同　上　　第二冊　浴・松ノ木遺跡」　高松市教育委員会　1994

「　同　上　　第三冊　浴・長池Ⅱ遺跡」　高松市教育委員会　1994

第２節　歴史的環境

井手東Ⅰ遺跡が所在する太田、林地区周辺では、ここ10年足らずの開発ラッシュによって多くの遺跡が発掘されつつあり、その数は日を追って増加しているといえる状況にある。これらの大部分は、現在正式報告の刊行に向けて作業が進行中であるため、ここでは現段階で明らかとなっている調査成果を中心として本遺跡周辺（太田、林地区）の遺跡の分布を概観する。

縄文時代では、大池遺跡（木太町）[1]で草創期の有舌尖頭器２点の採集が報告されている。また、地形環境の方面では本書に報告する井手東Ⅰ遺跡（伏石町）、蛙股遺跡[2]で現地表下約40〜70cmにアカホヤ火山灰の自然堆積層が確認されており、縄文中期の平野の形成課程を窺うことができる。

縄文晩期では、林・坊城遺跡（六条町）[3]、浴・松ノ木遺跡（林町）[4]、浴・長池遺跡（林町）[5]、浴・長池Ⅱ遺跡（伏石町）[6]、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡（伏石町）[7]、居石遺跡（伏石町）[8]、上天神遺跡（三条町）[9]が確認された。これらのうち、晩期でも前半に属する居石遺跡と井手東Ⅰ遺跡、上天神遺跡以外は、旧河道中に弥生前期初頭の土器と混在して出土し、両時期が密接に連携していることが改めて窺える。

弥生時代前期になると、縄文晩期から連続する前述の遺跡に加えて天満・宮西遺跡（松縄町）[10]、空港跡地遺跡（林町）[11]、大池遺跡（木太町）、松縄下所遺跡（松縄町）[12]等が新たに出現する。中でも浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡ではこの時期から自然堤防上および後背湿地に整った小区画の水田が営まれており、早い時期から稲作文化が受け入れられていたことが知られるほか、天満・宮西遺跡では数棟の円形住居を囲む直径約300ｍと推定される周溝が検出されている。

続く弥生中期前半では、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、井手東Ⅰ遺跡、凹原遺跡（多肥下町）[13]、多肥松林遺跡[14]、日暮・松林遺跡[15]がみられるにすぎない。このうち、浴・長池遺跡では４棟の竪穴住居、６棟の掘立柱建物跡、２基の周溝墓遺跡に加えて大量の河川投棄土器群が出土し、凹原遺跡でも石器製作工房と推定できる竪穴住居１棟を確認する。最近の調査例では多肥松林遺跡、日暮・松林遺跡が10数棟のまとまった住居跡と河川廃棄の遺物群を伴出するが、そのほかでは大規模な集落を想定させるような状況にはなく、平野全体からみれば質量ともに希薄な時期である。

中期後半も遺跡数としては中期前半に引き続いて希薄である。周辺丘陵部では前田東中村遺跡[16]、久米池南遺跡[17]、中山田遺跡（池田町）[18]等があるが、平野部では浴・長池遺跡、上天神遺跡、空港跡地遺跡が知られるのみである。

弥生時代後期になると、遺跡の状況は一変し、天満・宮西遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、空

港跡地遺跡のような10数棟の住居跡と大量の廃棄土器を伴う集落が各地に営まれ、そのほかにも平野部山間部を問わずに遺跡数が一気に増加するのである。前述の遺跡の他に代表的なものとしては、平野部では太田下須川遺跡（太田下町）[19]、蛙股遺跡（伏石町・太田下町）、居石遺跡、井手東Ⅰ遺跡、井手東Ⅱ遺跡、浴・長池遺跡、浴・長池Ⅱ遺跡、林・坊城遺跡、六条上所遺跡（六条町）[20]、松縄下所遺跡、キモンドー遺跡（伏石町）[21]、一角遺跡[22]等が知られている。

古墳時代は、集落遺跡では太田下須川遺跡、水田、旧河道では浴・松ノ木遺跡、居石遺跡が知られるのみである。その一方で古墳は、発生期と考えられる諏訪神社本殿古墳（東山崎町）[23]、鶴尾神社４号墳（西春日町）[24]をはじめとして平野周辺の丘陵上に、古墳時代の全期間にわたって継続的に展開しており、今後これらに対応する集落の確認が課題となる。古墳の中で、平野部に独立して立地するものに木太町の白山神社古墳[25]がある。竪穴式石室を主体部とする円墳で、５世紀前半頃の築造と推定されている。古墳の標高約２ｍを測り、これまで当時の海岸線と推定されている標高５ｍラインよりも低位にあるため、古墳時代の高松平野の地形環境に再考を促すという面でも注目される遺跡である。

古代では、条里遺構と古代寺院跡が注目される。

高松平野の条里分布は、平野南縁部を東西に貫く南海道とこれに直交する山田・香川両郡の直線郡界線を基準に敷設されたことが知られている。これらは、最近までは用水路、里道、水田区画によっても容易に復原できたが、今日急速にその姿を失いつつある。

その一方で条里遺構の確認例は増加し、浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、井手東Ⅰ遺跡、蛙股遺跡、上天神遺跡、凹原遺跡、等で条里坪界線にあたると思われる遺構を検出している。同様に浴・長池Ⅱ遺跡では、山田・香川の郡界線にあたる部分に約６ｍの間隔を置いて平行する２本の溝状遺構を検出しているほか、松縄下所遺跡では南北200ｍにわたって貫通する道路状遺構と３ヶ所の交差点が条里区画に重なっていることが明らかになった。これらの成果には、弘福寺領讃岐国山田郡田図をはじめ弘福寺関係文書等の文献方面からの研究に負うところが大きいが[26]、埋蔵文化財の立場でもようやくこういった種類の遺跡が調査の対象として定着してきた結果である。これらの条里遺構の多くは平安時代から鎌倉時代の遺物を含み、一般に条里の施行期とされる奈良時代とはかなりの時期の隔たりがあるが、蛙股遺跡、松縄下所遺跡のように奈良時代を中心とした遺物の出土をみた遺跡もあり、条里地割の施行時期と存続期間を解明できるデータが揃いつつある。

古代寺院跡では、宝寿寺跡（前田廃寺－前田東町）[27]、山下廃寺（新田町）[28]、下司廃寺（東植田町）[29]、高野廃寺（川島本町）[30]、拝師廃寺（上林町）[31]、坂田廃寺（西春日町）[32]、多肥廃寺（多肥上町）[33]、勝賀廃寺（香西西町）[34]等が平野部を中心に知られている。正式の発掘調査

第４図　遺跡分布図（１：５０，０００）

を経たデータがないため、寺域、伽藍等の全容がわかるものはないが、現在でも礎石や遺物の散布が見られる。なかでも下司廃寺の川原寺式複弁八葉蓮華文軒丸瓦や三尊像仿仏片、坂田廃寺の金銅製釈迦誕生仏が注目され、山田郡弘福寺領の存在とも合わせて白鳳から奈良平安時代に中央政府と深い関係を持っていたことが想像できる。

中近世以降では、東道路関連の浴・長池遺跡、浴・松ノ木遺跡、弘福寺領讃岐国山田郡田図北地区比定地（木太町・林町）等で、旧河道の埋没後の凹地に中世の小規模な区画の水田層が出土しており、その後現代に至るまで連続して水田層の堆積が見られることから、この時期に現在の地形環境がほぼ形作られていたことが窺える。また東山崎・水田遺跡（東山崎町）[35]では春日川の氾濫による洪水砂層上に営まれた集落跡や耕土層が発掘され豊富な木製品が発見されているほか、現高松市美術館の紺屋町遺跡（紺屋町）[36]でも近世の陶磁器や木簡（荷札木片）が出土し、玉藻町香川県民ホールの高松城東ノ丸跡（玉藻町）[37]でも寛永年間の東ノ丸造営以降の石垣や建物礎石の遺構が出土し、往時の城下町の一端を窺うことができる。

参考文献

（1） 浜田重人　『高松市木太町大池遺跡表採の有舌尖頭器』「香川考古」第2号　香川考古刊行会　1994

（2） 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成4年度　香川県教育委員会　1993

（3） 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2冊　林・坊城遺跡」　香川県教育委員会他　1993

（4） 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第二冊　浴・松ノ木遺跡」　高松市教育委員会　1994

（5） 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第一冊　浴・長池遺跡」　香川県教育委員会　1993

（6） 「一般国道11号高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第三冊　浴・長池Ⅱ遺跡」　高松市教育委員会　1994

（7） 中西克也　「讃岐国弘福寺領の調査　第2章第3節」　高松市教育委員会　1993

（8） 山元敏裕　「讃岐国弘福寺領の調査　第2章第3節」　高松市教育委員会　1993

（9） 「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和59年度～昭和62年度　香川県教育委員会　1988

（10） 「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度　香川県教育委員会　1990
川畑聰　「讃岐国弘福寺領の調査　第2章第3節」　高松市教育委員会　1993

（11） 「空港跡地遺跡発掘調査概報」平成3年度　香川県教育委員会他　1992
「空港跡地遺跡発掘調査概報」平成4年度　香川県教育委員会他　1993

「空港跡地遺跡発掘調査概報」平成５年度　香川県教育委員会他　1994
(12)　山本英之　「讃岐国弘福寺領の調査　第２章第３節」　高松市教育委員会　1993
(13)　「香川県埋蔵文化財調査年報」平成２年度　香川県教育委員会　1991
川畑聰　「讃岐国弘福寺領の調査　第２章第３節」　高松市教育委員会
(14)　「多肥松林遺跡発掘調査概報」平成５年度　香川県教育委員会　1994
(15)　「香川県埋蔵文化財調査年報」平成５年度　香川県教育委員会　1994
(16)　「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度　香川県教育委員会　1990
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成２年度　香川県教育委員会　1991
(17)　「久米池南遺跡発掘調査報告書」　高松市教育委員会　1989
(18)　「新編香川叢書　考古編」　香川県教育委員会　昭和58年
(19)　「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和63年度　香川県教育委員会　1988
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成元年度　香川県教育委員会　1989
「香川県埋蔵文化財調査年報」平成２年度　香川県教育委員会　1990
(20)　「香川県埋蔵文化財調査年報」昭和63年度　香川県教育委員会　1988
(21)　「香川県埋蔵文化財調査年報」平成５年度　香川県教育委員会　1994
(22)　「香川県埋蔵文化財調査年報」平成５年度　香川県教育委員会　1994
(23)　「香川県埋蔵文化財調査年報」平成２年度　香川県教育委員会　1991
(24)　「鶴尾神社４号墳調査報告書」　高松市教育委員会　1983
(25)　「三谷石船古墳測量調査報告書」　高松工芸高校郷土史研究会　1992
「高松の古代文化」　高松市立図書館　昭和63年
山本英之　『白山神社古墳』「香川考古」第３号　香川考古刊行会　1995
(26)　「弘福寺領讃岐国山田郡田図比定地域発掘調査概報」Ⅰ～Ⅳ　高松市教育委員会　1988～1990・1992
「讃岐国弘福寺領の調査～弘福寺領讃岐国山田郡田図調査報告書～」　高松市教育委員会　1992
(27)　木田郡史編纂部「木田郡誌」　木田郡教育部会　1940
「高松の古代文化」　高松市立図書館　昭和63年
(28)　「古高松郷土史」　古高松郷土誌編集委員会　1977
安藤文良『讃岐古瓦図録』「文化財協会報」特別号８　香川県文化財保護協会　昭和42年
(29)　「新編香川叢書　考古編」　香川県教育委員会　昭和58年
大平要『下司廃寺出土の塼仏片について』「瀬戸内海歴史民俗資料館だより」創刊号

1975
(30) 安藤文良『讃岐古瓦図録』「文化財協会報」特別号８　香川県文化財保護協会　昭和42年
「高松の古代文化」　高松市立図書館　昭和63年
(31) 「高松の古代文化」　高松市立図書館　昭和63年
(32) 「復刻版史跡名勝天然記念物調査報告（上巻）」　香川県文化財保護協会　昭和50年
「新編香川叢書　考古編」　香川県教育委員会　昭和58年
(33) 「多肥郷土史　後編」　多肥郷土史編集委員会　1981
「高松の古代文化」　高松市立図書館　昭和63年
(34) 「高松の古代文化」　高松市立図書館　昭和63年
(35) 「高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第１冊　東山崎・水田遺跡」　香川県教育委員会他　1992
(36) 「高松城東ノ丸跡発掘調査報告書」　香川県教育委員会　1987
『1988年出土の木簡　香川・紺屋町遺跡』「木簡研究」第11号　木簡学会　1989
(37) 「高松城東ノ丸跡発掘調査報告書」　香川県教育委員会　1987

遺跡分布図地名表

1　鶴尾神社４号墳
2　坂田廃寺
3　高松城東ノ丸跡
4　紺屋町遺跡
5　天満・宮西遺跡
6　白山神社古墳
7　松縄下所遺跡
8　キモンドー遺跡
9　大池遺跡
10　弘福寺領関係遺跡発掘地点北地区
11　弘福寺領関係遺跡発掘地点南地区
12　上天神遺跡
13　太田下須川遺跡
14　蛙股遺跡
15　居石遺跡
16　井手東Ⅱ遺跡
17　井手東Ⅰ遺跡
18　浴・長池Ⅱ遺跡
19　浴・長池遺跡
20　浴・松ノ木遺跡
21　林・坊城遺跡
22　六条・上所遺跡
23　東山崎・水田遺跡
24　凹原遺跡
25　空港跡地遺跡
26　一角遺跡
27　拝師廃寺
28　多肥廃寺
29　高野廃寺
30　山下廃寺
31　諏訪神社本殿古墳
32　久米池南遺跡
33　宝寿寺跡（前田廃寺）
34　前田東中村遺跡

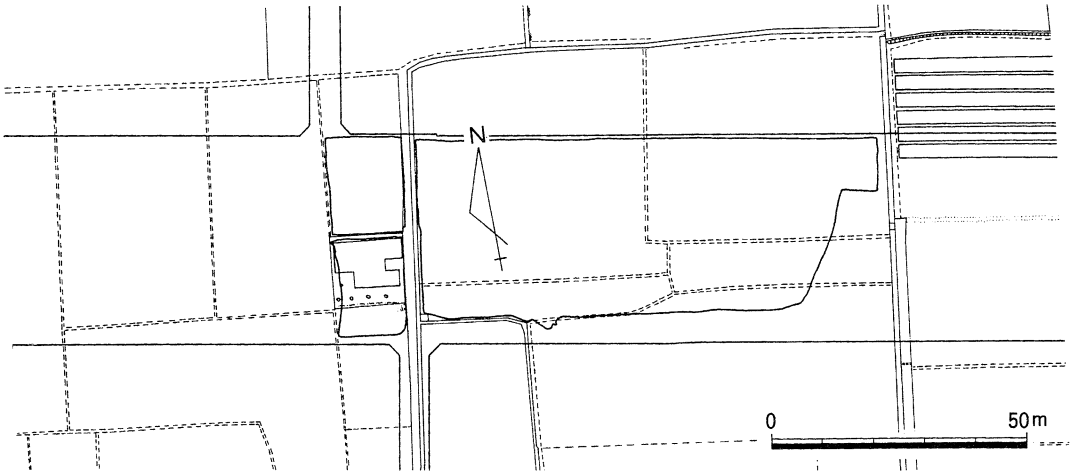
第 3 章

発掘調査の成果

第１節　調査区の設定

平成３年度の井手東Ⅰ遺跡の調査区の設定にあたっては平成２年７月30日から８月24日にかけて行った試掘調査において遺構の存在を確認したトレンチの状況をもとに設定した。調査区は平成２年度調査の浴・長池Ⅱ遺跡の西端から西へ110m、幅40mの範囲内に設定したが、調査区南端に掘削土を場外搬出するための仮設道を敷設したため、南北幅が狭くなったうえ、調査区西側に存在する現有水路に調査区を分断されることとなった為、調査区は変形の調査区になった。しかも調査を開始した当初、調査区の南西隅に未退去家屋が存在していたため、この部分は調査対象地から除外していたが、調査途中に、家屋が除去されたため、北側の調査区で遺構が確認されており、南側に伸びる可能性が高く、最終的にこの部分も調査を行うこととなった。

調査を行う上で、試掘調査において調査予定地中央部で確認した谷状地形およびそこに堆積するアカホヤ火山灰層と、火山灰層前後に存在すると考えられる遺構を的確に確認できるようにする為、谷状地形部分に十字の畦を設定し、一層毎に土層を下げていき、平面および土層断面において、多くの遺構が確認できるようにした。当初の、調査の主眼がアカホヤ火山灰層前後の遺構の確認および火山灰の平面的な広がりを確認することにあったため、本調査を開始してから、当初想定していなかった弥生時代中期の遺構、遺物、近世に属する多くの遺構を確認するに至り、十字トレンチが、遺構を分断することになり、上層の遺構の調査に支障を及ぼすこととなった。また、当初想定していた調査期間は、上層の遺構の調査に費やされることとなり、アカホヤ火山灰層前後において確認した遺構の調査を充分追求することができなかった。



第５図　調査区設定図

第２節　遺跡の概要と層序

１　遺跡の概要

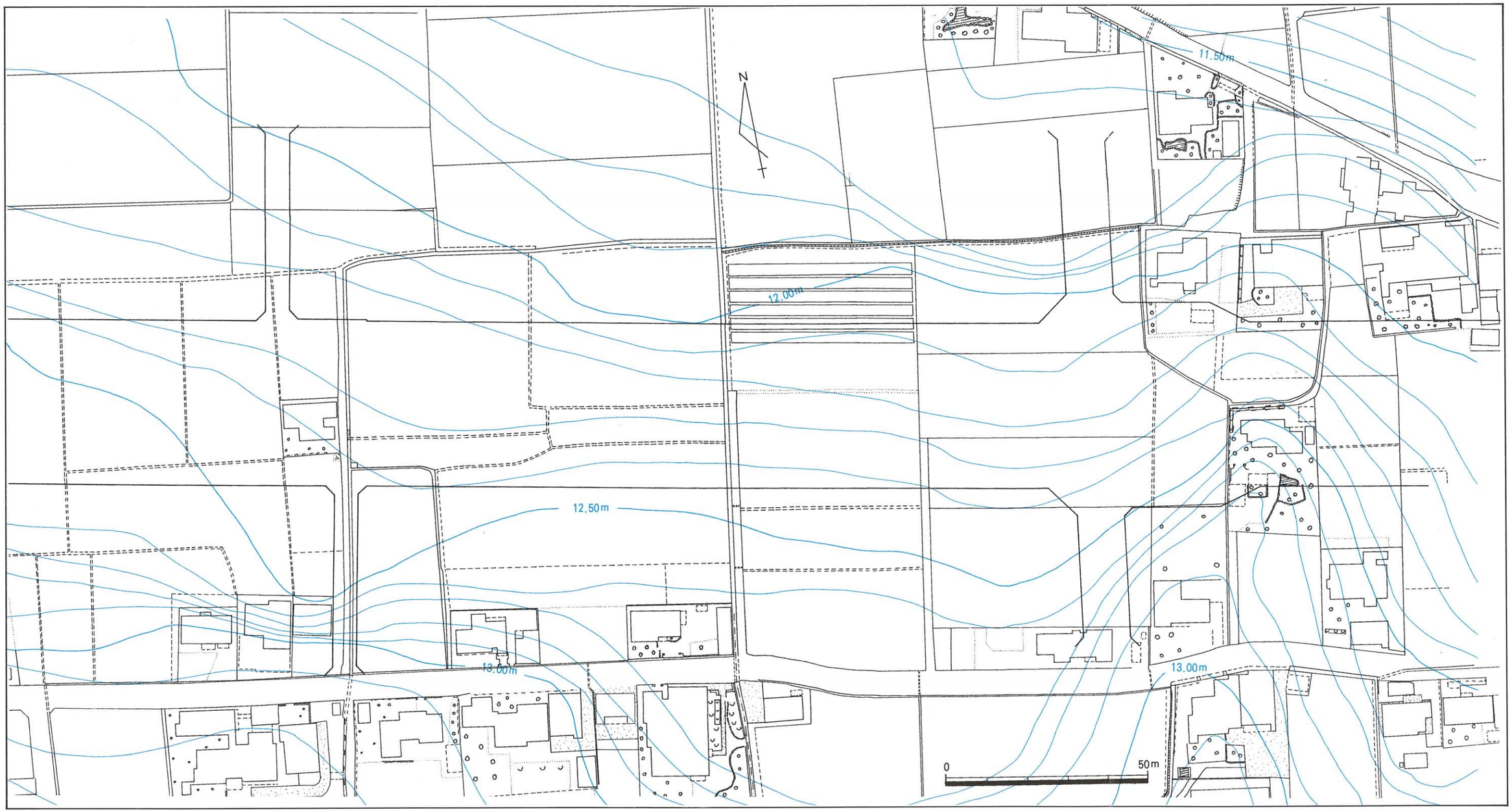
本調査区は浴・長池Ⅱ遺跡に西接する位置にあり、その全長は東西110ｍ、幅40ｍである。現地表面は、ほぼ平坦で標高は12.30ｍ前後である。

当調査区で最も古いものは、調査区南西から北東に向かって窪む谷状地形の土壌層中でアカホヤ火山灰（6,500年前降灰）前後の層で確認した溝状遺構である。５つの溝状遺構を確認し、精査を行い、溝状遺構内から遺物の出土を期待したが、残念ながら確認できなかった。

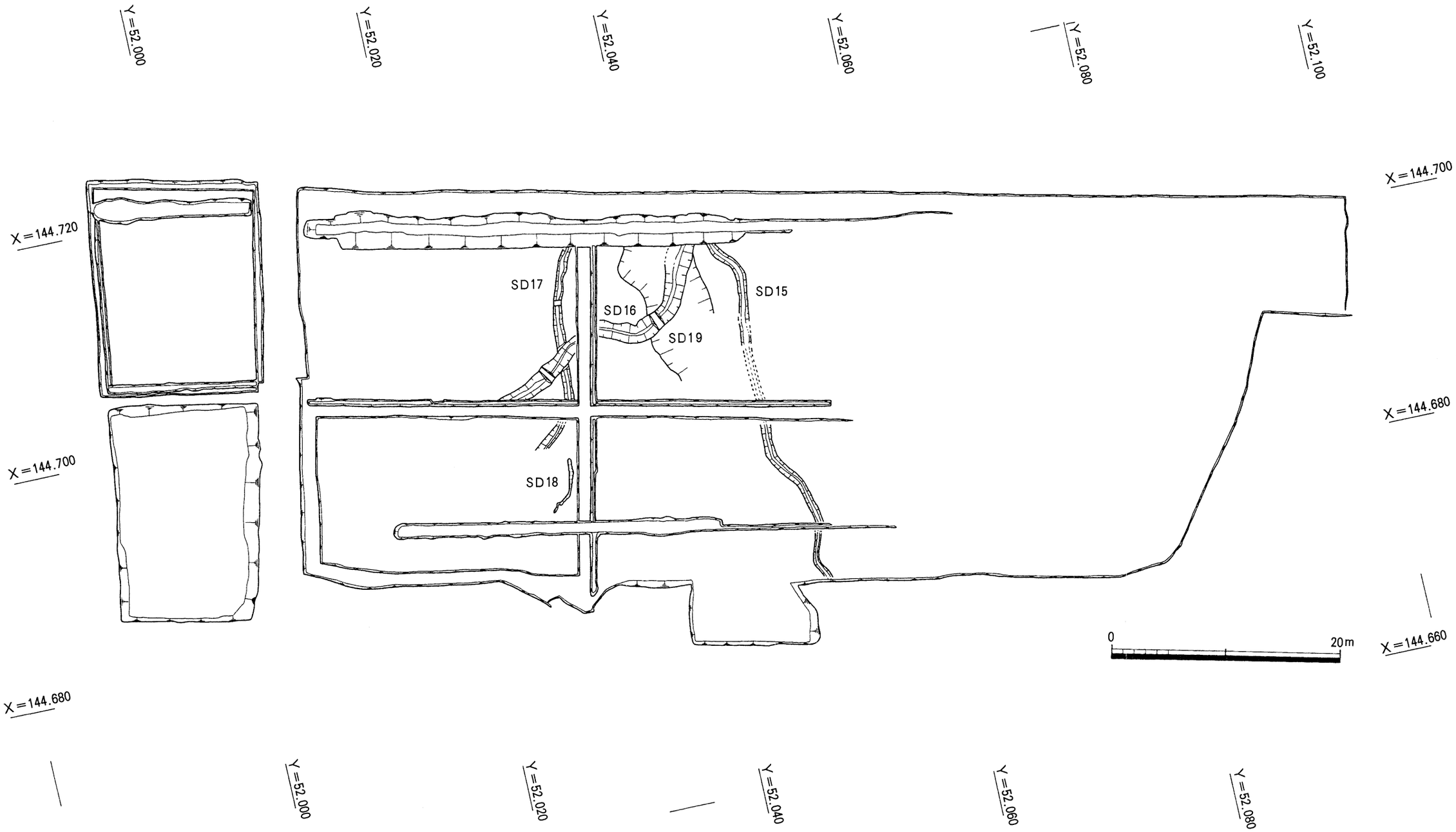
弥生時代中期から後期にかけての遺構は、溝状遺構９本を確認した。これらの遺構の大半は、南西から北東方向を向く遺構であり、地形の傾斜に合った状況を呈していた。これらの遺構の内、ＳＤ10, 11からは土器、石器とともに多量の木器および木製品を確認した。近年の当地域の発掘調査において弥生時代後期を中心とする遺構、遺物の資料の蓄積はめざましいが、弥生時代中期中葉の遺物が純粋な形で、一括で確認されたのは当遺跡が最初であり、貴重な成果を提供することとなった。この時期に該当する遺構は調査区内には存在しないが、出土遺物の遺存状況からすれば、近くに遺跡の中心部が存在している可能性が高い。

古墳時代に属する遺構は調査区には存在せず、次に遺構がみられるのは、12世紀後半頃である。調査区西端で確認したＳＤ01である。この溝状遺構は周辺の条里方向と同様な方向を示し、溝内では、２流路存在し、東側の流路が西側の流路に比べ約10㎝ほど高い、この時期に属するものはこの溝状遺構のみであるが、同時に出土した遺物から、条里制の土地割りが残っていた時期であり、掘削された時期はこの遺物の時期よりも、遡ることは確実であり、条里制の区画に則って掘削されたものと思われる。他の部分は不明であるが溝状遺構以外は、水田として利用されていたものと考えられる。

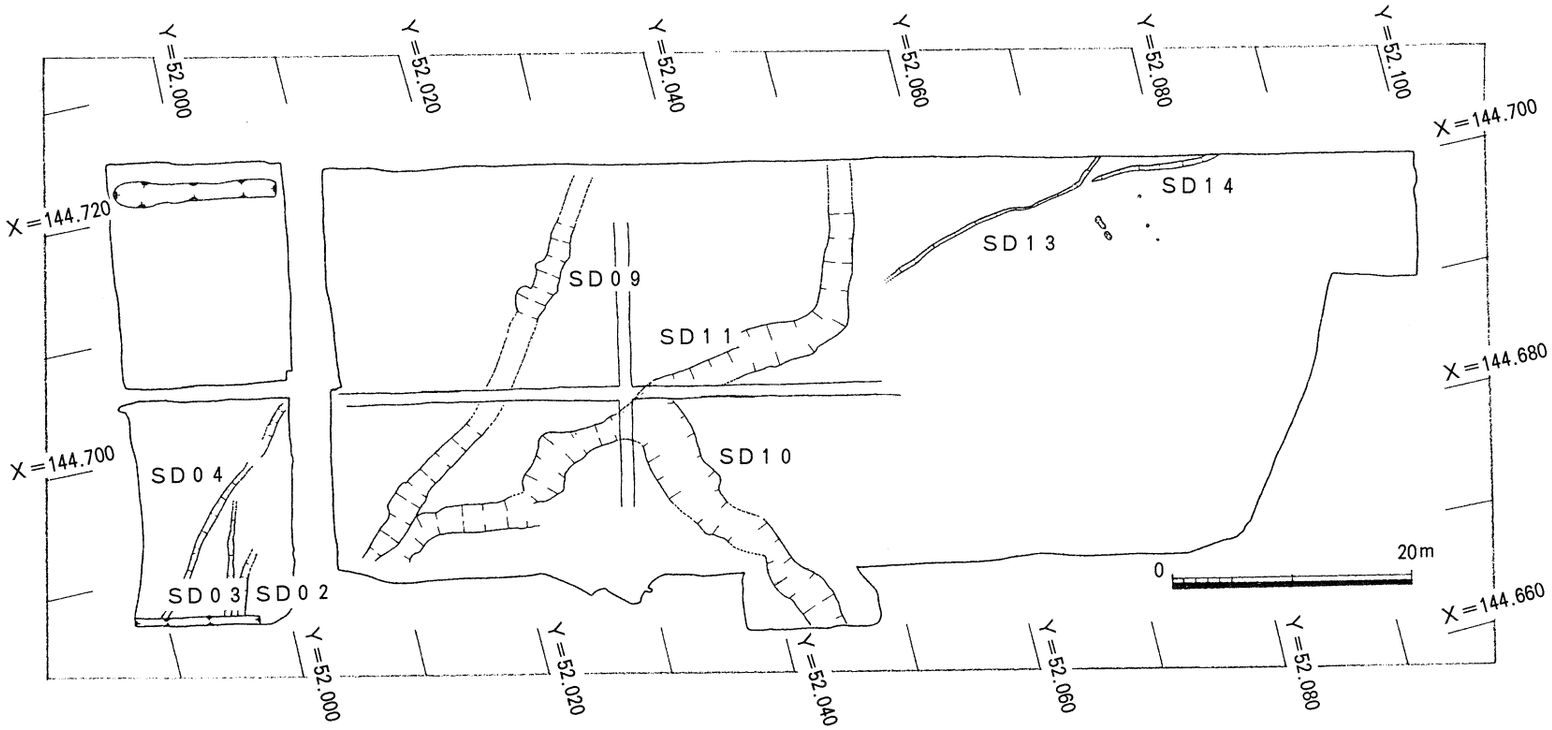
近世に入ると、調査区中央部で多くの遺構が確認できる。検出した遺構の内訳は、溝状遺構４条、土坑34基、掘立柱建物２棟、柵列２条、井戸１基を確認している。34基確認した土坑のいくつかはその内部状況からして墓の可能性が高い。この土坑内からは、骨片他、寛永通宝、陶磁器等が出土した。切り合い状況から数時期に分かれると考えられるが、出土遺物からは分類できない。検出された遺構の状況から、この時期、一部は墓地として利用されていた可能性が高い。検出した土坑の数からして、数基毎のまとまりがみられることにより、集団墓ではなく家族墓の可能性が考えられる。その後、現在に至るまで水田として利用されていたものと考えられる。



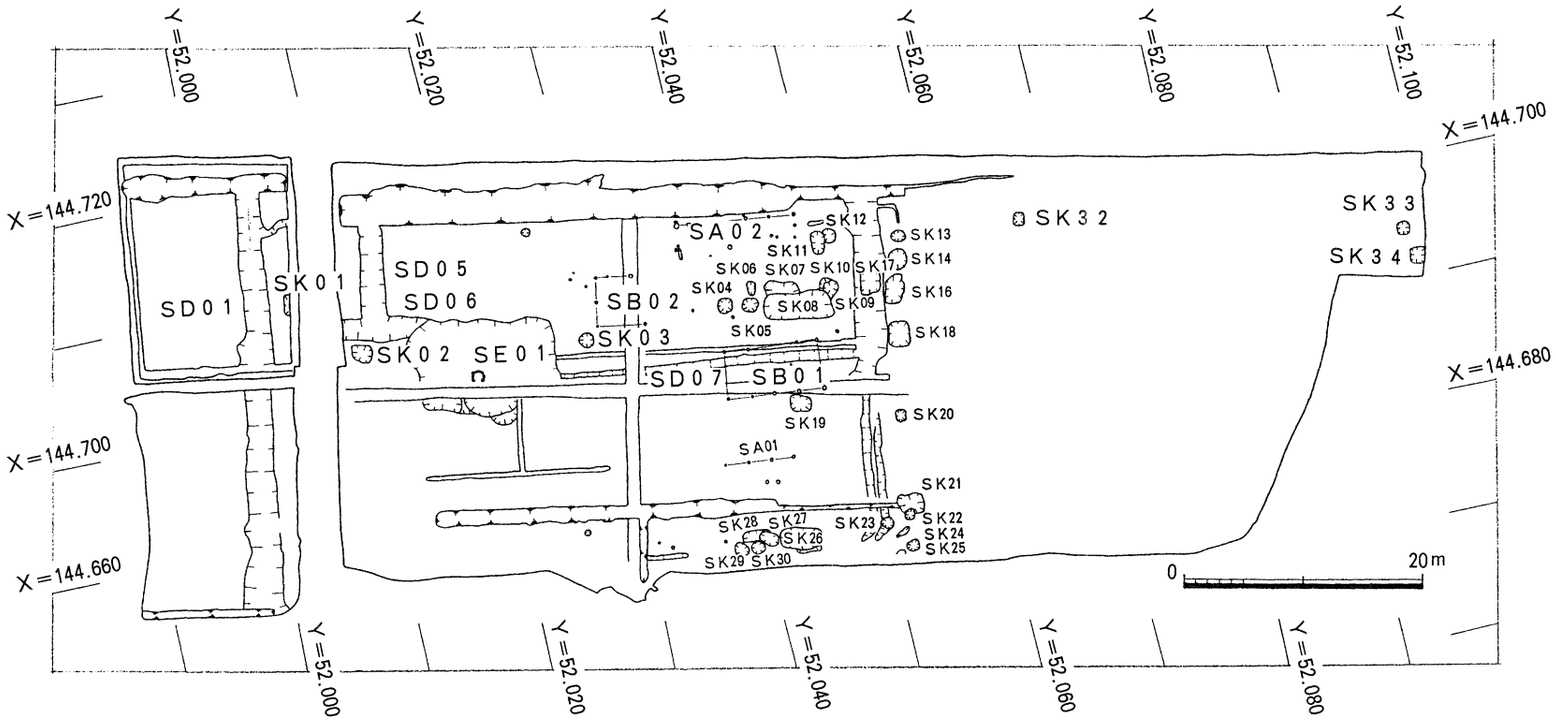
第６図　井手東Ⅰ遺跡周辺微地形図



第７図　遺構配置図(1)　アカホヤ火山灰降灰前後

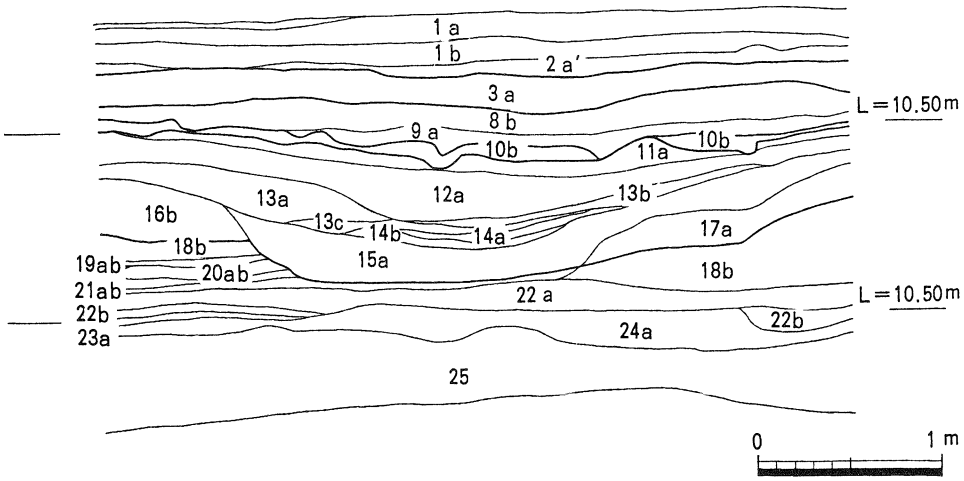


第８図　井手東Ⅰ遺跡遺構配置図（１）　（弥生）



第９図　井手東Ⅰ遺跡遺構配置図（２）　（古代～近世）

2　層序（第10図、付図４）



第10図　調査区内基本土層図

調査区の北壁と南壁を土層観察のために分層し、土層図を作成した。（付図４）調査区の東部に関しては、現水田、近世水田層の直下に微高地のベースである黄褐色極細砂質シルト（第６層）となっているため省略する。調査区西部において、ベースの下にアカホヤ火山灰が検出されたため砂礫層まで掘り下げる。調査区中心杭を基準にして南北と東西方向に土層観察用ベルトを設定し、南北方向の土層図のみ図化する。（付図４）これらの土層図は複雑かつ長大であるため、典型的な堆積を示す北壁の一部を柱状に表したのが第10図である。遺構の土層については各遺構ごとに説明し、ここでは調査区全体の基本土層だけを記述する。

土層は、内容物・粒子の大きさ・堆積状態・色調等により３類に分類する。ａ層は表面に植物が繁茂したり人間の耕作が行われるなどにより土壌化した層であり、ｂ層は土壌化が及ばず当初の堆積構造がそのまま残った層である。ｃ層は洪水をはじめとするその他の堆積構造で維持しているそうである。

１層　現水田耕作土であり、ａ・ｂ層に分かれる。ａ層は灰褐色シルト質粗砂(10YR6／2)、ｂ層はにぶい黄橙色シルト質粗砂（10YR7／3）である。

２層　灰黄色シルト質粘土（2.5Y7／3）であり、近世の水田層である。調査区中央より東側のみにみられる。

３層　黒色シルト質粘土（10YR1.7／1）のａ層、黒褐色シルト質粘土（10YR3／1）のａ′層に分かれる。調査区全域に堆積している水田層である。

4層　黒色シルト質粘土（10YR1.7／1）のａ層のみである。調査区中央より西側にみられる水田層である。

5層　灰色シルト質粘土（7.5Y4／1）のａ層のみである。４層と同様に西側のみにみられる水田層である。

6層　褐灰色・黄褐色極細砂質シルト（10YR5／1・10YR5／6）のｃ層である。従来まで微高地上でのベースと考えられていた層であり、遺構検出面である。ほぼ全域に堆積している。

7層　黒色極細砂質シルト（10YR2／1）のａ層であり、調査区中央にのみみられる。

8層　黒色シルト質粘土（5Y2／1）のａ層、灰色シルト質粘土（10Y5／1）のｂ層が調査区西側に堆積する。一部に黒褐色シルト質中砂（2.5Y3／1）がみられる。

9層　暗灰色極細砂質シルト（N3／0）のａ層であり、調査区中央やや東側に一部みられる。

10層　アカホヤ火山灰。調査区の中央部に厚く堆積し、次第に薄くなりながら東西方向に広がっており、東部のベースである６層の直下にみられる。

11層　黒色シルト（5Y2／1）のａ層である。10層の直下に堆積する。

12層　黒褐色極細砂質シルト（10YR3／1）のａ層であり、調査区中央部に厚く堆積する。

13層　褐灰色シルト質中砂（10YR4／1）のａ層は調査区中央に部分的にみられる。黄灰色砂質シルト（2.5Y6／1）のｂ層は西側に厚く堆積している。さらに灰色極細砂質シルト（2.5Y8／2）のｃ層が若干みられる。

14層　褐灰色極細砂質シルト（10YR5／1）のａ層と褐灰色極細砂質シルト（10YR6／1）のｂ層が調査区中央やや東側に薄く堆積している。

15層　黒褐色極細砂質シルト（2.5Y3／1）のａ層であり、調査区中央やや東側に厚くレンズ状の堆積を示している。

16層　黄灰色砂質シルト（2.5Y4／1）のａ層と黄灰色細砂質シルト（2.5Y6／1）のｂ層である。調査区の中央部、西側に厚く堆積している。

17層　灰色極細砂質シルト（5Y5／1）のａ層であり、18層がしだいに東へ上がる部分に厚く堆積している。

18層　灰白色シルト質極細砂（2.5Y8／1）のｂ層である。調査区中央から西側にかけて厚く均一に堆積、東側になると次第に厚くなり上がっている。最大の厚さは約60㎝である。

19層　黒褐色シルト質粘土（10YR3／2）のａ層と灰白色細砂（5Y8／1）のｂ層が調査区中央から西側にかけてほぼ均一に薄く堆積している。

20層　黒褐色シルト質粘土（7.5YR3／1）のａ層と灰白色細砂（5Y8／1）のｂ層が、19層と同様に堆積している。

21層　黒褐色シルト質粘土（7.5YR3／2）のａ層と灰白色細砂（5Y8／1）のｂ層。

22層　黒褐色シルト質粘土（10YR3／1）のａ層が西側になるにしたがい厚く堆積している。ｂ層は灰白色細砂（5Y7／1）で非常に薄い。

23層　黒褐色シルト質粘土（10YR4／1）のａ層が薄く堆積している。若干の粘性がある。

24層　褐灰色シルト質粘土（10YR4／1）のａ層がやや厚く水平に堆積している。若干の粘性がある。

25層　灰白色中〜細砂（5GY8／1）のｃ層であり、調査区中央において厚く堆積している。その厚さは約１ｍである。

26層　灰黄色シルト（2.5Y7／2）であり、東側に厚く堆積している。

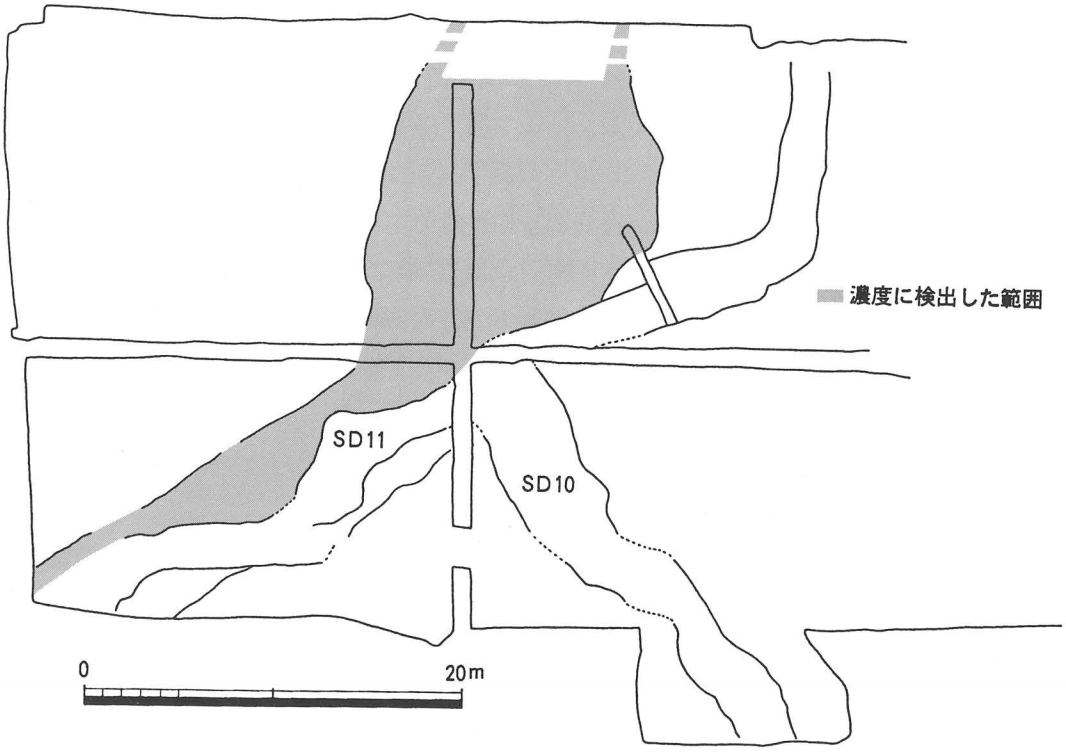
これらの土層は、その堆積状態により四つに大別することができる。まず、現水田と近世の水田である1•2 層がある。次に中世以前の水田であると考えられる３〜５層である。この層までが水田層である。その下に６〜17層がある。前述したように６ｃ層は従来ベースと考えられていたそうである。この一群の層中にアカホヤ火山灰が堆積しており、堆積状態より一次堆積と考えられる。最後は、18層以下である。19〜24層は黒褐色シルト質粘土と灰白色細砂が交互にありラミナ状堆積を示しており、最下位に灰白色中〜細砂が厚く堆積している。

第３節　アカホヤ火山灰降灰前後の遺構

当初の目的である火山灰層前後の層位で確認したいずれも溝であるが、出土遺物がないため、本来遺構と呼んでいいものか不明であるが、火山灰降灰前後の状況を知る上で重要であると考えられるため、ここに報告する。ただ、調査期間の関係から検出したもののすべてを完掘することはできなかった。

１　アカホヤ火山灰（第11図）

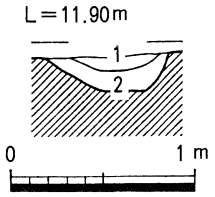
調査区中央部、南西から北東方向を向く、谷状地形の凹地内において確認した火山灰層である。肉眼観察で平面検出できた最大幅は15ｍであり、最も厚く堆積した部分では、10㎝の厚さを測る。この火山灰は現地表面下70㎝の深さで確認し、堆積層厚は減じるが、調査区東部の縄文晩期以降のベースである第６層直下に続いている。アカホヤ火山灰層前後において遺構と考えられる溝状遺構を確認したが、遺構内からは、残念ながら遺物を確認することができなかった。



第11図　アカホヤ火山灰検出範囲図

1　ＳＤ15（第12図）

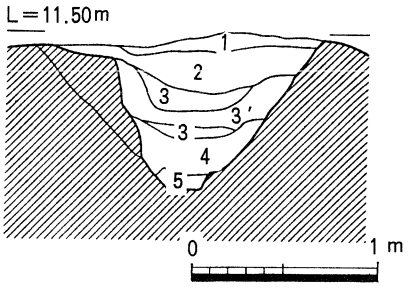
調査区中央部を、南から北に蛇行する溝状遺構である。アカホヤ火山灰層より上で確認した。溝の規模は、幅0.7ｍ、深さ0.2ｍを測る。溝の断面形状は、ゆるいＵ字状を呈する。土層埋土は２層に分層でき、１　黒褐色シルト質極細砂　Ｆｅを多く含む（10YR3／2）、２　黒褐色シルト質極細砂（10YR2／2）である。遺物の出土はない。



第12図　SD15土層図

2　ＳＤ16（第13図）

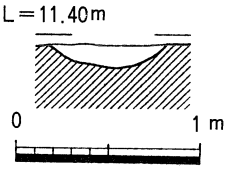
調査区中央部を、南西から北東にかけて蛇行する溝状遺構である。アカホヤ火山灰層を切る溝である。溝の規模は、幅1.5ｍ、深さ0.84ｍを測る。溝の断面形状は、Ｖ字状を呈する。土層埋土は６層に分層でき、１　黒褐色シルト質極細砂　細砂を若干含む（10YR1／3）、２　黒褐色シルト質極細砂　細～中砂を含む（10YR2／3）、３　白灰色中細砂　３　白灰色中細砂＋黄灰色シルト質細砂（2.5Y4／1）、４　黒褐色シルト質細砂（10YR2／2）、５　黒褐色シルト質細砂＋中砂（木質遺体を多く含む）、６　褐灰色シルト質極細砂（10YR4／1）である。出土遺物はない。



第13図　SD16土層図

3　ＳＤ17（第14図）

調査区中央部を、南から北に向かって流れる溝状遺構である。アカホヤ火山灰層より下の、11ａ層を切り込む。南側は、ＳＤ11に切られるため、南側の状況は不明である。溝の規模は、溝幅0.64ｍ、深さ0.12ｍを測る。土層埋土は１層で白灰色中～細砂である。出土遺物はない。



第14図　SD17土層図

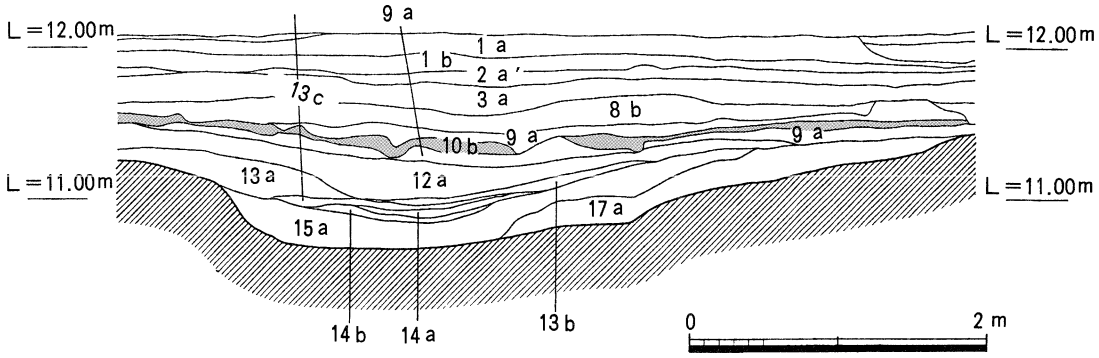
4　ＳＤ18

調査区中央部で確認した溝状遺構である。掘り込み面は不明である。部分的な確認で、北側にも南側にも伸びないため、全容は不明である。溝の規模は、検出長５ｍ、溝幅0.2ｍ、深さ0.

04mであり、残存状況は良くない。出土遺物はない。

5　ＳＤ19（第15図）

調査区中央部で確認した溝状遺構である。北半部のみの検出であり、南側に伸びることは確実であるが、調査期間の関係で、北側の平面検出を行っただけで完掘していない。北側の土層断面で確認する限り、溝幅5.6m、深さ0.8mを測る。アカホヤ火山灰層より下層で確認したもので、火山灰層より古いものである。

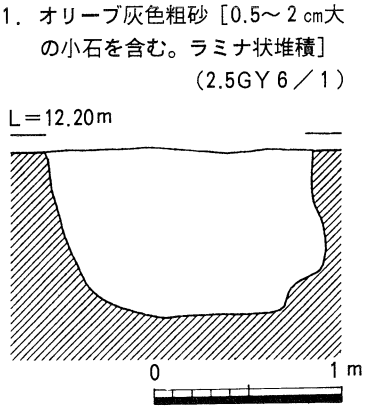


第15図　SD19土層図

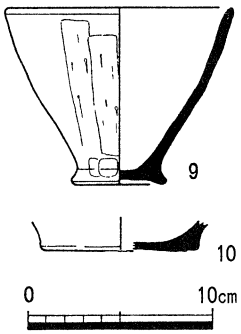
第４節　弥生時代中期・後期の遺構と遺物

1　ＳＤ09（第16・17図）

調査区西部に位置し、ＳＤ11を切り、ＳＸ01に切られる南西から北東に流れる溝状遺構である。断面形状はＵ字形を呈し、幅1.80ｍ、深さ0.85ｍの規模をもつ。土層埋土は１層であり、ラミナ状堆積をする。出土遺物は、縄文土器と考えられる底部と小型の深鉢が出土しているが、上述のように切り合いからは、弥生時代中期以降の時期が考えられる。



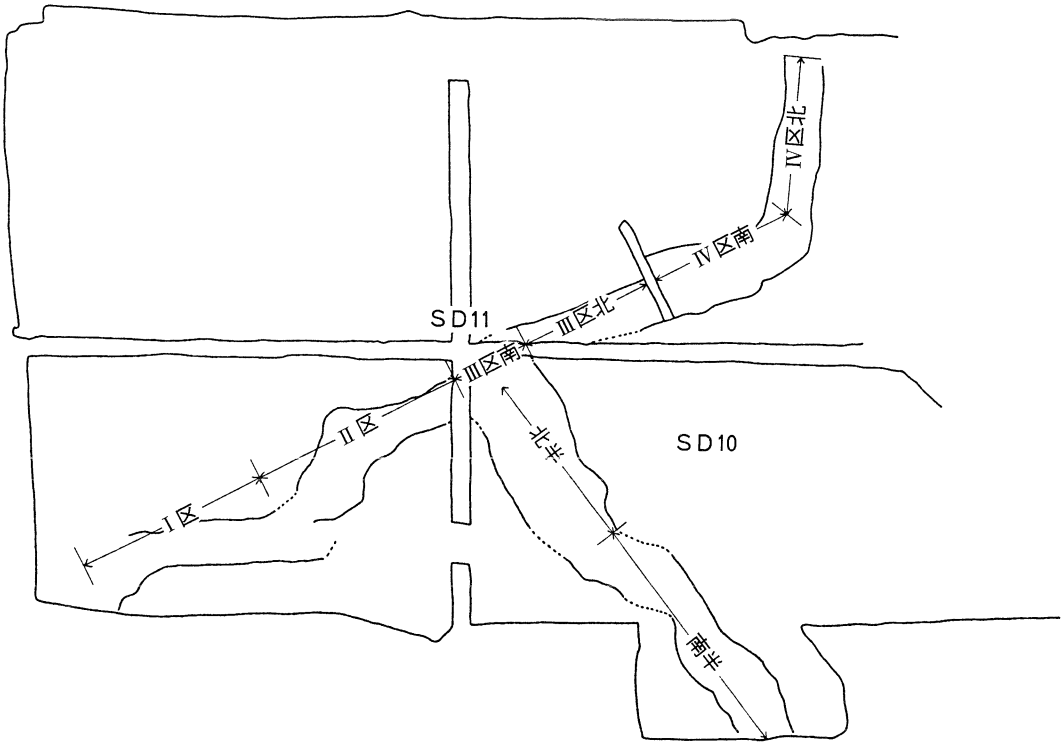
第16図　ＳＤ09土層図



第17図　ＳＤ09出土遺物実測図

2　ＳＤ10（第18図）

調査区中央部において検出した溝である。この溝は南東から北西方向に流走すると考えられ、その根拠に溝底のレベルは南側が11.50ｍ、北側が11.11ｍと溝底での差が0.39ｍあり、南から北へ流れていたと考えられる。北半部は遺構の残存状況はよかったものの、南半部は近世遺構が予想以上に深く残りがよかった為、結果的SD10は残存状況が悪い。北端はSD11に合流し、終わる。SD11との前後関係は上面検出での切り合いは確認できなかった。検出長23ｍ、溝幅3.2～4.5ｍ、深さは最も深いところで0.85ｍを測り、平均0.50ｍ前後である。溝の断面形状は上部が広く中央部が狭くなる、二段のＵ字形を呈する。土層堆積状況は８層に分層できるが、大きくは３層に分かれ、後述するSD11の分層に対応する。上から上層　暗灰黄色シルト質細砂（2.5Y5／2）、中層　にぶい褐色シルト質極細砂（7.5YR5／3）（Ｆｅを含む）、灰褐色シルト質細砂（7.5YR4／2）、褐灰色シルト質細砂（7.5YR5／1）、黒色シルト質粘土（10YR2／1）、下層　褐灰色シルト質細砂（10YR4／1）、灰黄褐色シルト質細砂（10YR5／2）、黄灰色シルト質細砂（2.5Y5／1）この下層において木製品を含む、自然木を多く含む木質遺物の多くを確認した。SD10における木製遺物の出土状況は、溝底近くに土器片と混在して検出された。木質遺物は製品になっているもの、未製品のもの、一部加工を施すもの、火を受けているもの、自然木等が見られ、いずれの木質遺物についても保存状態は良好であった。出土土器の特徴から中期中葉前半（Ⅲ様式古段階）を前後する時期に埋没が開始し、短期間に埋没したものと考えられる。

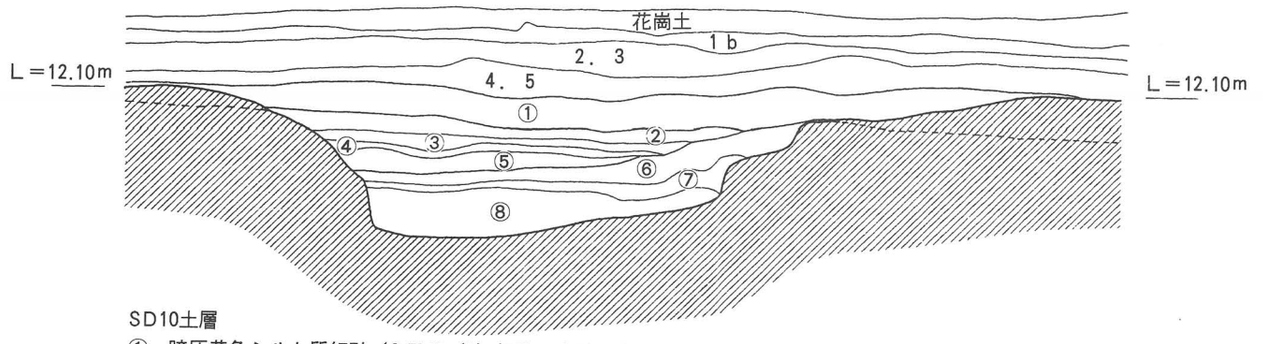


第18図　ＳＤ10・11地区割図

3　ＳＤ11（第18・19図）

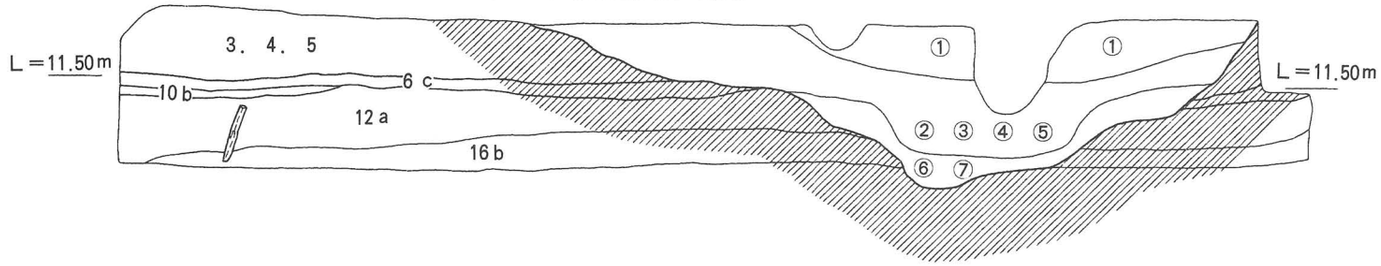
調査区中央部やや西よりにおいて検出した溝である。この溝は南西から北東にむかって蛇行しながら流走すると考えられ、南から北への溝底の比高差は0.37mである。検出長53m、溝幅3.50m、検出面からの深さは南側で0.30〜0.40m、北側にいくにしたがい深くなり、最も深いところで0.84mである。溝の断面形状は上側が広く、ゆるやかなU字形を呈する。土層堆積状況は、調査区南北セクションで確認する限り７層に分層できるが、大きくは３層に分かれる。

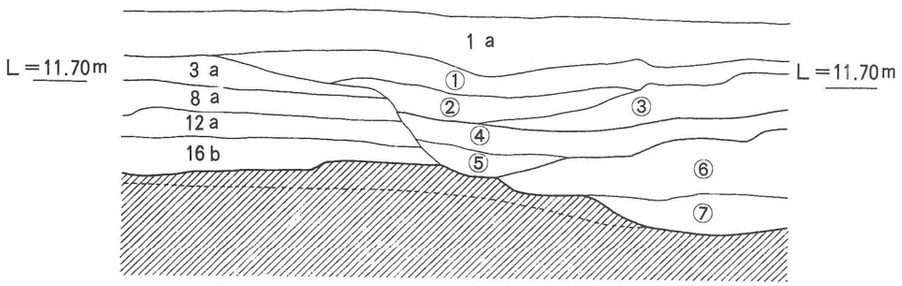
埋土は上から上層　褐灰色シルト質細砂　7.5YR5／1（細砂を多く含む）、中層　白灰色細〜中砂、灰褐色シルト質細砂　7.5YR5／2（細〜中砂を含む）、褐灰色シルト質細砂　10YR4／1、白灰色中砂、下層　黒褐色シルト質極細砂　10YR3／1（粘性若干あり）、黒褐色シルト質極細砂＋中砂・小礫である。前述のSD10と同様、この溝からも多量の木質遺物が土器とともに確認され特にⅢ区北からⅣ区南にかけて集中している。それ以外の地区では量は少ない。この位置は、ちょうどSD11の最深部と一致し、SD11が大きく屈曲してここから北流することから、この部分が溜まりになったものと考えられる。



SD10土層

① 暗灰黄色シルト質細砂（2.5Y5／2）細砂～中砂を含む
② にぶい褐色シルト質極細砂（7.5YR5／3）Feを含む
③ 灰褐色シルト質細砂（7.5YR4／2）
④ 褐灰色シルト質細砂（7.5YR5／1）
⑤ 黒色シルト質粘土（10YR2／1）
⑥ 褐灰色シルト質細砂（10YR4／1）
⑦ 灰黄褐色シルト質細砂（10YR5／2）
⑧ 黄灰色シルト質細砂（2.5Y5／1）木質遺体を多く含む





SD11土層

① 褐灰色シルト質細砂（7.5YR5／1）細砂を多く含む
② 白灰色細～中砂
③ 灰褐色シルト質細砂（7.5YR5／2）細～中砂を含む
④ 褐灰色シルト質細砂（10YR4／1）
⑤ 白灰色中砂
⑥ 黒褐色シルト質極細砂（10YR3／1）粘性若干有り
⑦ 黒褐色シルト質極細砂＋中砂・小礫

第19図　SD10、11土層図

ＳＤ10・11出土土器

SD10・11からは同時期と考えられる土器、木器、石器が多量に出土している。他の遺構は個別に報告を行っているが、SD10・11は切り合い状況、遺物の出土状況、個々の遺物の特徴などから分離して報告するより、合わせて報告する方が状況がわかりやすいことより、２つの遺構をまとめて報告する。

出土土器は壷、甕を中心に高坏、鉢が出土している。

壷（第20図〜25図）

壷型土器は、広口壷、長頸壷、細頸壷、無頸壷に分かれる。量の上から特に広口壷が出土した壷型土器の大半を占め、種類も多い。しかし、口縁部、頸部、胴部、底部に分かれたものが多く、全体の形態がわかるものは皆無である。ここでは、口縁部の特徴により細分して説明を加えてみたい。

広口壷Ａ（第20図）

口縁部が大きく水平に外反し、水平に広がる口縁を持つもので、一部には下方に垂れるものもある。端部を上方に、わずかにつまみ上げるものを含め、凹線文を巡らせないものと、端部を上下に拡張し、２条の凹線を巡らせるものに大別できる。(1〜9）は凹線文を巡らさないもので、口縁端部外面に刻目文を施すものと、施さないものに分かれ、刻目文を施すもののうち(5,7〜9）には口縁部内面に斜格子文、波状文＋刻目突帯文を加飾する。一方、口縁端部端面に刻目文を施した後、２条の凹線文を巡らし、口縁部内面に斜格子文を加飾するものがある。

広口壷Ｂ（第21図）

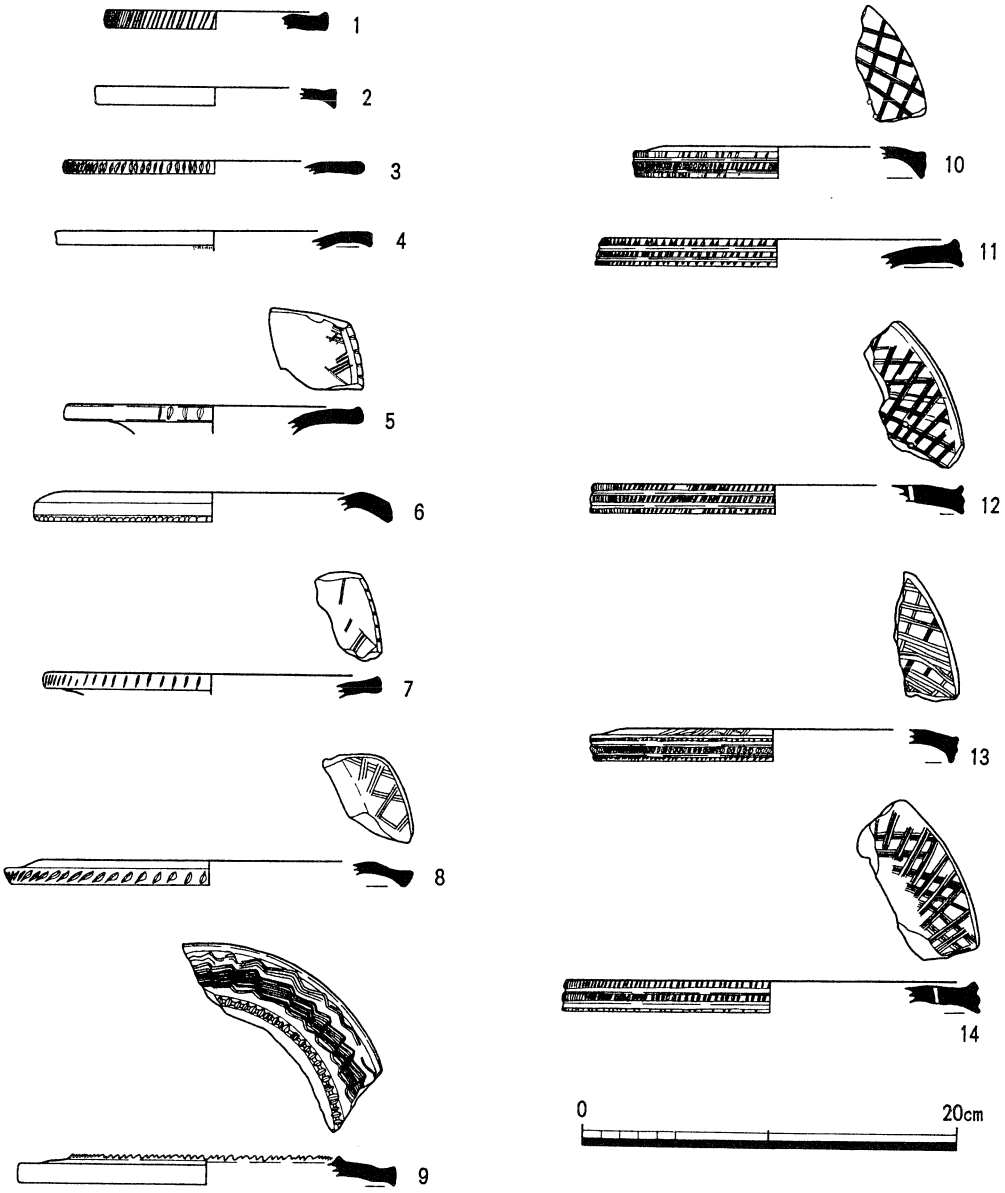
口縁部が大きく外反し、口縁端部が肥厚するもので一部下方に垂れ下がるものもある。加飾は口縁端部端面（4,5,8）と、頸部屈曲部に押圧突帯文を１条もしくは２条施すもの（9〜11）に分かれる。

広口壷Ｃ（第22図）

わずかに外反しながら開く口縁部を持つもので、端部がやや肥厚する。口縁部の加飾の違いにより大きく三種類に分かれる。口縁部に加飾を行わないもの（1〜9・15）＝Ｃ１、口縁端部に刻目文を施すもの＝Ｃ２、口縁部に２条もしくは３条の刻目突帯文、頸部から胴部上半にかけて櫛描波状文、櫛描直線文を交互に施す＝Ｃ３。（８）を除く壷の胴部は器高の割に広がらないものが多いと考えられる。

長頸壷（第23図）

口縁部のみの破片で全体がわかるものはない。口縁部はわずかに外反しながら立ち上がり、端部は丸く終わる。（１）は口頸部外面に櫛描直線文を施す。（２）は頸部片である。外面に櫛描波状文を施す。（３）は口縁部外面に凹線４条がみられる。



第20図　ＳＤ10・11出土遺物実測図（１）

無頸壷（第23図）

口縁部から胴部にかけて直線的な（４・５）と、球形に近いほぼ完形な（６）に分かれる。加飾は（４）が口縁部外面に円形浮文、（５）は端部に刻目文、口縁部から胴部上半に櫛描波状文、櫛描直線文を交互に施す。（６）はミガキ調整を主体とするが無文である。（５・６）には円孔が認められる。

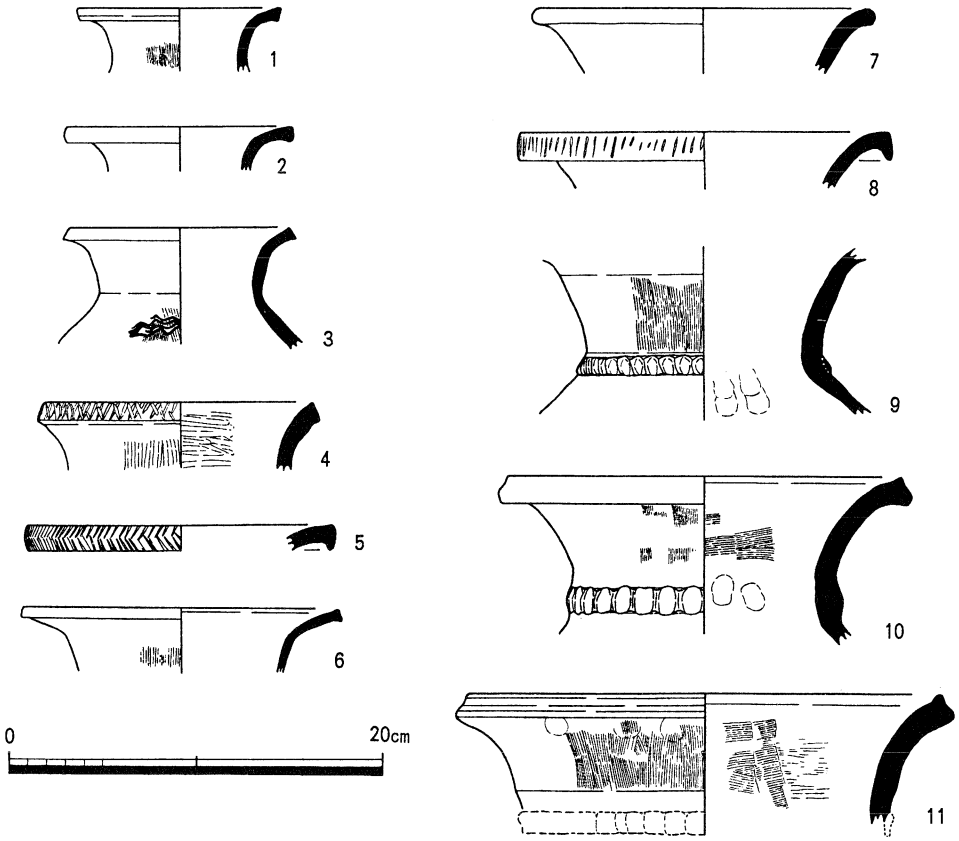
壷体部（第24図）

壷体部については頸部から体部上半の外面に加飾を行うものと行わないものがある。第24図に示した実測図及び拓本は加飾を行うものである。

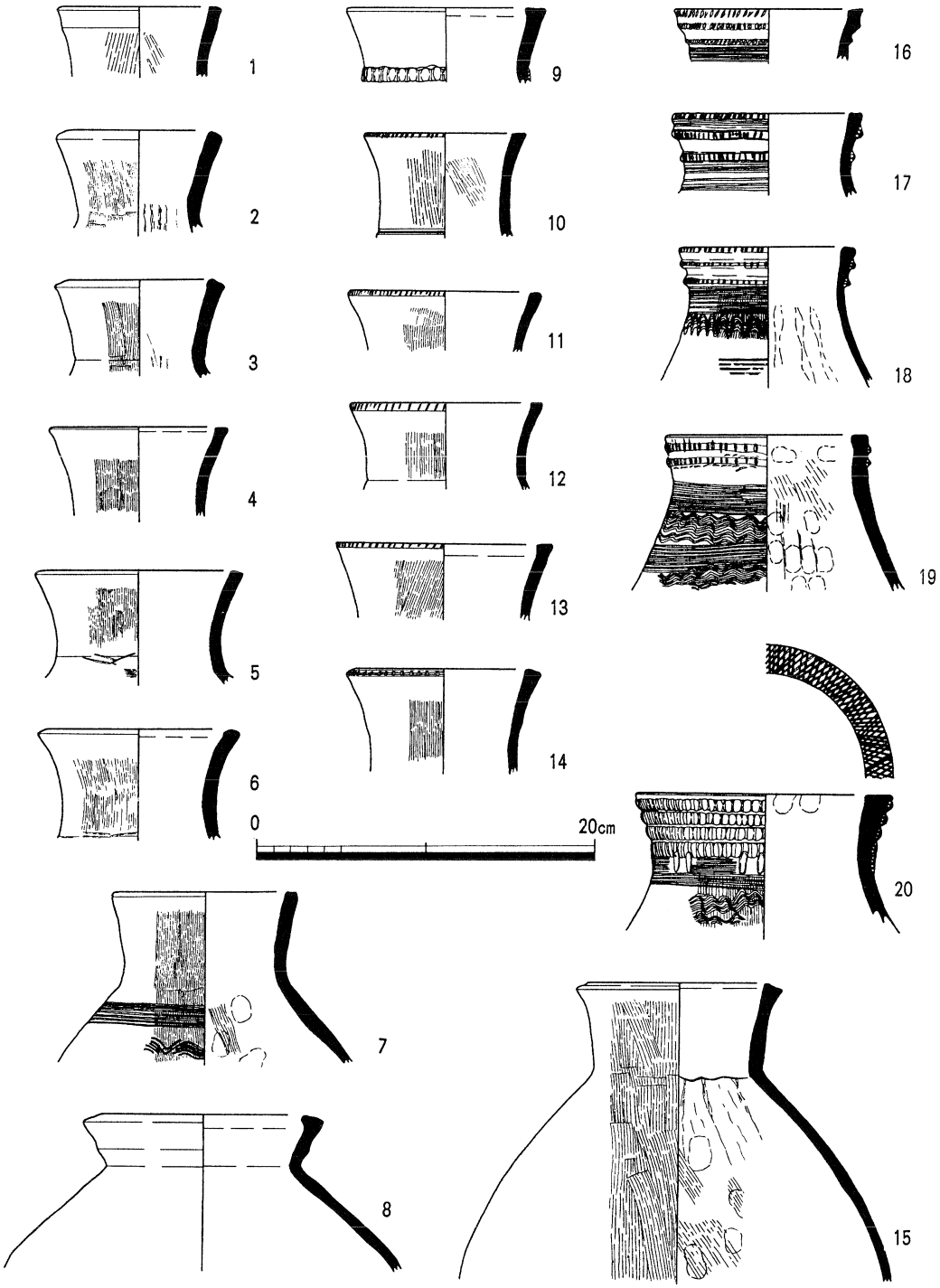
壷体部の状況は、破片であるため傾きが不正確なものが多いが、頸部から体部上半外面にかけて櫛描直線文と櫛描波状文を交互に加飾する（3～5、7～14）ものと、（6）のようにあまり加飾しないものに分かれている。小片であるため、全体の状況は不明であるが、簾状文を加飾するもの（1）もみられる。壷体部には、体部があまり張らないものが多く、全体的にはスマートである。

壷底部（第25図）

上げ底をもつものが大半であり、底部から胴部にかけての傾きにより3種類に分けられる。内湾しながら立ち上がるものと、底部から直立気味に立ち上がるもの、底部から外反気味に立ち上がり、胴部が大きく張ると考えられるものに分かれる。調整は外面ヘラミガキを主体とし、内面はハケもしくはヘラミガキが主流であるが、一部（14）のようにヘラミガキの前にヘラケ



第21図　SD10・11出土遺物実測図（2）



第22図　SD10・11出土遺物実測図（3）

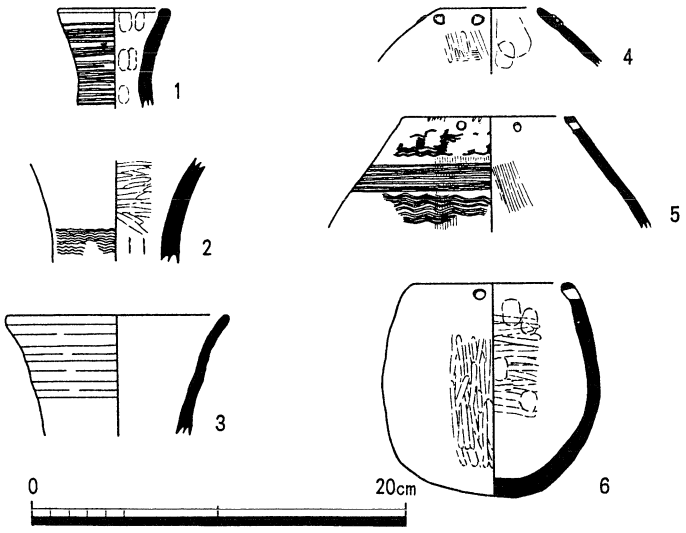
ズリ（？）を行うもの、（6・21）のように粗いヨコナデ（ヨコナデの単位が見える）を行うものもみられる。

甕（第26図〜32図）

甕は形態の違いにより、大きく2つに分けた。

甕A（第26図〜29図）

口径と最大胴径の差が少なく、器高が口径の2倍以上になるものが多い。底部はあまり大きくならない為、全体にスマートな形態である。口縁部の形態の違いにより、さらに細分できる。加飾は、胴部最大径付近に1条もしくは2条の半載竹管による刺突文もしくはヘラ状工具による列点文を施す。調整は胴部外面上半部ハケ、胴部最大径付近から底部にかけてヘラミガキ、底部付近でヨコナデを施すものもみられる。底部内面はナデ、底部から胴部下半はタテヘラミガキ、胴部上半はヨコヘラミガキ、口縁部はヨコナデを施す。



第23図　SD10・11出土遺物実測図（4）

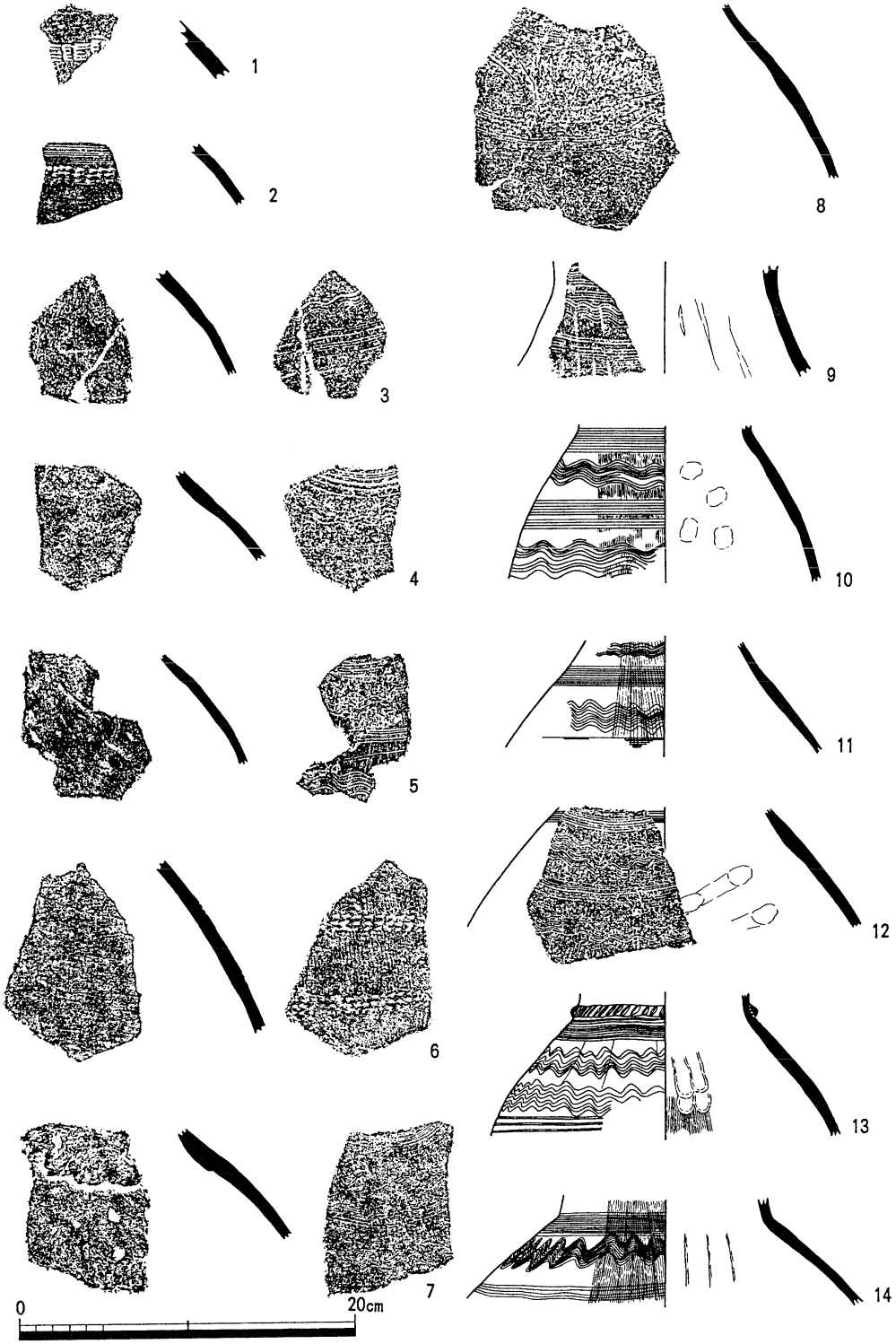
口縁部をつまみ上げるものを甕A1、口縁端部が肥厚して終わるものを甕A2と分けて区別するが、口縁端部以外の形態に、大差はない。

甕A1　口径20cmを境に小型と大型に分かれ、胴部上半部は頸部に向かって直線的に内傾しながら立ち上がる。頸部は「く」の字に屈曲し、口縁端部を上方につまみ上げる。口縁端部端面に強いナデによる凹みが存在する（第27図1，2）ものもみられる。

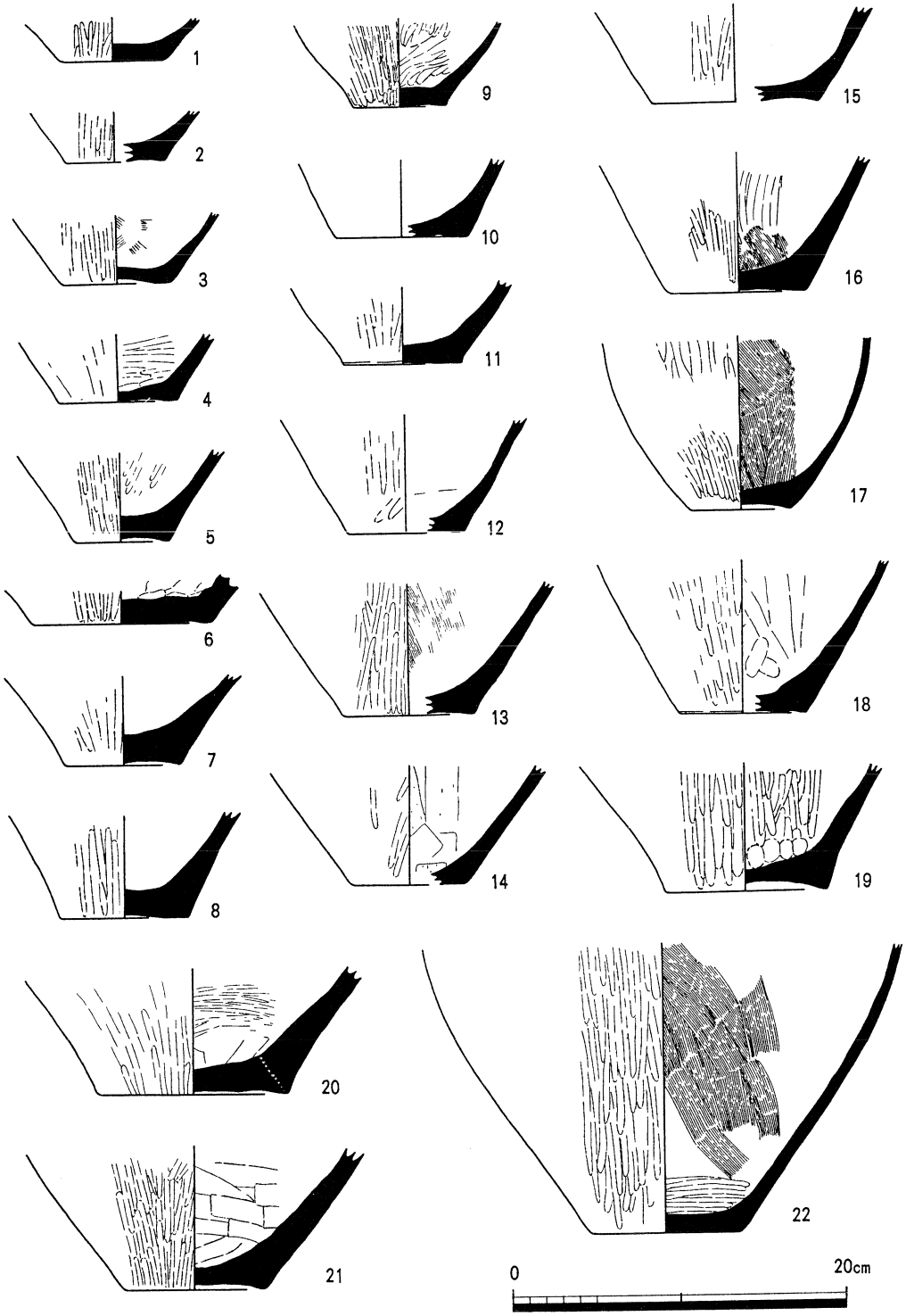
甕A2　A1と同様、口径20cmを境に小型と大型に分かれる。胴部上半部は頸部に向かって内傾しながら立ち上がるものも多く、頸部は「く」の事情に屈曲し、端部はそのまま丸く終わるものと、肥厚するものに分かれる。（第29図3）のように口縁端部に刻目文を施すものも存在する。

甕B（第30図）

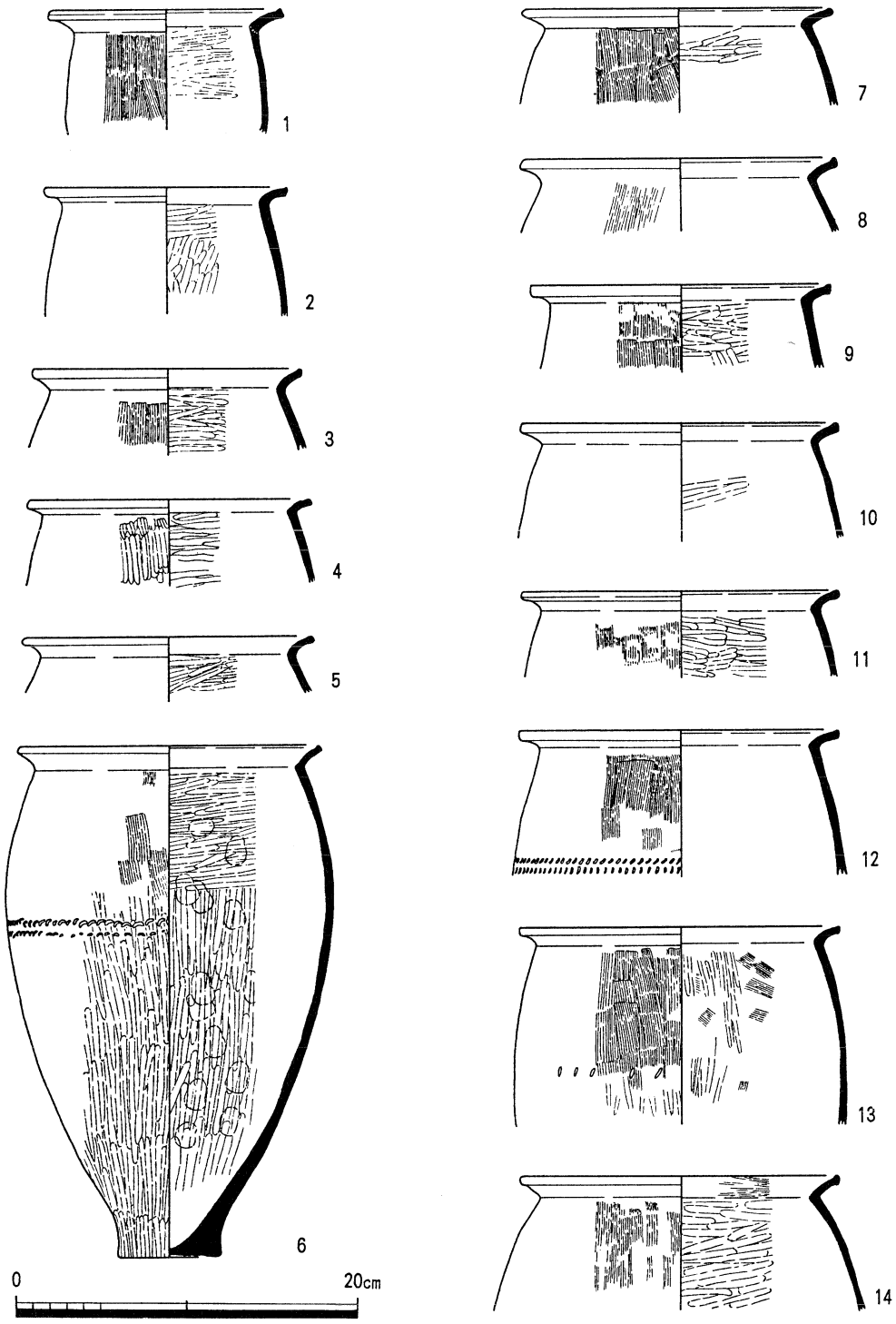
胴部上半以上の破片が大半であるため、全容は不明であるが、大きく張った球形に近い胴部を持ち、頸部は「く」の字に屈曲し、口縁部は肥厚する。加飾は口縁端部に刻目文を施すものがある以外はみられない。調整は胴部外面ハケ、内面ヘラミガキ、口縁部内外面ヨコナデを施すものと、胴部外面のハケの後ヘラミガキ、内面ナデ、口縁部内面にヘラミガキを施すもの、胴部内外面ヘラミガキを施すもの等があり、器面調整の中で、ヘラミガキの占める割合が多い



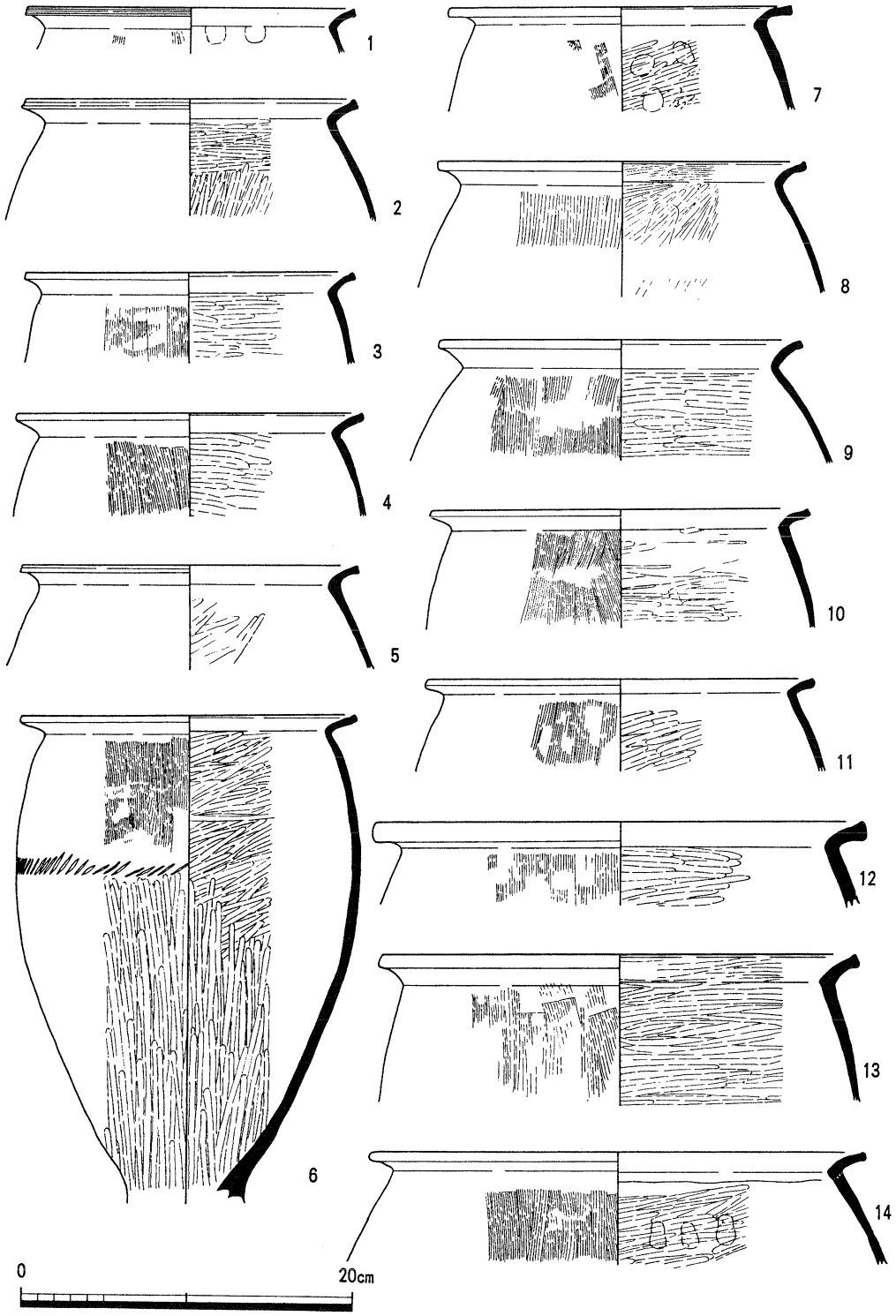
第24図　SD10・11出土遺物実測図（5）



第25図　SD10・11出土遺物実測図（6）

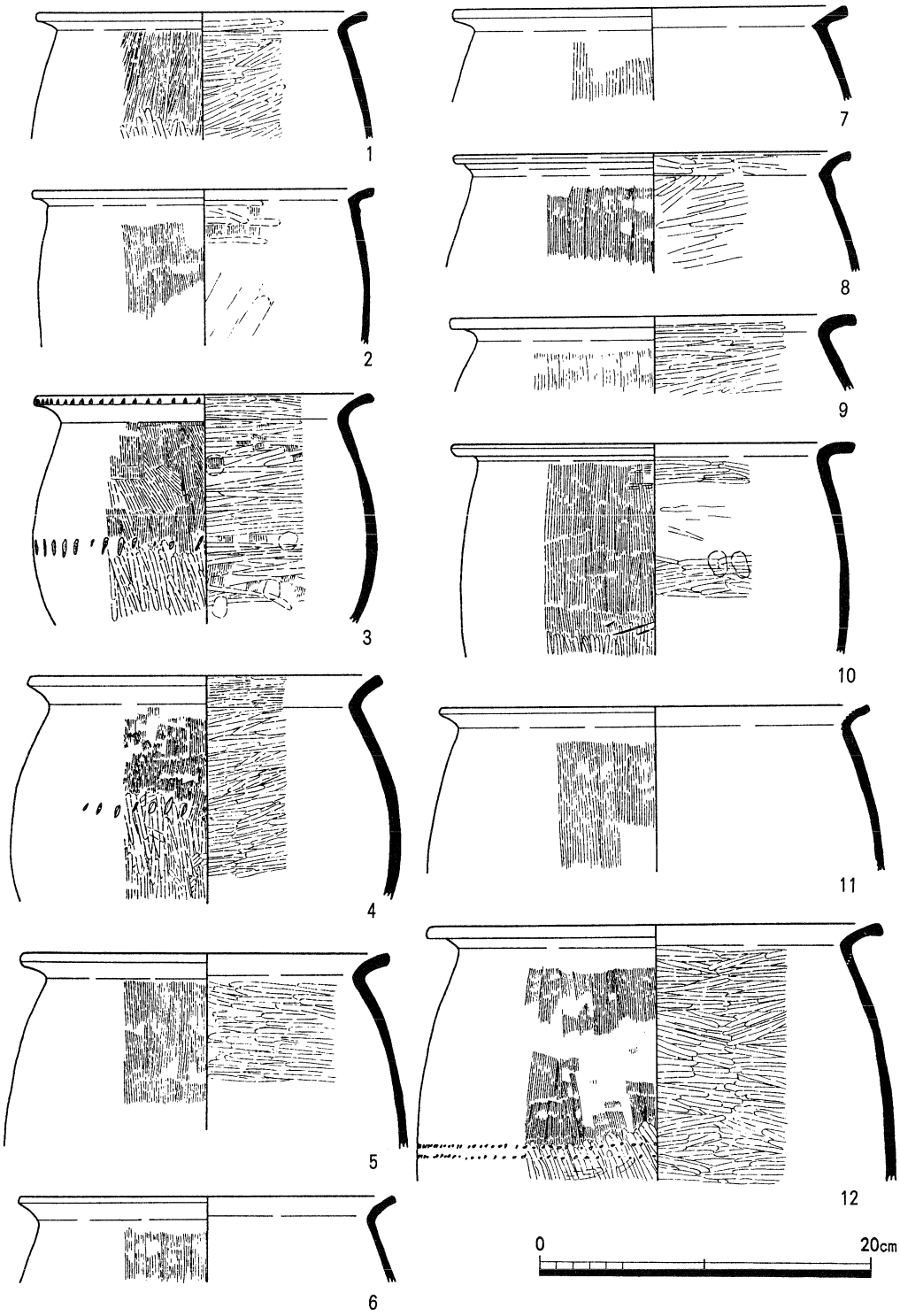


第26図　SD10・11出土遺物実測図（7）

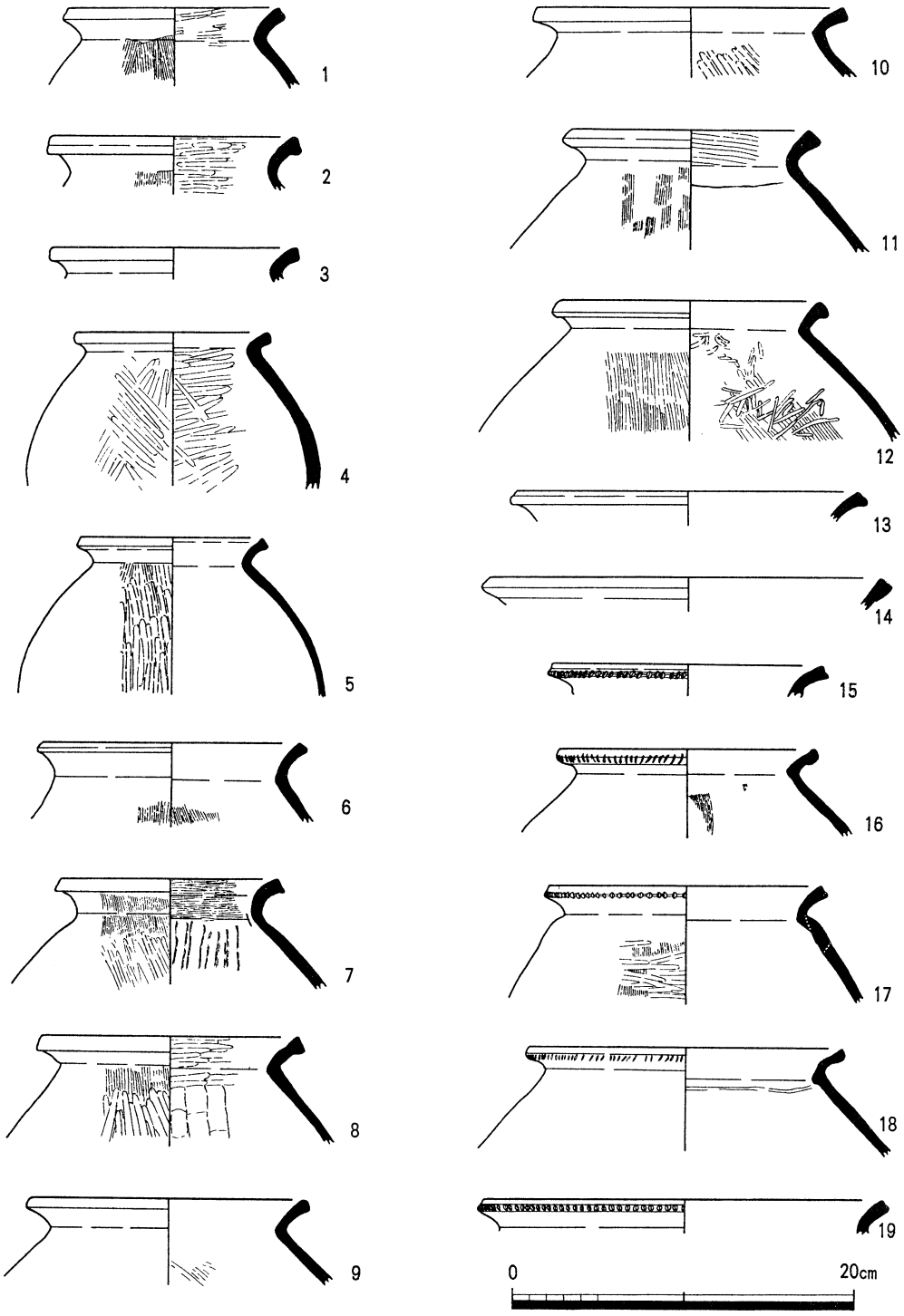


第27図　SD10・11出土遺物実測図（8）

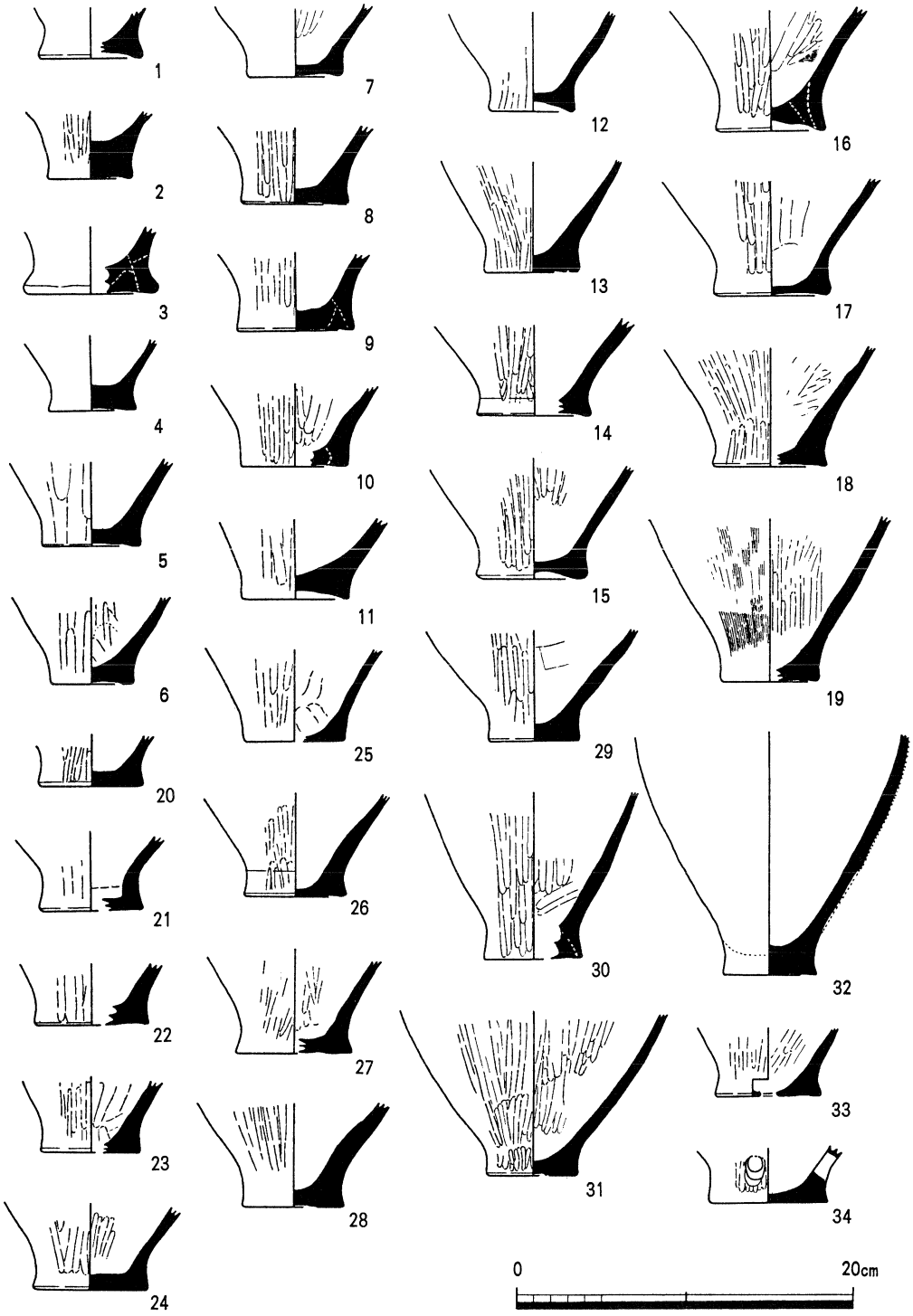
第28図　SD10・11出土遺物実測図（9）



第29図　SD10・11出土遺物実測図（10）



第30図　SD10・11出土遺物実測図（11）



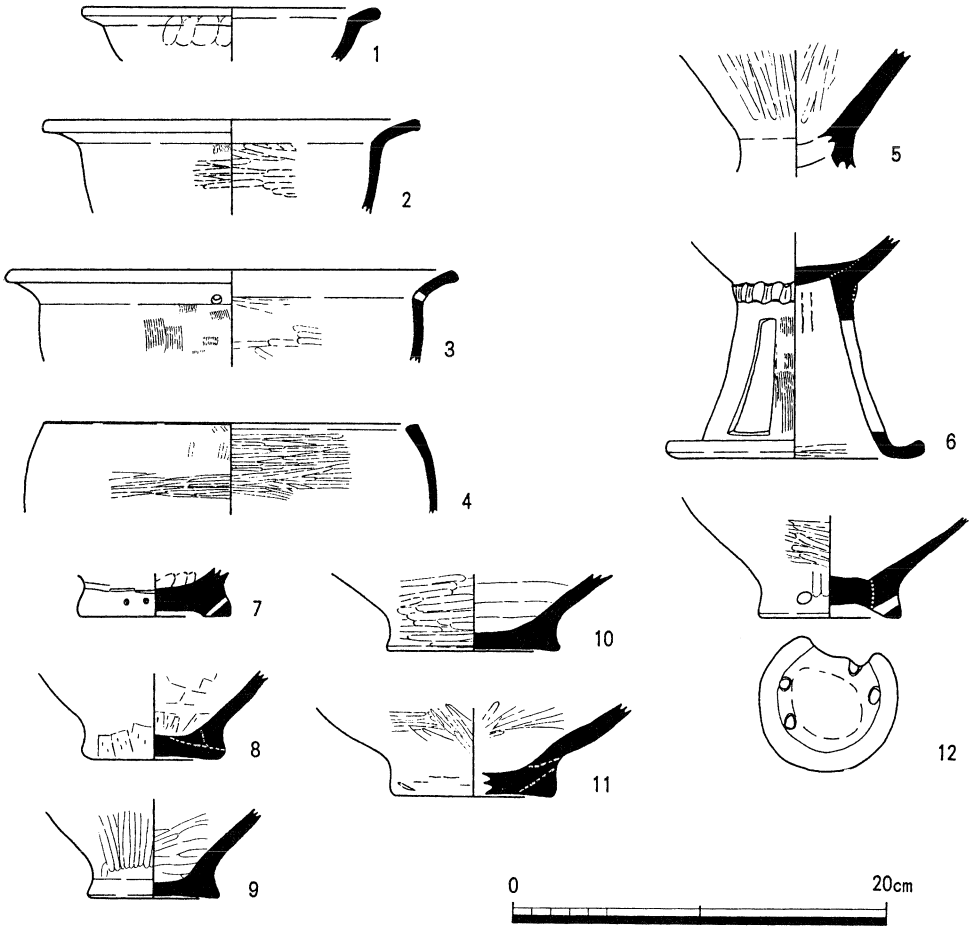
第31図　SD10・11出土遺物実測図（12）

器種である。

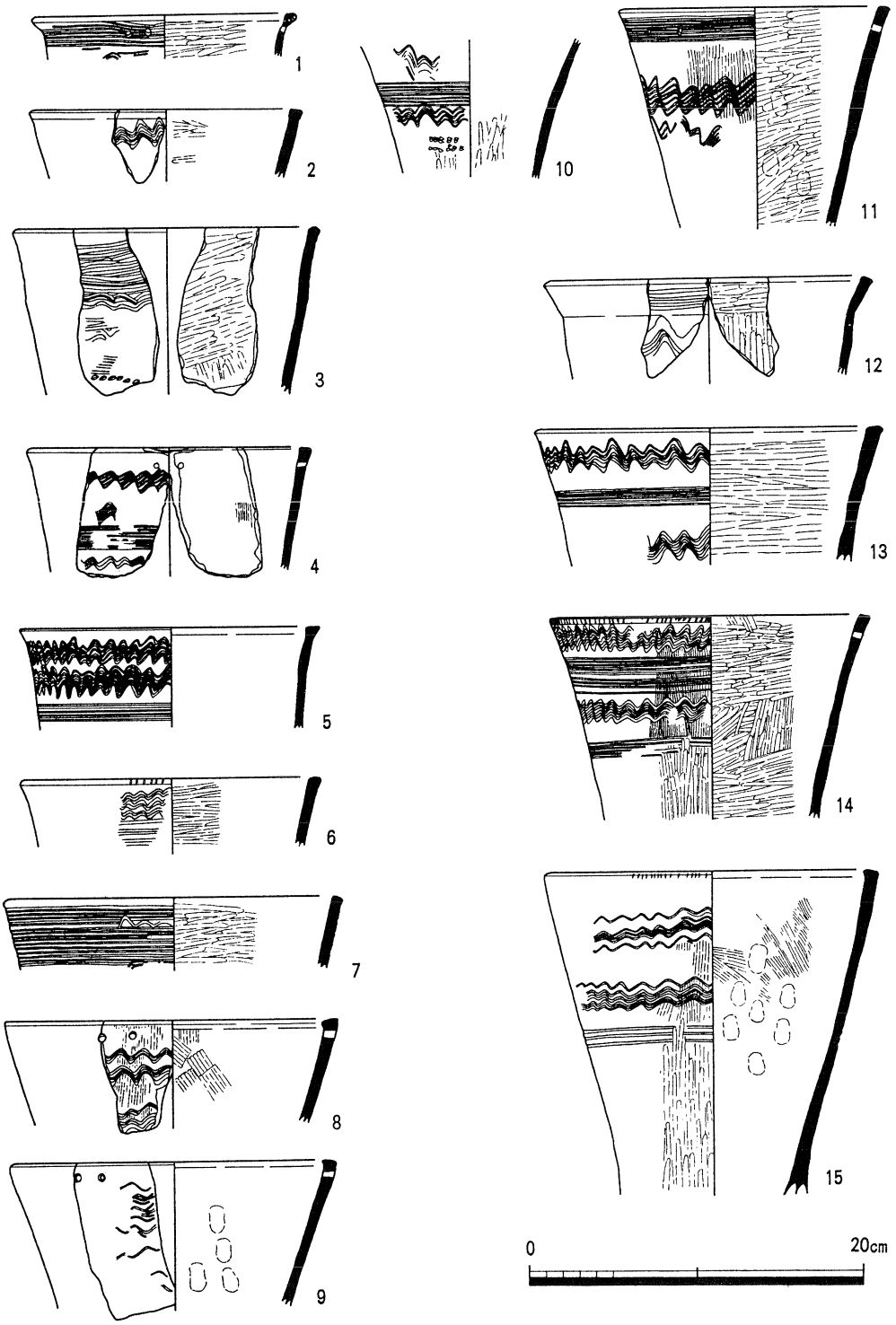
底部（第31図）

甕の底部は上げ底のもの（１～19）と平底のもの（20～34）に分かれる。これらの底部は甕Ａの底部である。底径は６cm前後であり、直立気味に外傾する底部を持ち、底部の厚さは薄くつくられている。調整は縦ヘラミガキを施す。底部端をヨコナデするものもみられる。内面には粗いヘラミガキの前にヘラケズリ状の調整がみられるものもある。（３・32）は使用による加熱により、（３）は底部が赤変してもろくなっており、（32）はやはり使用によると思われる器壁の剥落がみられる。（33）は甑の底部と考えられ、底部中央に穿孔がみられる。（34）は底部側面からの穿孔がみられる。

底部（第32図７～12）



第32図　SD10・11出土遺物実測図（13）



第33図　SD10・11出土遺物実測図（14）

（7～12）はその多くが甕Bの底部と考えられるもので、いずれも上げ底の底部から低く外傾しながら立ち上がる胴部を持つ。（7，12）は2孔一対の円孔がみられる。調整は内外面ともヘラミガキが基本となる。（7，12）は壷の底部である可能性も高い。

高坏（第32図）

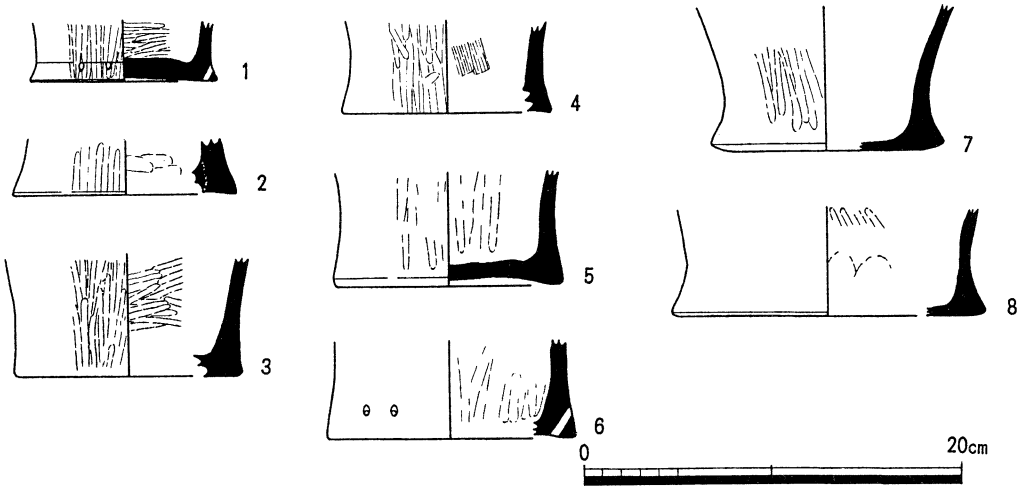
（1～3）は内湾しながら立ち上がる坏部から屈曲し、斜め方向に外反する口縁部を持つものである。口縁端部はわずかに肥厚する。（3）は坏部から口縁部の屈曲部に円孔を施す。2孔一対になるうちの一つである。調整は、（2）は坏部内外面をヘラミガキ、口縁部ヨコナデ、（3）は外面ハケ、内面ヘラミガキを施す。（4）は内傾する口縁部を持つもので、口縁端部を肥厚させる。坏部下半の状況は不明であるが、脚部がつくものと考えられる。調整は内面ヘラミガキ、外面下半ヘラミガキ、上半ハケ後ヨコナデを施す。

（5）は坏部片である。直線的に外傾する坏部である。調整は内外面ヘラミガキを施す。（6）は坏部下半から脚部の破片である。脚端部は外に屈曲し肥厚する端部を持ち、脚部は内傾しながら直線的に立ち上がり、坏部は内湾しながら立ち上がる。脚部から坏部は一体で整形されており、坏部内面底は円盤充填が行われている。脚部は4方向から方形の透孔を施し、脚部から坏部への屈曲部には押圧突帯文を1条施す。調整は脚部外面ハケ、脚部内面ヘラミガキを施す。

鉢（第33・34図）

やや上げ底気味の底部から屈曲し、体部下半では内傾しながら立ち上がり、上半部は直線的に外反しながら立ち上がる。底部および口縁部につりさげ用の2孔1対の円孔がみられる。

加飾は、口縁部に刻目文、体部上面下半に櫛描波状文、櫛描直線文を交互に施す。（3）の



第34図　SD10・11出土遺物実測図（15）

ように、その下に刺突文を施すものとみられる。体部の加飾は、同時期の壷の体部と共通した加飾方法をとることにより、形態的には鉢であるが、その他は壷との共通点が多く、呼称方法も無頸壷とした方がよいのかも知れない。施文の違いで分ければ以下の通りである。

波・直・波・直　13, 14, 6 ?

波・波・直・波　4, 5, 8, 9, 15, 10 ?

直・波・直　3, 11, 12, 7 ?, 1 ?

調整は上半部ハケ、下半部タテヘラミガキ、内面ヨコヘラミガキが大半、一部（8, 15）のようにハケ、（9）のようにナデを施すものもみられる。

石器　第35〜42図

SD10・11から出土した石器は、土器および木製品に比べ量的に少なく、工具と考えられる石器は、未製品を除けば皆無である。

打製石斧（石鍬）　第35・36図（1〜4）

（1）は基部を欠損するが、長方形を呈するものと考えられる。刃部は鋭利につくられており、側縁部は若干の刃潰しがみられる。（2）は完形品である。厚い素材を使用し、基部がやや狭い、撥形を呈する。刃部は使用による打撃の為、先端部は丸い。両側縁部は敲打による刃潰しが顕著である。（3, 4）は厚い素材を利用した大型品である。先端部および基部を欠損、裁断面が残る。両方とも自然面が残り、両側縁部には敲打による刃潰しが顕著である。（3）は形態が直線的で、長方形を呈するのに対し、（4）は基部および先端部の両側縁2ヶ所がくびれる。

打製石庖丁　第37図（1〜5）

いずれのものも、約1／2を欠損する。抉りをもつものは（4）のみである。形態は（1）を除き半月状を呈し、背部は敲打による刃潰し、刃部は両面からの打ち欠きにより鋭利な刃部をつくる。いずれの石庖丁も、両面に平坦面を多く残すものが多い。

石鎌　第37図（6）

先端部を一部欠損するが、ほぼ完形である。幅の広い基部から徐々に背部は狭くなり、先端部に至る。刃部は直線的で、両面からの打ち欠きにより刃部をつくる。背部には敲打による刃潰しがみられる。

楔形石器　第38図（1, 2）

（1）は厚い素材を使用するもので、両側縁に裁断面をもつ。上縁部および下縁部に敲打による刃潰れがみられる。（2）も厚い素材を使用。両側縁部および上縁部に裁断面をもつ。下縁部は敲打による刃潰れがみられる。

石鏃　第39図（1〜3）

（1）は凹基式の石鏃である。薄い素材を使用し、基部の抉りは深い。両面とも側縁部のつくりは丁寧である。（2）は未製品である。調整は一部にしか認められない。（3）は厚い素材を使用する平基式の石鏃である。縁辺部の調整は粗い。

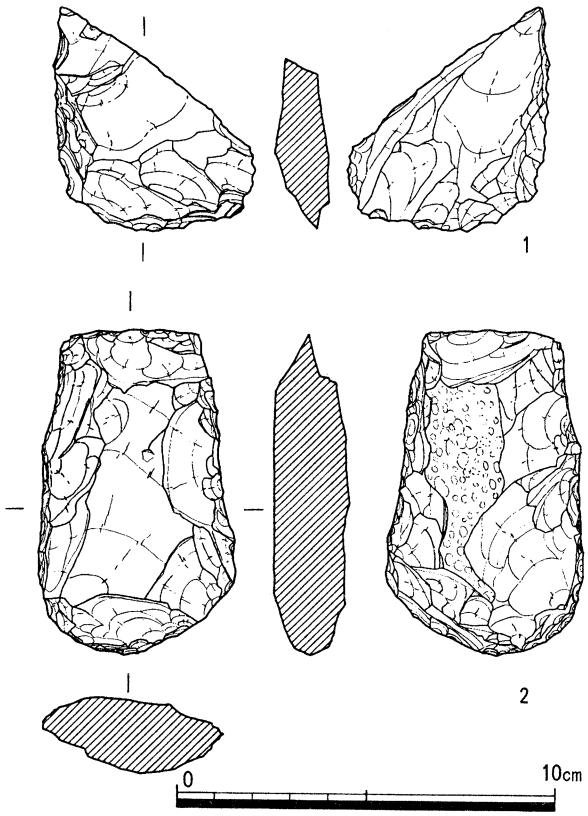
石槍　第39図（4）

（4）は先端部は欠損するもので、両面とも平坦面を多く残す。先端部近くは両面から調整により鋭利であり、一方、基部は敲打による刃潰れがみられ、丸い。

削器　第40図（1～10）

（1～10）に示したものは、削器と考えられるもので、上縁部および下縁部に明瞭な調整を行う。

（4，5）以外は、下縁部のみに主な調整がみられる。いずれのものも、鋭利な大剥離面を利用したものが多く、下縁部の調整は少ないが、鋭利である。



第35図　SD10・11出土遺物実測図（16）

磨製石斧（未製品）　第41図（1）

表面は、刃部近くは丁寧に研磨が行われているが、側面、裏面は未調整である。蛤刃石斧の未製品の可能性が高い。

敲石　第41図（2）

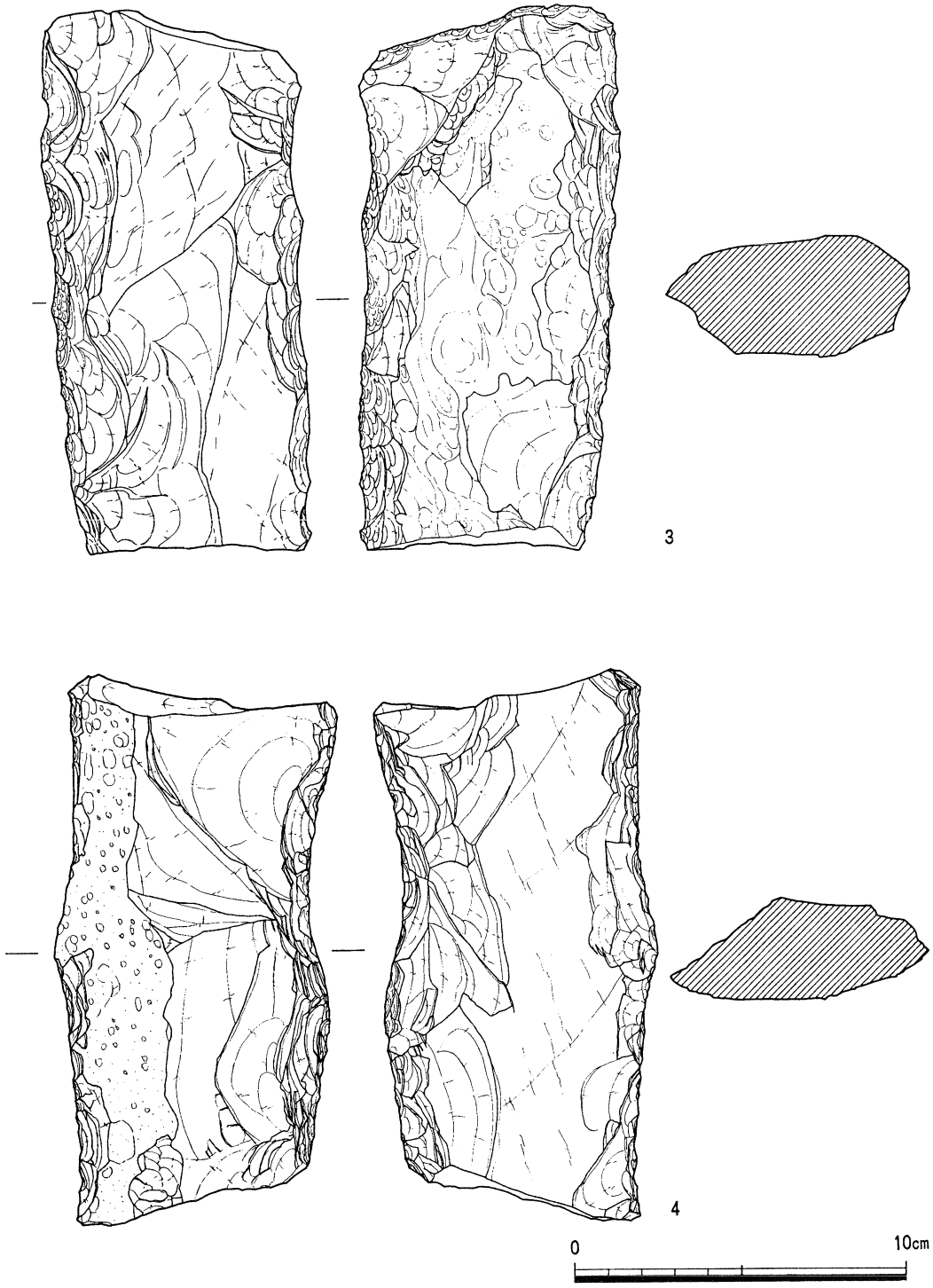
（2）は平面形態が楕円形を呈するもので、表、裏面ともに平坦面が多い。側面は全面に、敲打による潰れ、剥離がみられる。

砥石　第42図（1）

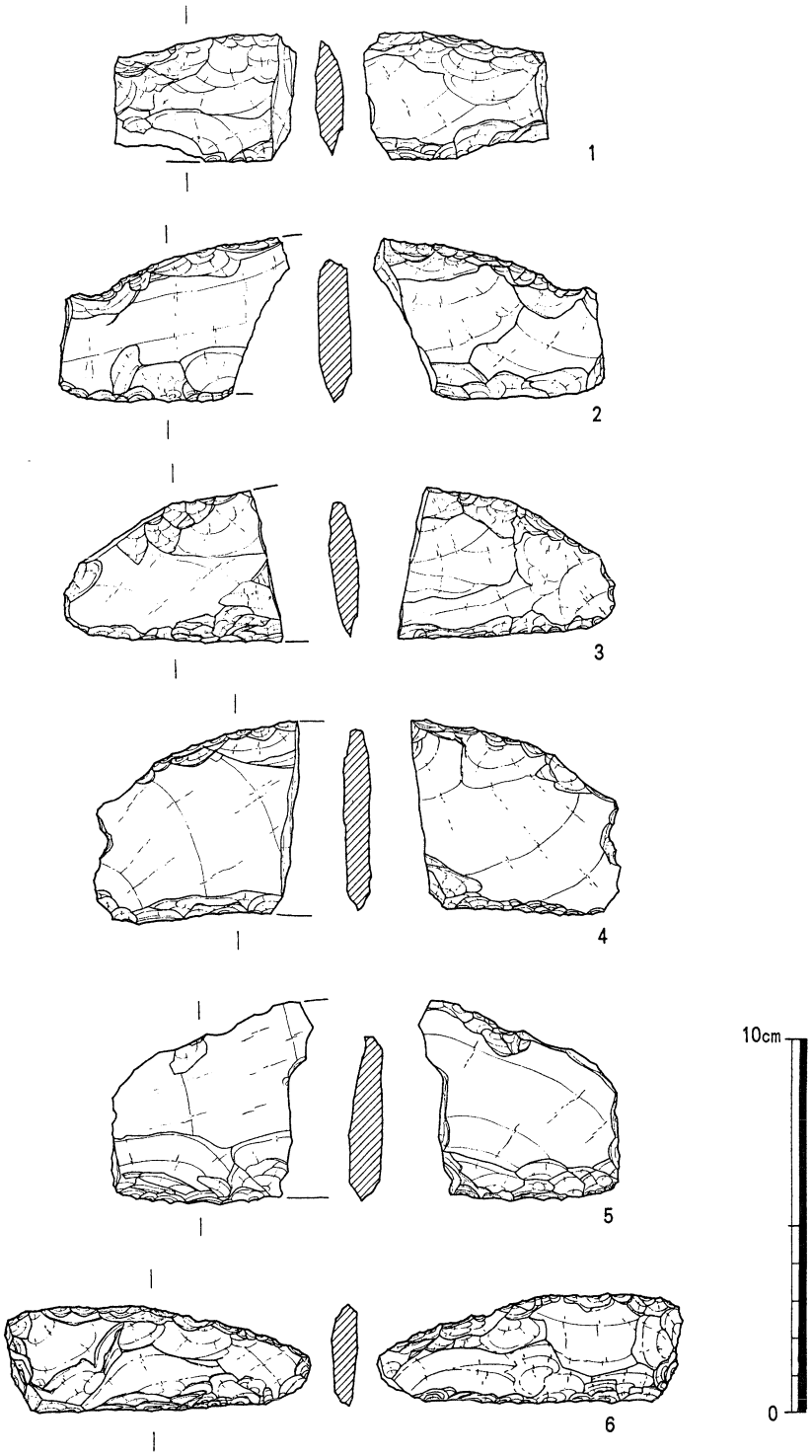
2面について使用が認められるもので、表面は長辺部が中央部で凹むが、全面を使用し、裏面は筋状の凹凸がみられる。表裏面で、磨耗の状況が異なることから、研磨するものによって使い分けを行っていた可能性が考えられる。

石皿　第42図（2）

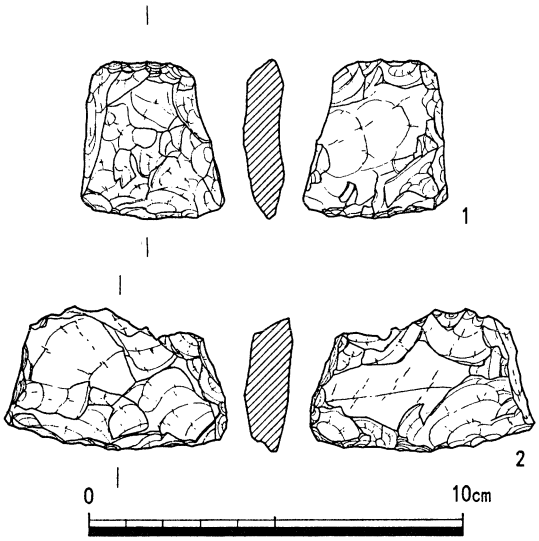
約半分を欠損する。表面中央部の凹の状況から石皿とした。中央部の凹みは敲打によって表面が凹凸である。裏面についても、磨耗の跡がみられ、使用されていた可能性がある。



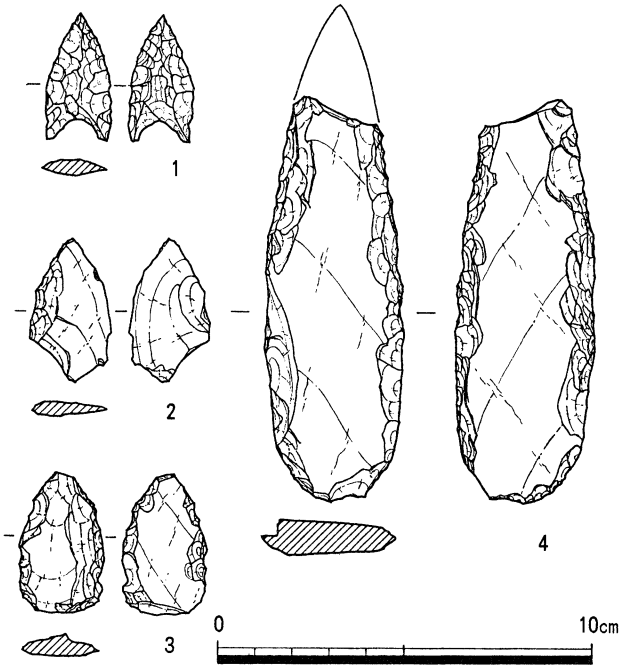
第36図　SD10・11出土遺物実測図（17）



第37図　SD10・11出土遺物実測図（18）



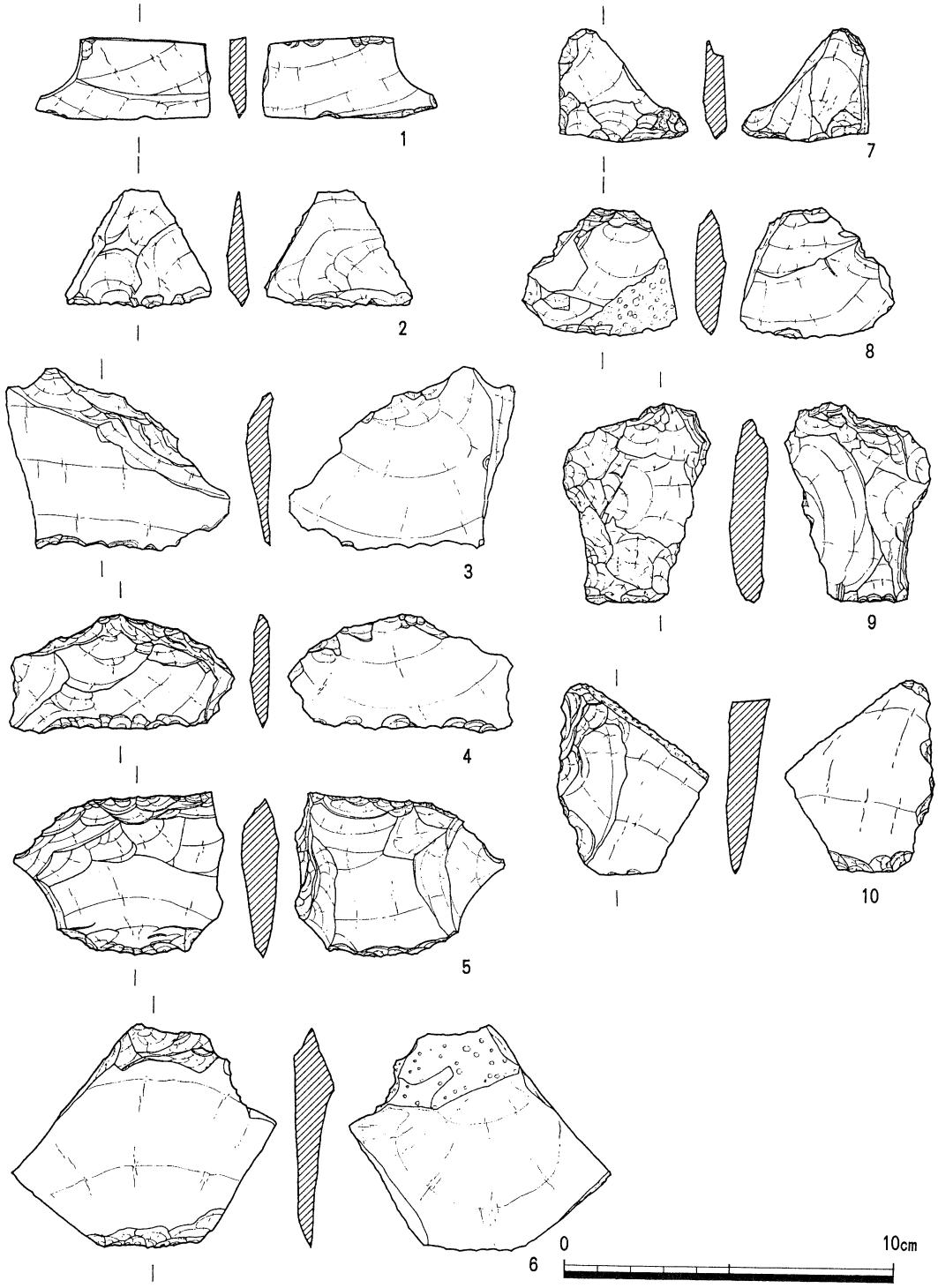
第38図　ＳＤ10・11出土遺物実測図（19）



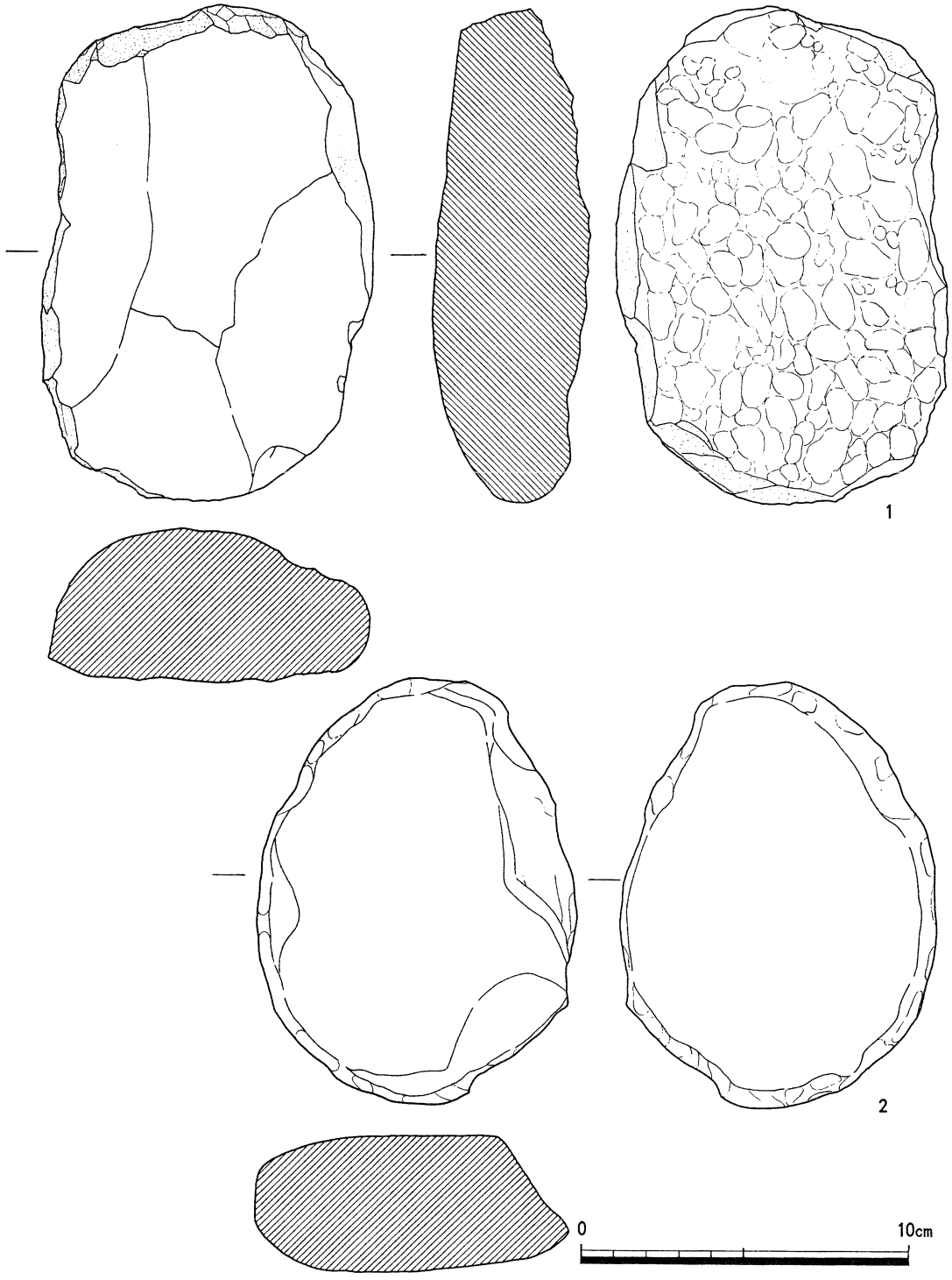
第39図　SD10・11出土遺物実測図（20）

敲打痕を有する石器（図版33－３）

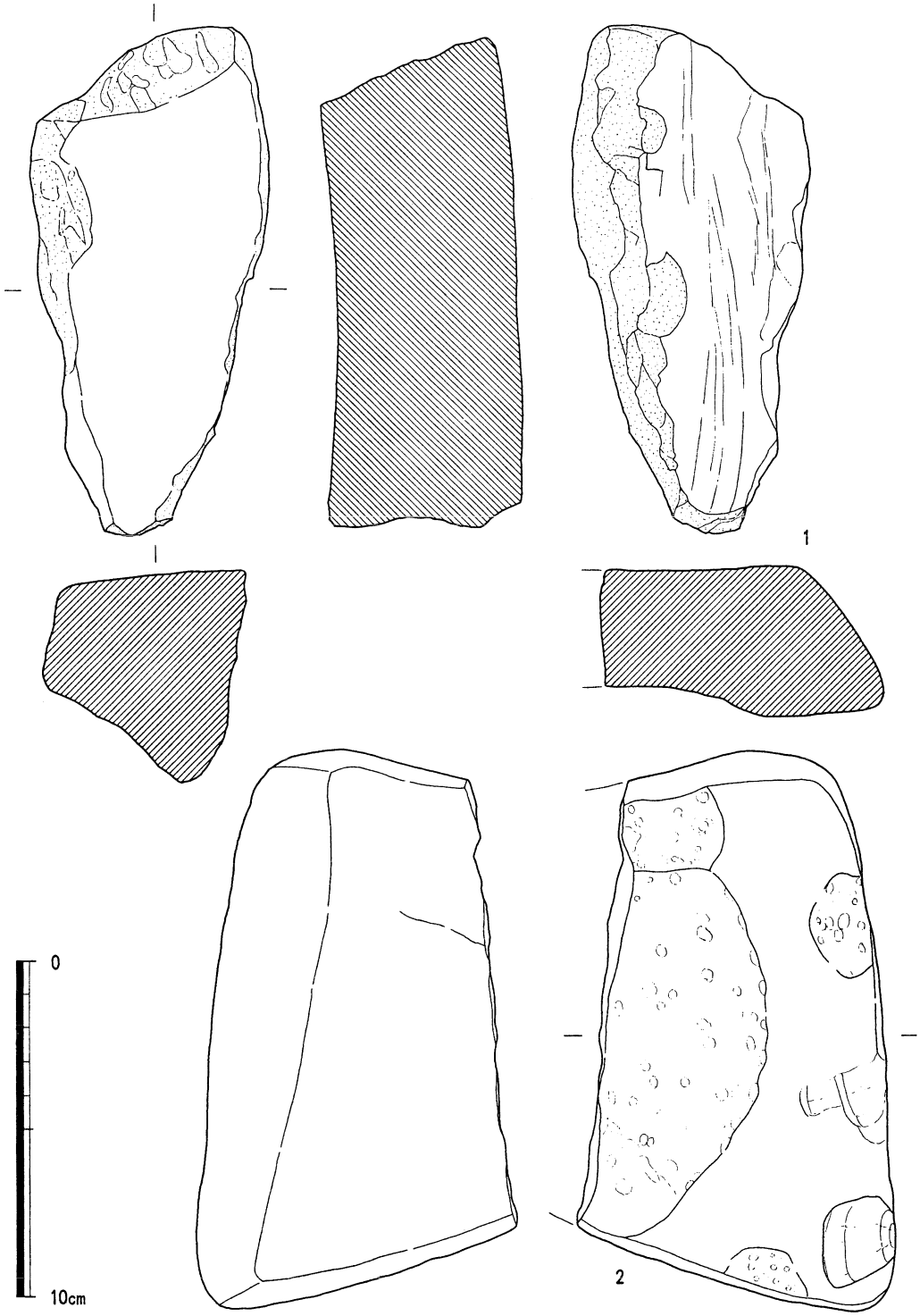
厚い素材を使用するもので、平面形態は撥形を呈する。一部、自然面を残す。側縁部は敲打による刃潰れ、階段状剥離が顕著である。規模の割に、厚い素材を使用しているのは、気になるが、形状からすれば、石鍬（打製石斧）の可能性も考えられる。



第40図　SD10・11出土遺物実測図（21）



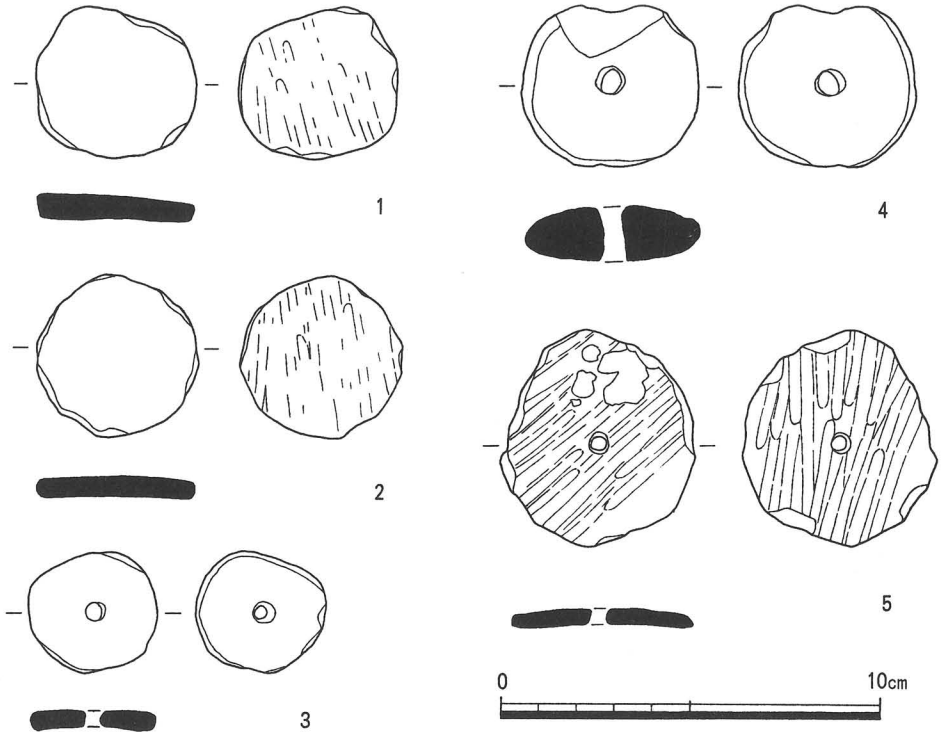
第41図　SD10・11出土遺物実測図（22）



第42図　SD10・11出土遺物実測図（23）

土製品（第43図）

土製紡錘車が５点出土している。４点は土器片を利用したもので、内２点は孔が貫通していない。規模は（５）がやや大きく、5.8×5.1cmであり、小さな（３）が、3.2×3.4cmである。



第43図　SD10・11出土遺物実測図（24）

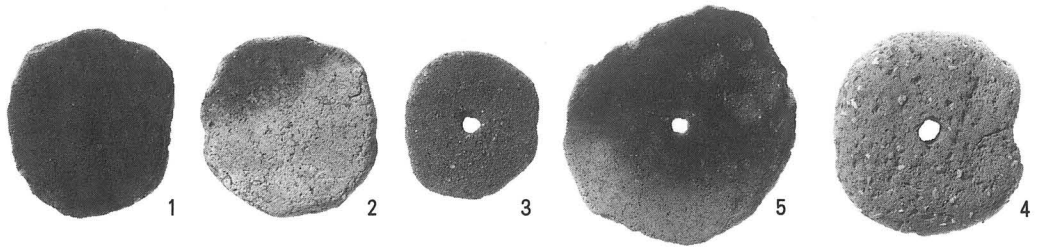


写真　SD10・11出土遺物　紡錘車

木器および木製品

遺構の稿でも述べているが、SD10、11からは多量の木器および木製品、自然木等が多量に検出された。これらの木製遺物の分類については、奈良国立文化財研究所編『木器集成図録近畿原始編』(1993. 3) をもとに分類した。ただし、製品の多くは、この書によって類例の多くを確認することができたが、それ以外の製品、加工材については、用途を特定できていないものも多い。それらの木製遺物については、その木製遺物の現在の特徴により分類した為、後半部の分類は上記の書に準拠しない。最終的に上記の書の編集者である上原真人氏に当地まで御足労願い、直接遺物の検証を行って頂いた結果、新たな知見を多く確認することができ、また、多くの御教示を頂き事実誤認を訂正することができた。

A　工具（第44・45図）

明確に用途がわかり、工具と認定できるのは、斧だけである。2点図化した。

1　斧（第44図）

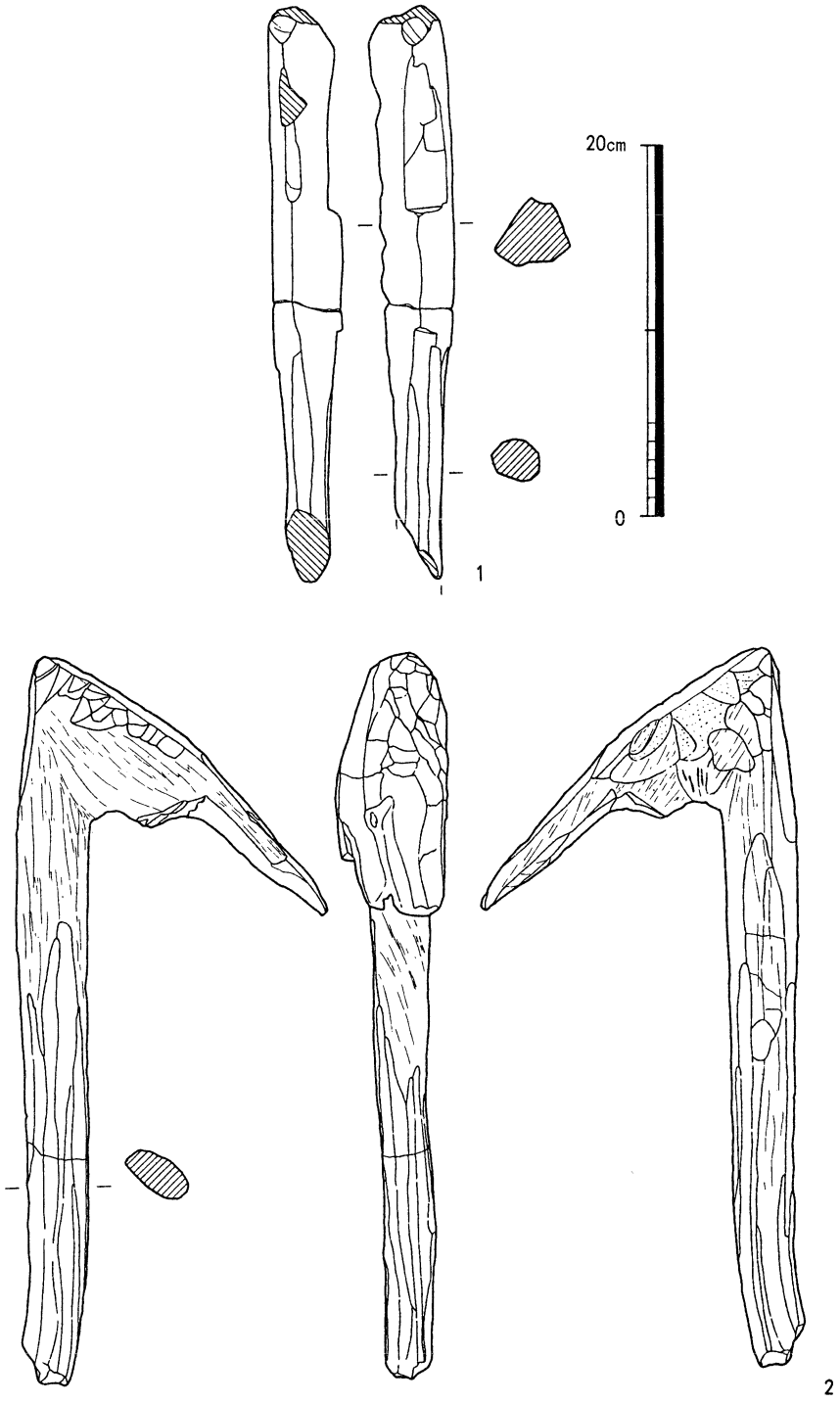
（1）はミカン割材を利用した板状鉄斧の柄の未製品である。柄の頭部の上面に切り込みを施し、面をつくる。この面に柄を貫通させ、鉄斧を装着するものと考えられる。握部は、全面にわたって加工が施され、9面の加工痕がみられる。

（2）は一木式の斧膝柄である。斧台前面は後面に比べ薄く、先端を一段削りこんで装着面を作る。装着面側に比べ裏側を深く削りこんで加工を行い、大きな段をつくる。斧台後面との境には袋状鉄斧の袋端が接触していたと考えられる圧痕が両側に存在する。装着面は、斧台後面に比べやや広く平坦に加工されており、先端にいくにしたがい幅狭となる。握り部は明瞭な加工が確認でき、握り部と斧台後面付近は加工が粗い。着柄角度は52°であり、『木器集成図録』の平均値からは若干外れる。装着面前面の削り込みが弱いが、装着裏面の圧痕から袋部鉄斧の合わせ目は裏側に装着していたと想定できることから、装着面の幅が広く、長いが袋状鉄斧の柄と考えられる。

2　箆状木製品（第45図）

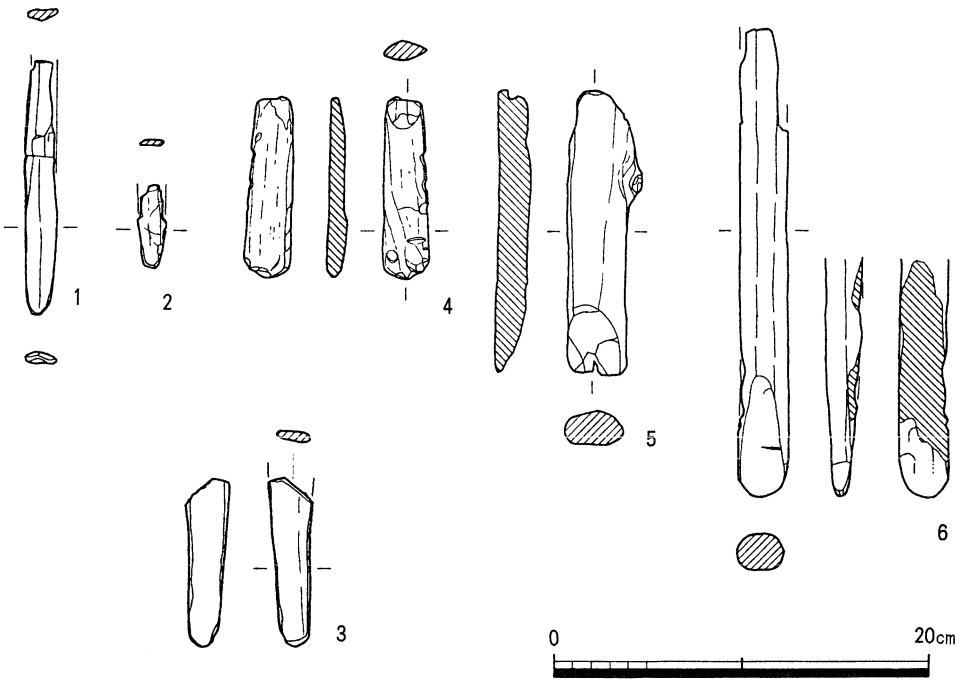
明確な用途は特定できないが、他の先端加工木とは形状および成形が異なることにより箆状木製品として取り扱った。

（1～6）は先端部を扁平に加工したものおよび全体が扁平な木製品である。（1～4）は小型、（5，6）はやや大型である。（1～4）は厚さ1㎝以内の薄い板材を利用するもので、先端部が箆状に尖る。いずれも破片になっており全容は不明である。（5，6）はやや大型で、直径2㎝以内の丸材を利用し、先端部を1もしくは2方向から加工するものである。いずれも破片で全容は不明である。先端部以外に明確な加工は認められない。工具の用途は特定できな



第44図　SD10・11出土遺物実測図（25）

いが（１～４）は小型の工具、（５，６）はやや大型の工具と考えられる。



第45図　SD10・11出土遺物実測図（26）

B　農具（第46～54図）

出土した木器の中で量が最も多く、機種としては鍬、鋤、臼、杵等があり、特に鍬は種類が豊富であり、形態が特徴的である。

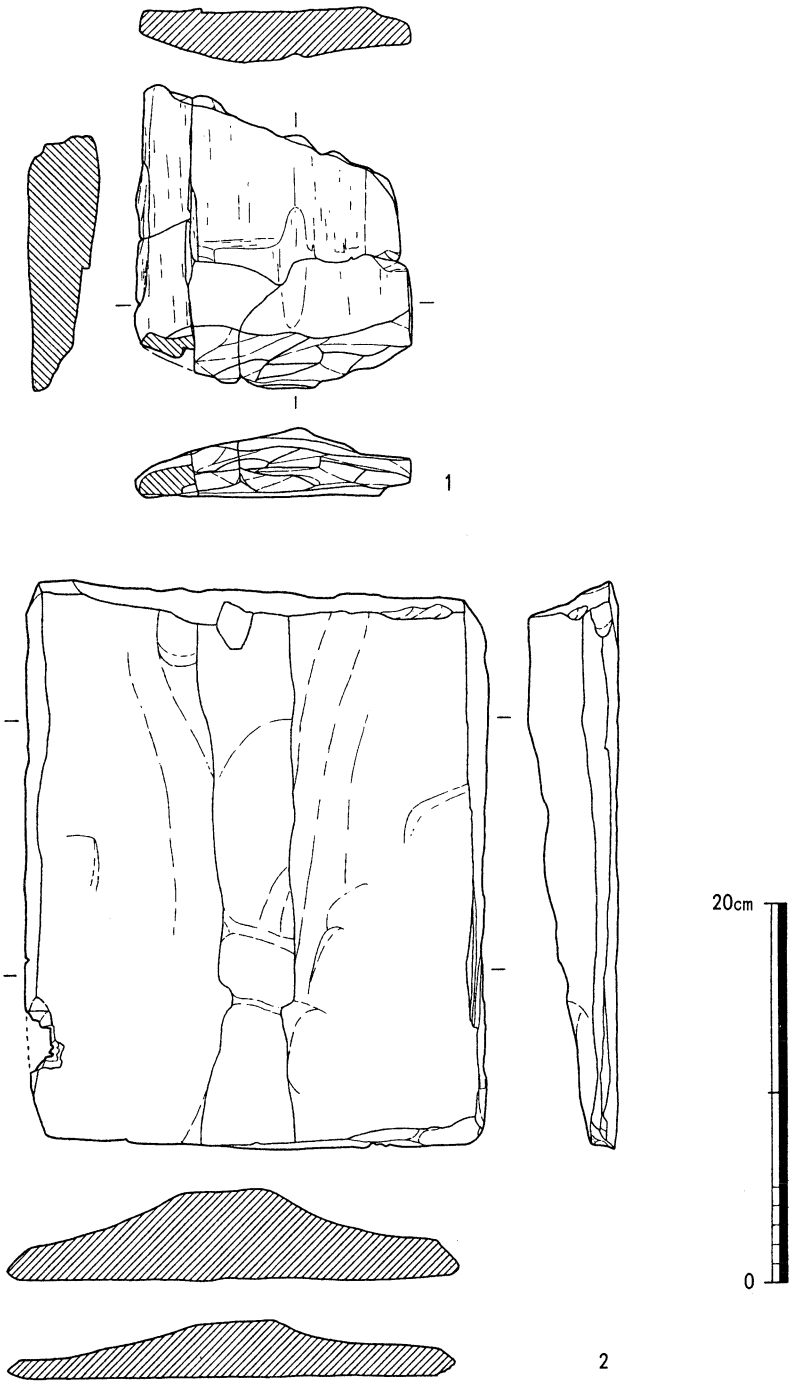
1　鍬（第46～50図）

（１）直柄平鍬（広鍬）　（第46図）

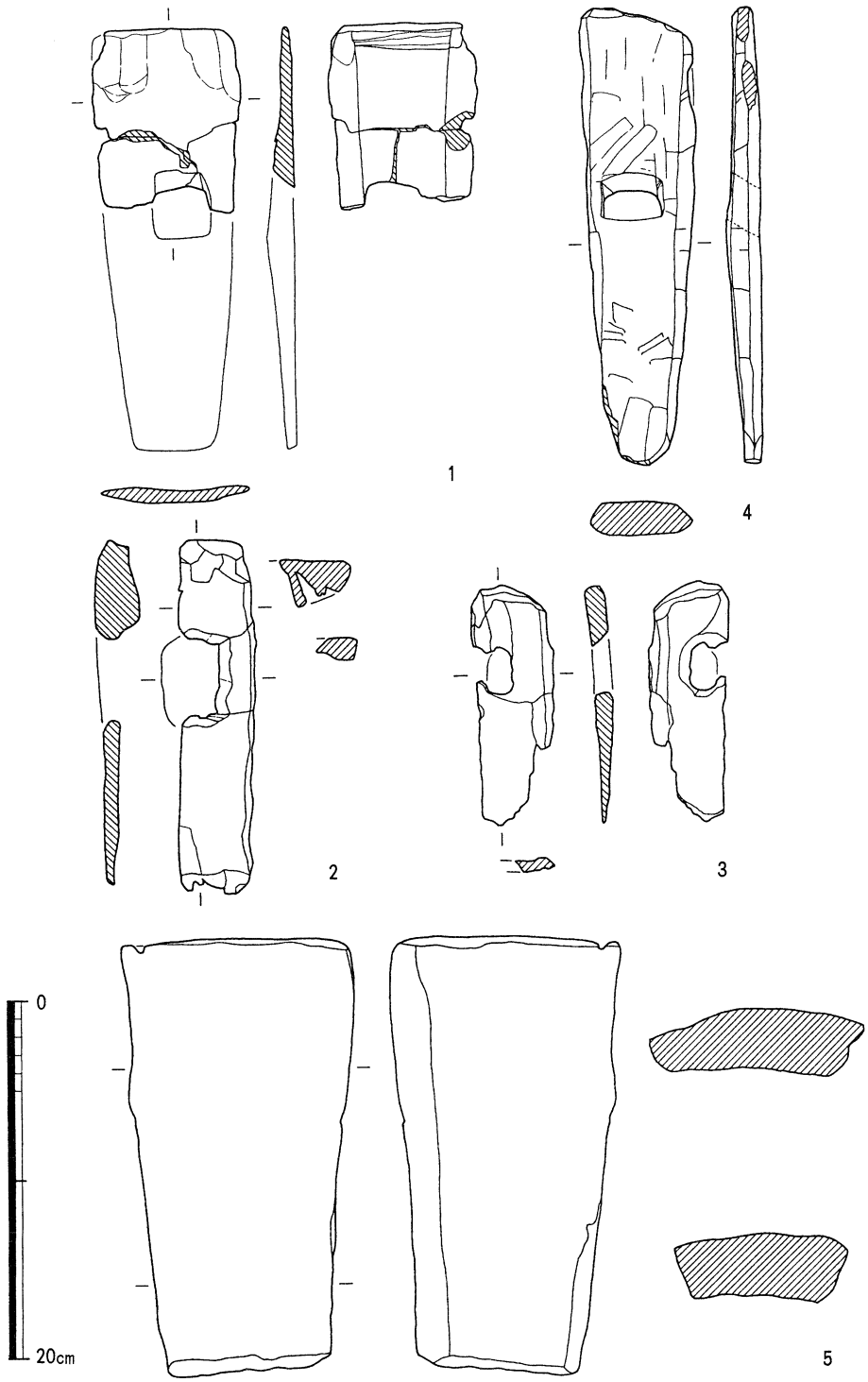
いずれも未製品である。（１）は身の周辺から中央に向かって隆起するもので、上部中央、頭部と考えられる部分が最も高い。刃部は後面からのみ加工が施され、中央部が突出する。（２）は（１）と同様、身の周囲から頭部に向かって隆起するもので、上端と刃縁幅は同じである。刃縁は後面からのみ加工を施す。側縁は前面および後面から面取りを施す。

（２）直柄平鍬（狭鍬）　（第47図）

（１～４）は製品、（５）は未製品である。（１）は上半部を欠損するが、刃縁部に比べ上端がやや狭い平面形態を呈する。断面形状は柄穴周辺が厚く、刃縁部にいくにしたがい薄くなる。方形と考えられる。柄穴は左に寄り、着柄角度は50°両側縁部は両面からの加工により薄く仕上げられている。刃縁部は両面からの加工がみられるが、後面は中央寄りに、前面については



第46図　SD10・11出土遺物実測図（27）



第47図　SD10・11出土遺物実測図（28）

側縁寄りに加工がみられる。これは刃縁部付近の断面が前面側に反っている為である。（２）は一側縁部を欠損するが、上縁と刃縁幅は同じようである。柄穴は確認できるが腐朽が著しいことより方形であるのか円形であるのかは不明である。これは刃縁部についても同様で、明瞭な加工痕が確認できない。（３）も（２）と同様残存状況は良くない。一側縁部および刃部を欠損し、頭部に火を受ける。柄穴は円形であると考えられる。断面形状は柄穴付近は厚く、刃縁部にいくにしたがい薄くなる。（４）は一部を欠損するもののほぼ完形である。上端から刃縁部にいくにしたがい幅が狭くなる。柄穴は方形で、中央部よりやや頭部寄りに穿ち、着柄角度は60°である。側縁部は両面からの加工により断面三角形を呈する。柄穴付近が最も厚く、上端および刃縁部にいくにしたがい薄くなる。後面には加工痕が顕著に残る。（５）は未製品である。下端に比べ上端の幅が広く、断面はやや凸状を呈する。

（３）　直柄又鍬　（第48図）

刃の大部分を欠損するが、中央部の柄穴と考えられる刳り込み周辺の緩やかな隆起から４本歯の又鍬になると考えられる。その場合、柄穴をあけるため、中央部の２本の歯の刳り込みが浅くなる形態になるものと考えられる。外側の歯の刳り込みに対応するように、上端に若干に刳り込みが入る。類例としては、頭部の状況が若干違うが大阪府瓜生堂遺跡出土の直柄又鍬（02314）がもっとも近いと考えられる。

（４）　直柄横鍬　（第48図）

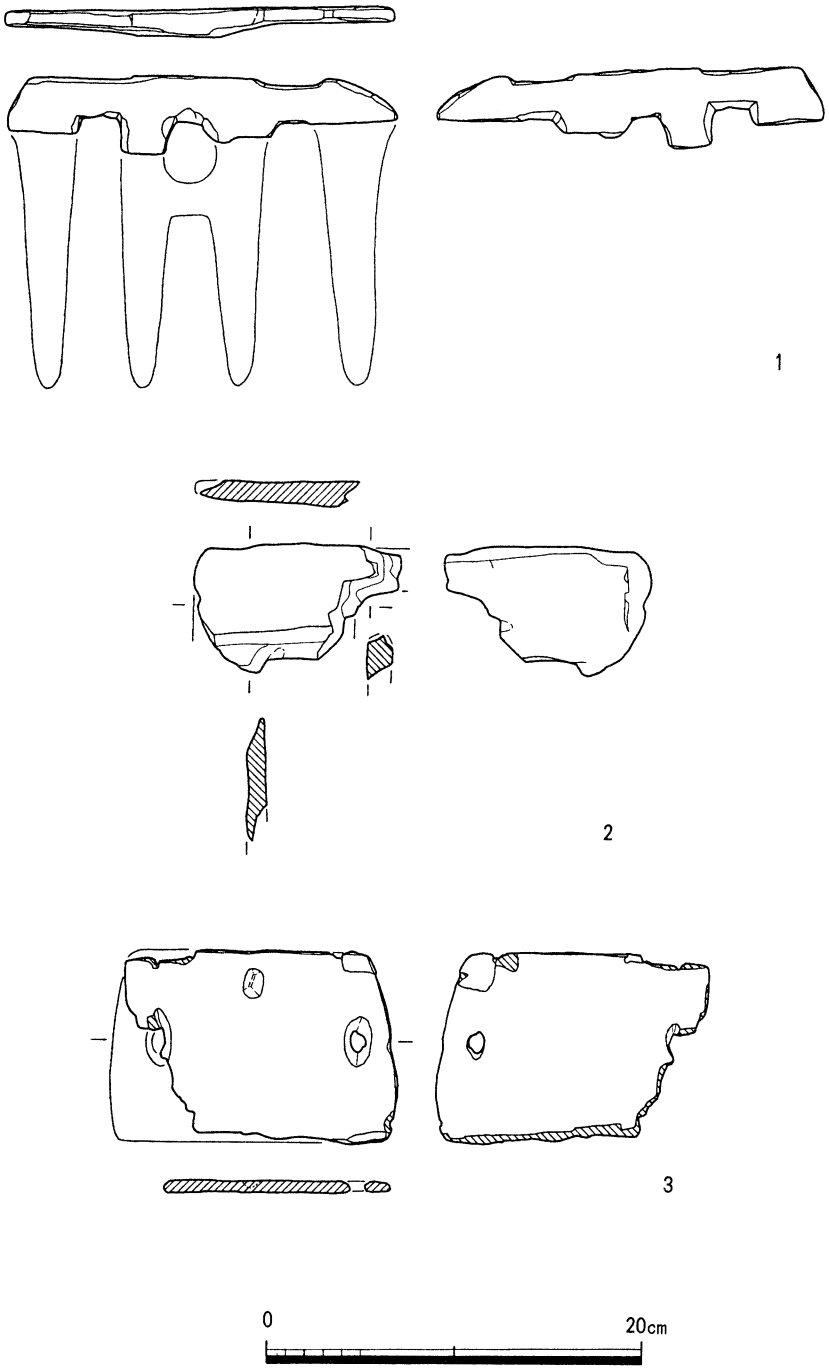
（２）は頭部および柄穴周辺を若干残すのみの破片である。柄穴周辺が、他の部分より緩やかに厚くなることから、Ｂ類隆起になるものと考えられる。（３）は直柄横鍬もしくは泥除と考えられるもので、下端に比べ上端が狭い台形を呈する。厚さは一定しており、中央両脇に楕円孔を穿つ。上端中央部の穴は貫通していない。他の泥除と比較して、法量が小さいこと、双孔の位置が柄孔より低い位置にあり、他のものと形態が違うことより、別の用途についても考える必要がある。

（５）　曲柄平鍬　（第49図）

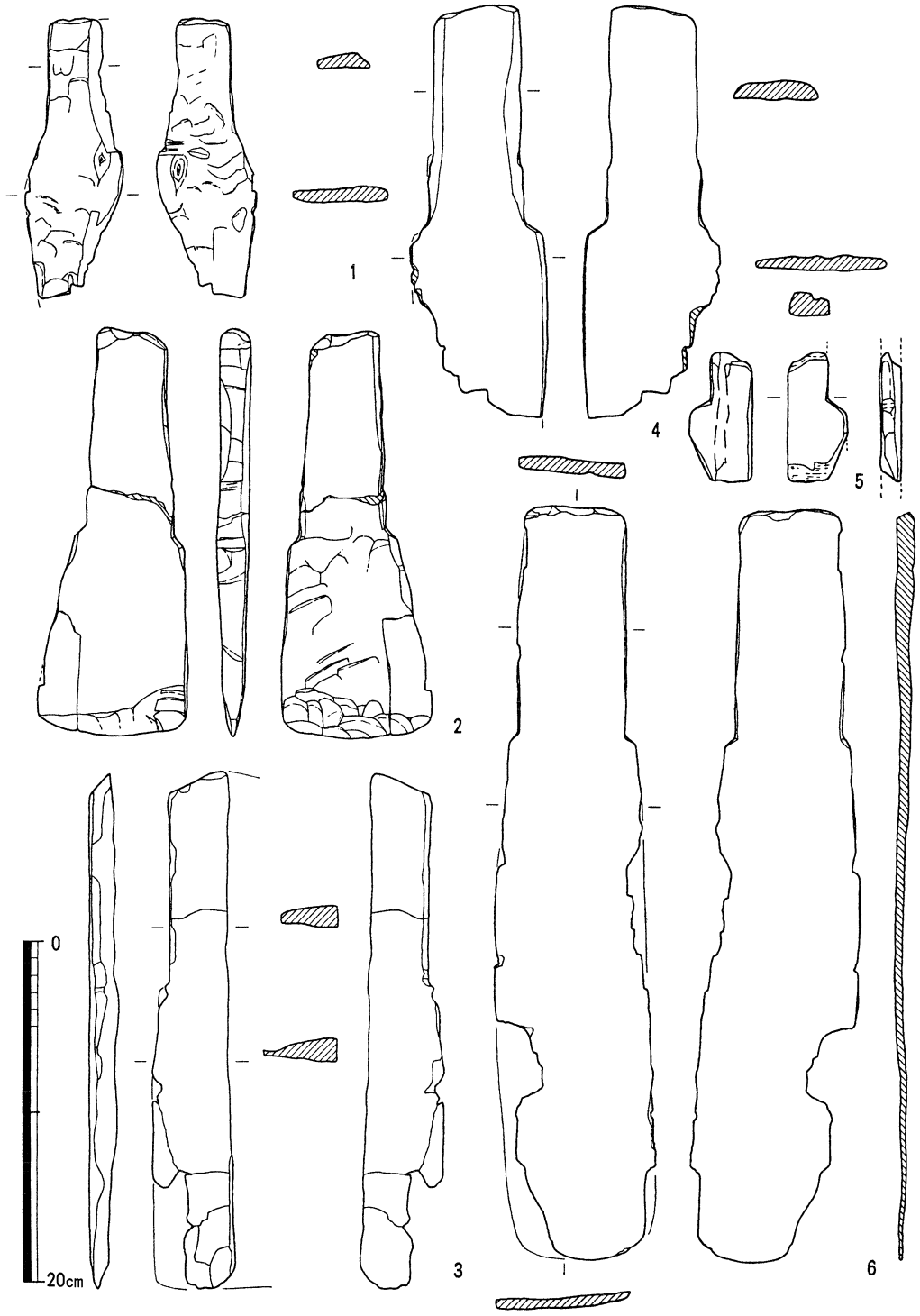
第49図（１～６）は上原分類ＣⅠ式の曲柄平鍬と考えられるものである。小さな破片となっているもの（５）、半分を欠損するもの（３）があるが、いずれの平鍬も軸部と刃部との境が明瞭で、刃部は下膨れで、刃部幅が肩幅よりも大きいといういずれの項目にも該当するが、他の類例に比べ軸部幅が広く、偏平である点に違いが認められる。個々の個体をみていくと、１，２の刃部の表裏ともに加工痕が明瞭に残る。（１～３，５）の軸部から刃部の厚さに比べ、（４，６）は厚さが薄く仕上げられている大形品である。

（６）　曲柄又鍬　（第50図）

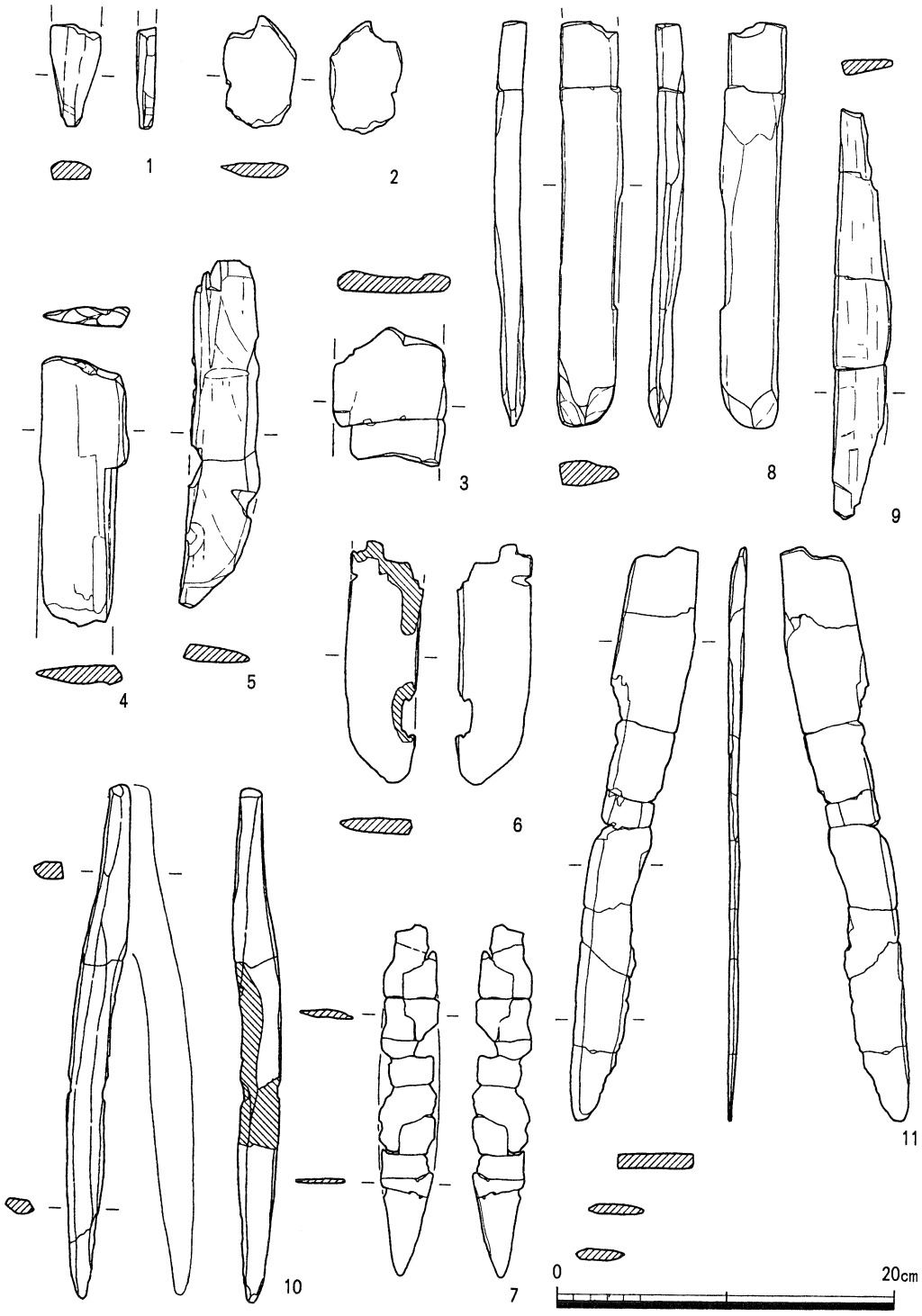
第50図（１～11）は上原分類の曲柄又鍬ＣⅡと考えられるものである。刃部片のものが多い



第48図　SD10・11出土遺物実測図（29）



第49図　SD10・11出土遺物実測図（30）



第50図　SD10・11出土遺物実測図（31）

が、残りの比較的良好な（10,11）で観察する限り、「着柄軸の下部がゆるやかに広がって刃部に至るため、軸部と刃部との境が不明瞭。なで肩のものが多い」という曲柄又鍬ＣⅡに該当する。

刃部の形状は、先端に向かって両側縁が徐々にすぼまる（7,10,11)、刃の最先端が内側にくるもの（5，6，8，9）に分かれる。刃部の横断面は外側に尖る二等辺三角形状を呈するものと、両側が面取りによって尖るものに分かれる。刃部幅は2.3〜4.2cmである。厚さについては1.0cm前後のものが大半を占めているが、（7）のみやや薄くできている。

（7）柄　（第51図）

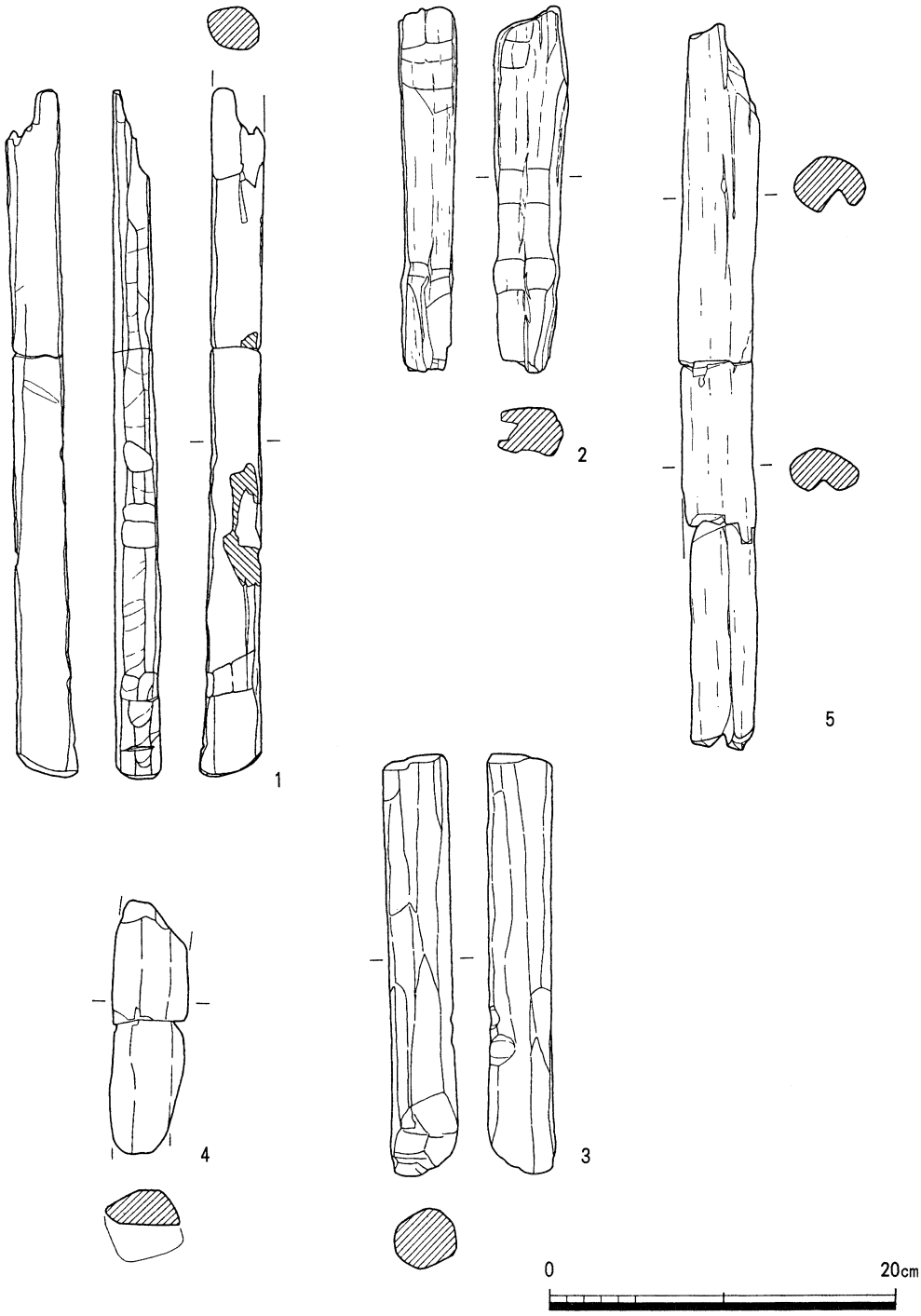
（1，2）は明確に柄と考えられるもの、（3〜5）は可能性のある丸棒である。（2）は柄の頭部が若干広がり、加工が施されているもので頭部の側面に「アタリ」が確認されたことより直柄鍬の柄と想定できるものである。頭部の断面形状は隅丸方形を呈し、狭鍬等の柄孔と形状規模も類似することから、これらに装着されていた可能性が高い。（3）は柄の頭部と考えられるもので、断面形状は方形を呈していることから、当遺跡から出土している方形柄孔をもつ狭鍬の柄の可能性が考えられる。柄の基部を欠損。（4）は全面に加工痕が残る丸棒である。断面形状は楕円形を呈する。下端部に、一方向からの加工を施し、鋭利な先端部をつくる。（5）は大半を欠損し、全体の状況は不明であるが、断面は楕円形を呈するものと考えられる。（6）は基部および頭部を欠損する。断面形状は楕円形を呈する。皮を剥いだ状態で使用したものか、明瞭な加工痕はみられない。

2　鋤　（第52図）

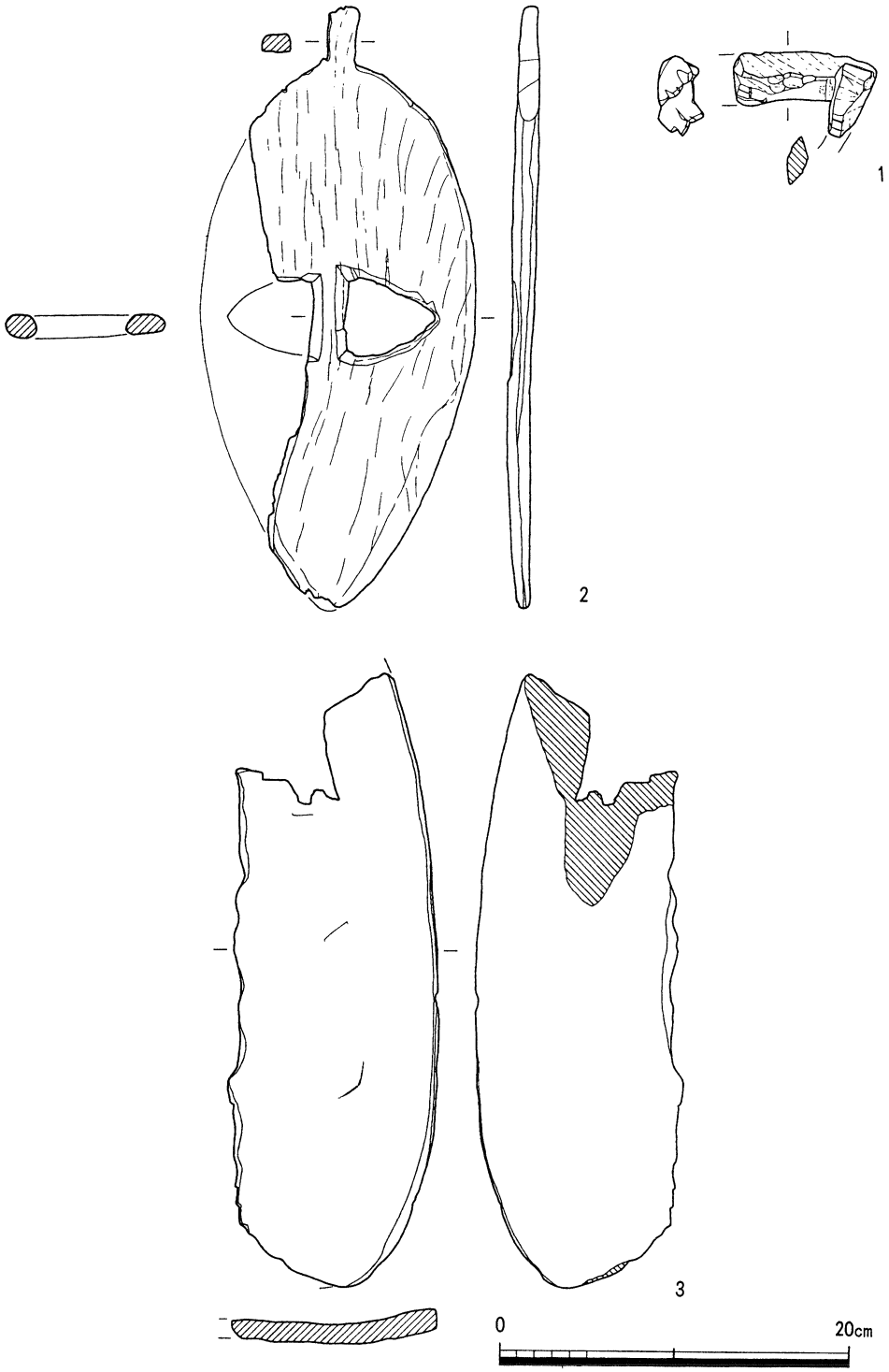
（1）把手状、（2）（3）は組合せ鋤の身と考えられるものである。（1）は逆三角形で中央に孔が空いた把手と考えていたが、東側端部に加工があり、これより先に伸びないことを確認した。逆に右側端部は破損しており、これよりも伸びる可能性があり、把手ではない可能性が高い。全面には加工痕がみられる。（2）は一側面を欠損するものの全体の状況が確認できる身である。身中央部に柄を固定する為の、左右対称になる平面三角形の孔を空ける。木器集成において、「丸肩Ⅰ種」と考えられるもので、北部九州、山陰地方で類例がみられる。軸部と陣部との境界は明瞭であり、側縁部は、両面からの加工により鋭利につくられている。が同時期の鋤と形態および使用材の材質が違うことより、農具と認めない意見が大勢を占める。（3）は身の中・下半部を残すもので、上半部を欠損するため、軸部等の状況は不明である。（2）と同様、身の中央部が膨らみ、先端部が尖る形状をする。身の前面中央がややふくらみ、後面は逆にくぼむ。

3　臼　（第53図）

小型臼と呼ばれているものである。鉢形を呈し、口径に比べ底径がやや小さくなる形状を呈



第51図　SD10・11出土遺物実測図（32）



第52図　SD10・11出土遺物実測図（33）

する。底が非常に厚く、近畿地方にも多くの類例がみられる。外面および内面に加工痕が顕著にみられる。加工痕が鋭利であることから金属製の工具による加工が考えられる。

4　竪杵　（第53図）

（２）は竪杵状木器である。円柱状を呈し、両端は使用によると考えられる磨滅が顕著で、先端は丸くなっている。中央部に直径0.5cmの穴を穿つ。明確な握部はみられないが、両端の状況からすれば竪杵の用途である「搗く」という作業が十分想定でき、法量との完形から、前述の小型臼とのセット関係が考えられる。（３）は握部付近で欠損するものの単節式の竪杵である。木器集成図録では竪杵Ｂ類としているものである。搗部は両端近くの径がもっとも大きく、握部にいくにしたがい径を減じる。握部との境に隆起帯がめぐり、そのうえに上下とも沈線を８条めぐらす。隆起帯の上に文様帯をもつものは類例が少ない。

搗部端の状況は、両端とも使用による磨滅が顕著で、上端部は丸く、下端部はやや平らであり、上下で使い分けを行っていた可能性が高い。搗部端の使用による磨滅もさることながら、握部の使用による磨滅は顕著で節端下部からの破損は、使用による磨滅が原因であると考えられる。

5　作業台　（第54図）

明確に作業台と認定できる根拠に乏しいが、形を整形するための工具痕とは別に、その後の作業によって入ったと考えられる工具痕をもつものを作業台として扱った。

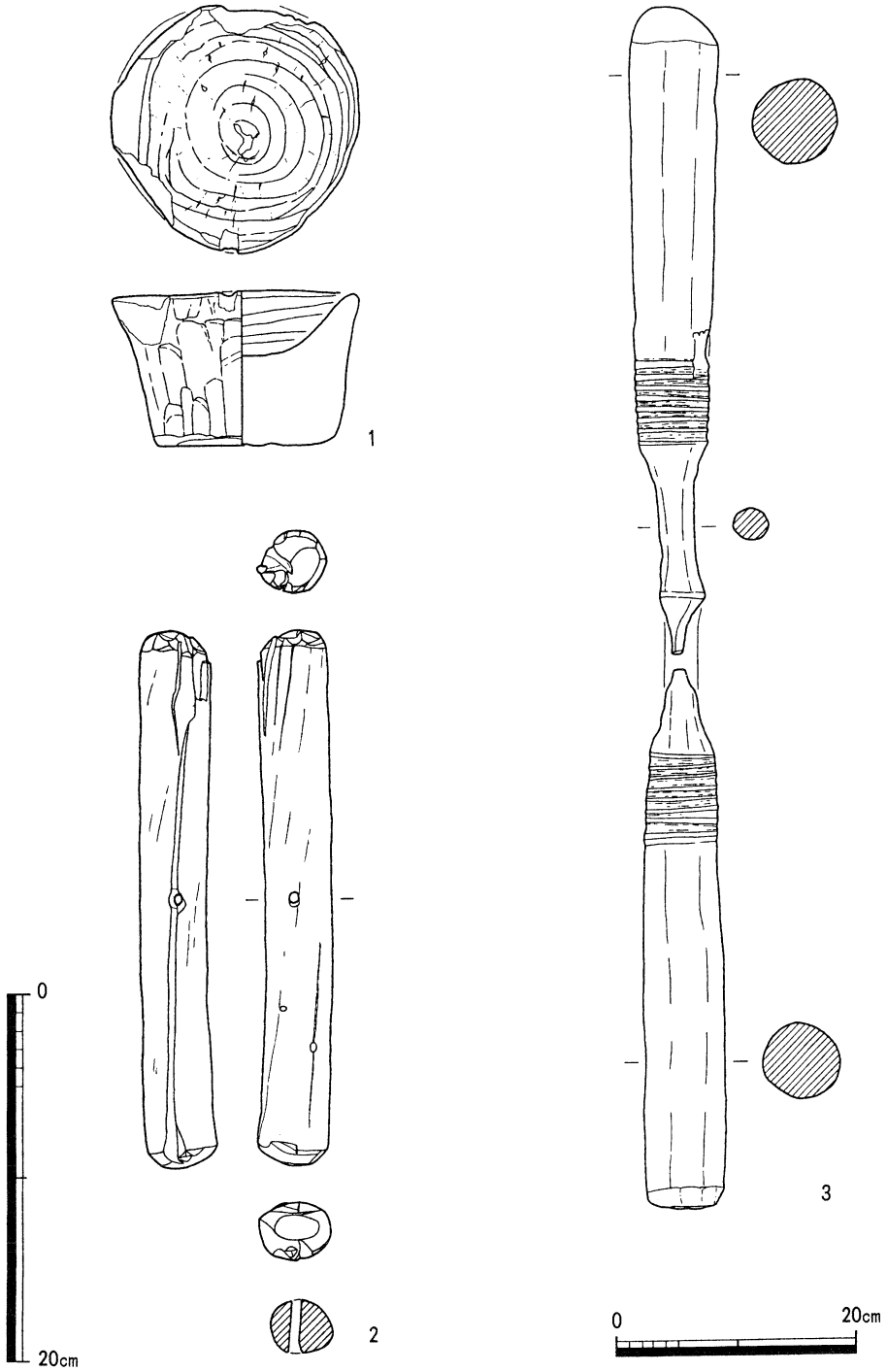
（１）は円柱状を呈する加工材である。上面がやや突出し、下面がやや凹む。側面の大半を欠損するが、全面に加工痕がみられる。側面及び上面は、面を整える工具痕が顕著に残る。下面についても面を整える工具痕が顕著に残るうえに、斧状工具による敲打痕が、円を巡るように残る。このことから、小物用の作業台が考えられる。（２）は突出部に若干の加工を施した板である。小片になっている為、全容は不明である。中央部がやや厚く、隆起し、両端にいくにしたがい薄くなる。（３）はミカン割りの大材を利用した作業台である。木口部分は工具による細かな加工痕がみられ、外側の広い面の中央部には、工具による上部からの粗い敲打痕が残る。

Ｃ　紡織具　（第55図）

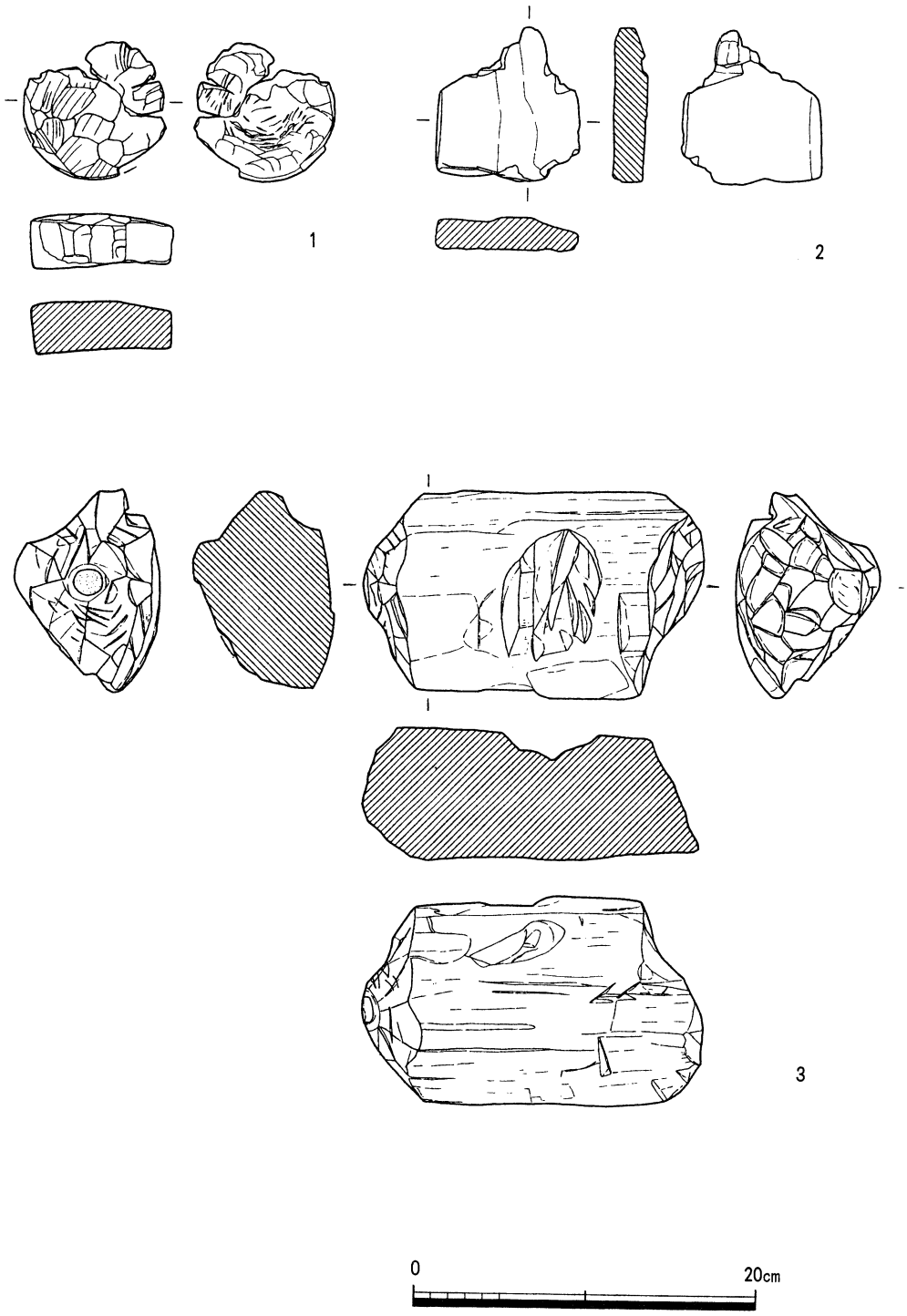
織機の部材状を呈するものを４点図化した。いずれの木製品も、他の織機と形状がやや異なることから明確に機能は限定できず、根拠に乏しく、（１）以外は可能性が低い。

（１）中筒

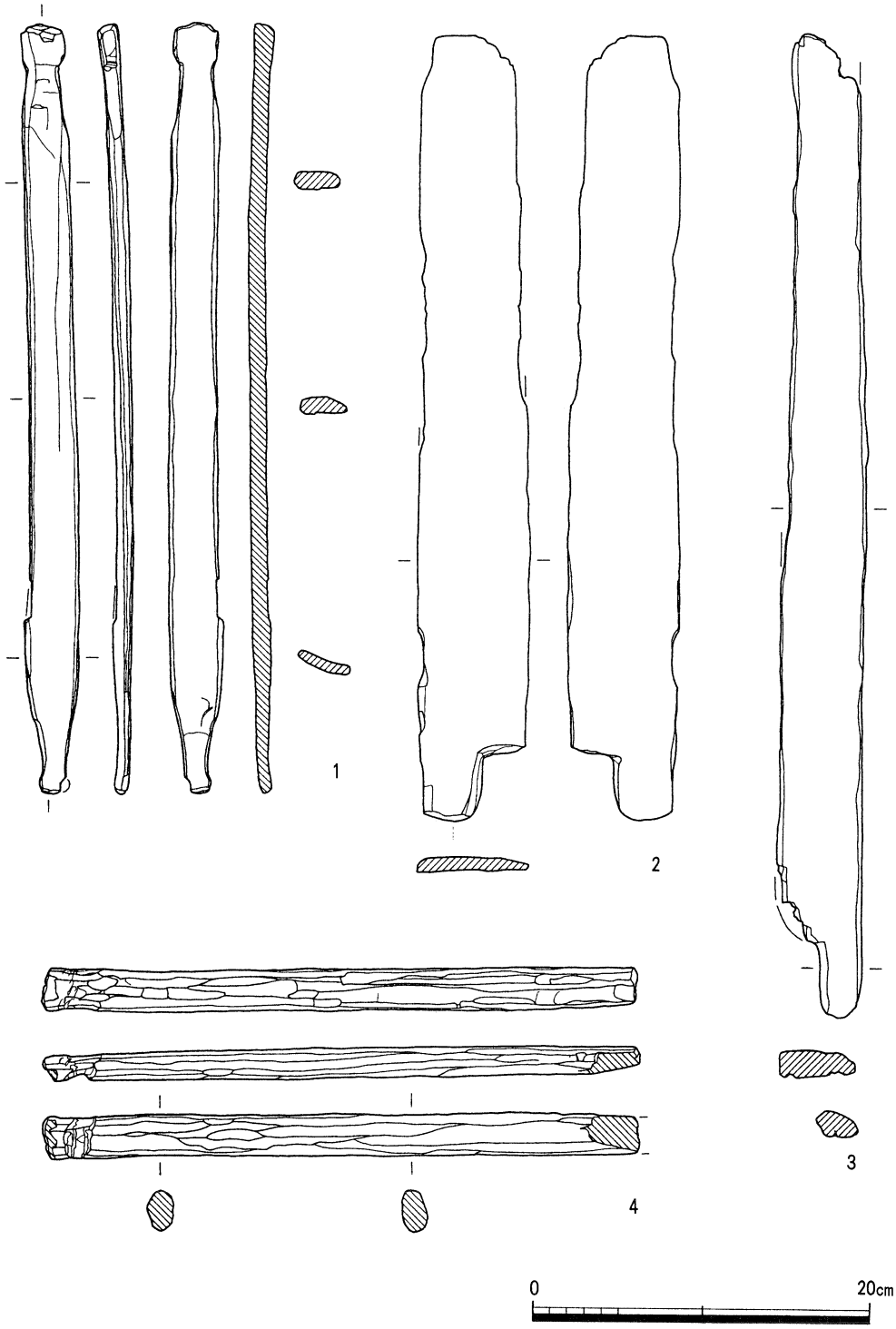
（１）は幅狭の板材を利用したもので、両端に紐かけ用と考えられる削り込みが確認できる。上端部の削り込みの方が、下端部よりやや大きく作られている。形状から中筒と考えられるが、



第53図　SD10・11出土遺物実測図（34）



第54図　SD10・11出土遺物実測図（35）



第55図　SD10・11出土遺物実測図（36）

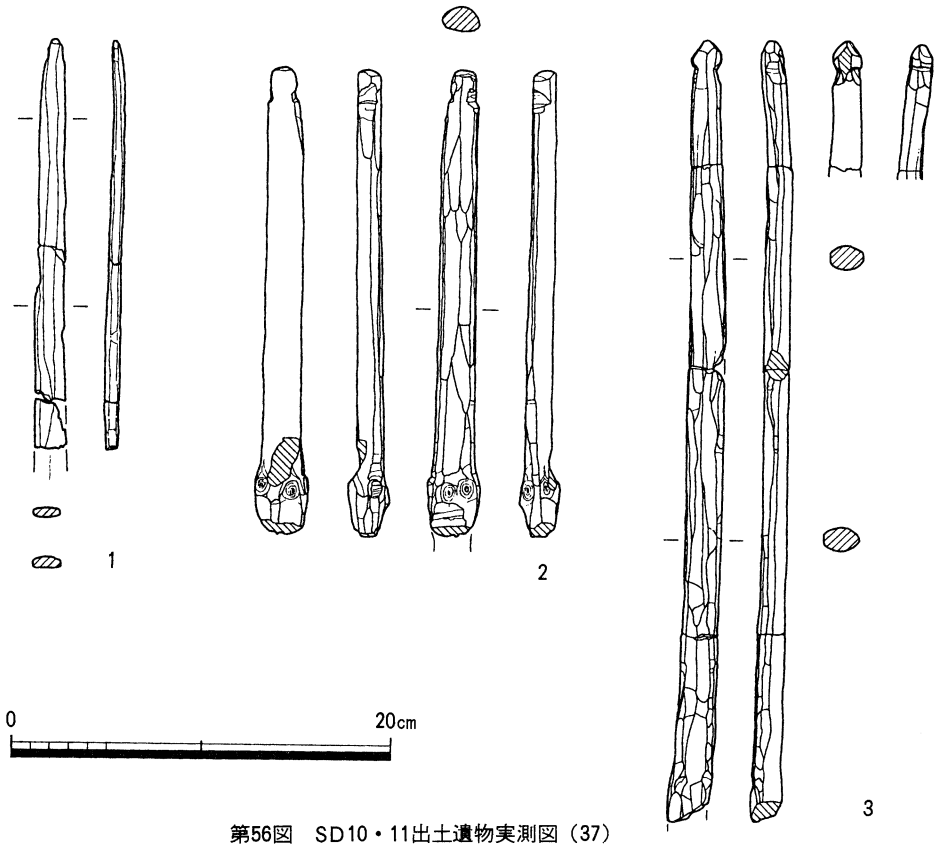
経（布）巻具の可能性も考えられる。

（２）緯打具状木製品

（２）（３）は当初、緯打具と考えていたものである。いずれも一端部を欠損している。残存している端部の状況から、側縁に片寄った把手が確認でき、欠損している方の端部にも同様なものがつくと考えられる。規模は、それぞれ現存46.3cm、58.0cmを測り大形である。当初はこれよりも大きなものであったものと思われる。表面の状況に比べ、（２）（３）とも裏面にほとんど加工が施されていないことに加え、他の緯打具と形状が異なることから、別の用途を考えたい。（４）は一側面端部に強い削り込みをいれ、その裏面にも軽い削り込みをいれる棒状品である。一方の端部は欠損していて不明であるが、残存している端部と同様の削り込みがあったと考えられる。断面は楕円形を呈する。当初は、端部近くの削り込みがあり、前面に丁寧な加工が認められた為、弓と考えていたが、弓弭部の状況が違うこと、それよりも経（布）巻具の方が形態的にも似ており、加工も丁寧であることから上記の用途を考えた。

D　狩猟具（武器）　（第56図）

1　弓



第56図　SD10・11出土遺物実測図（37）

弓と考えられるものを３点図示した。いずれも弓幹の途中で欠損し、完全なものはない。

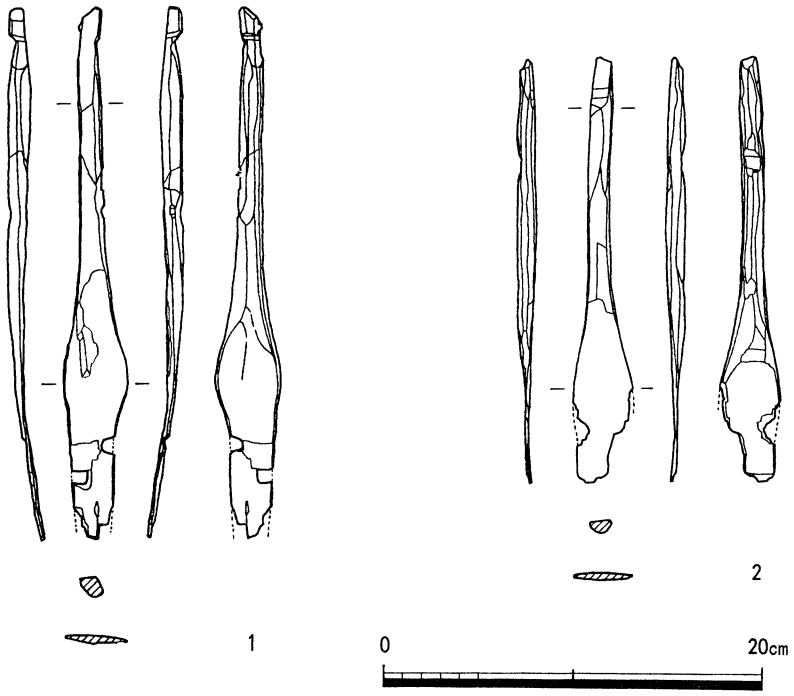
（１）は欠損部に向かって徐々に狭くなり、端部に弭と考えられる切込みを入れる。ただ、切込みが弱く、明瞭でない。断面形状は薄いカマボコ状を呈する。他のものに比べ厚さが薄い点が気になるが、一応弓と考えておく。加工痕は残存している部分に明瞭に確認できる。

（２）は欠損部近くに枝を払った跡が残る。先端に向かって徐々に狭くなり、端部に弭と考えられる切込みを入れる。切込みは明瞭である。断面形状はカマボコ状を呈する。加工は平らな部分に加工痕が明瞭に残り、逆に凸面は自然面を残したままである。

（３）は図示した中でもっとも残存状況が良好である。欠損部付近がもっとも幅広く、先端部にいくにしたがい徐々に狭くなる。端部に弭と考えられる切込みを入れる。弓弭と考えられる部分の加工は４面の上下から施されており、明確に切込みがわかる。弭以外の加工は、片面のみ明瞭に観察でき、もう１面は自然面を残す。断面形状は楕円形を呈する。残存状況からすれば、全長80cm以上の規模が復原できる。

E　食事具　（第57・58図）

1　杓子形木器（第57図）



第57図　SD10・11出土遺物実測図（38）

2点を図化した。木器集成図録には類例がほとんどなく、ＰＬ122の12207の瓜生堂例が最も近い。（１，２）とも、まっすぐな柄と扁平で幅広い身からなり、側面からみると、柄と身はほぼ一直線をなすか、身の部分はやや反り上がる。柄から身の境は不明瞭で、徐々に身は広がる加工については、（１，２）とも柄は、４面から施されており、加工痕が顕著である。（１）の柄の端部は上部以外の３面から切込みが施されており、紐固定用の用途が考えられる。（１，２）とも柄の断面は上面が平らなカマボコ状を呈する。一方、身の部分は、柄の境あたりから徐々に広がり幅広くなった後、先端にいくにしたがい幅を減少し、長く伸びる。断面は上下からの加工により、扁平に仕上げられている。全体の加工は他の類例に比べても調整は丁寧である。これらの２点の木器は、根拠には乏しいが、形態が似ており、２点が重なった状態で出土していることから２点が一組になって何かを挟んで固定し、使用されていたことが想定できる。

２　片口　（第58図）

（３）は約１／２を欠損するが舟形を呈する片口である。当初、舟形木製品として分類していたが、他の舟形木製品と考えられるものと比べ、長さの割に幅広く、形状も違う（他の舟形木製品としているものは前後が対照的で、先端が尖っているものが多い）ことより片口であると考えた。片口と考えたが、先端に樋をもたず、先端に向かってすぼまるだけである。器壁は全体に平均しているが、後部のみ厚い。先端から水平にみると後部の中央がゆるやかに突出している。（４）は一木作りの把手付片口である。木取りから１／２の半割材を使用しているものと考えられる。身の約１／２近くを欠損するが、ほぼ全容が復原できる。楕円形の身に樋を造り出し片口を形成する。一方柄は身の下部から斜方向に造り出し、端部は紐かけ用の切込みを３方向から施し、頭部をつくる。柄は身の下部のみと接点をもつもので、他の片口のように身と柄が直線的に作成されていない。また身の下部には削り出しの高台もつくられていないことからも他の片口とは形状を異にすることから、どちらかと言えば容器の項に含めた方がよいかもしれない。

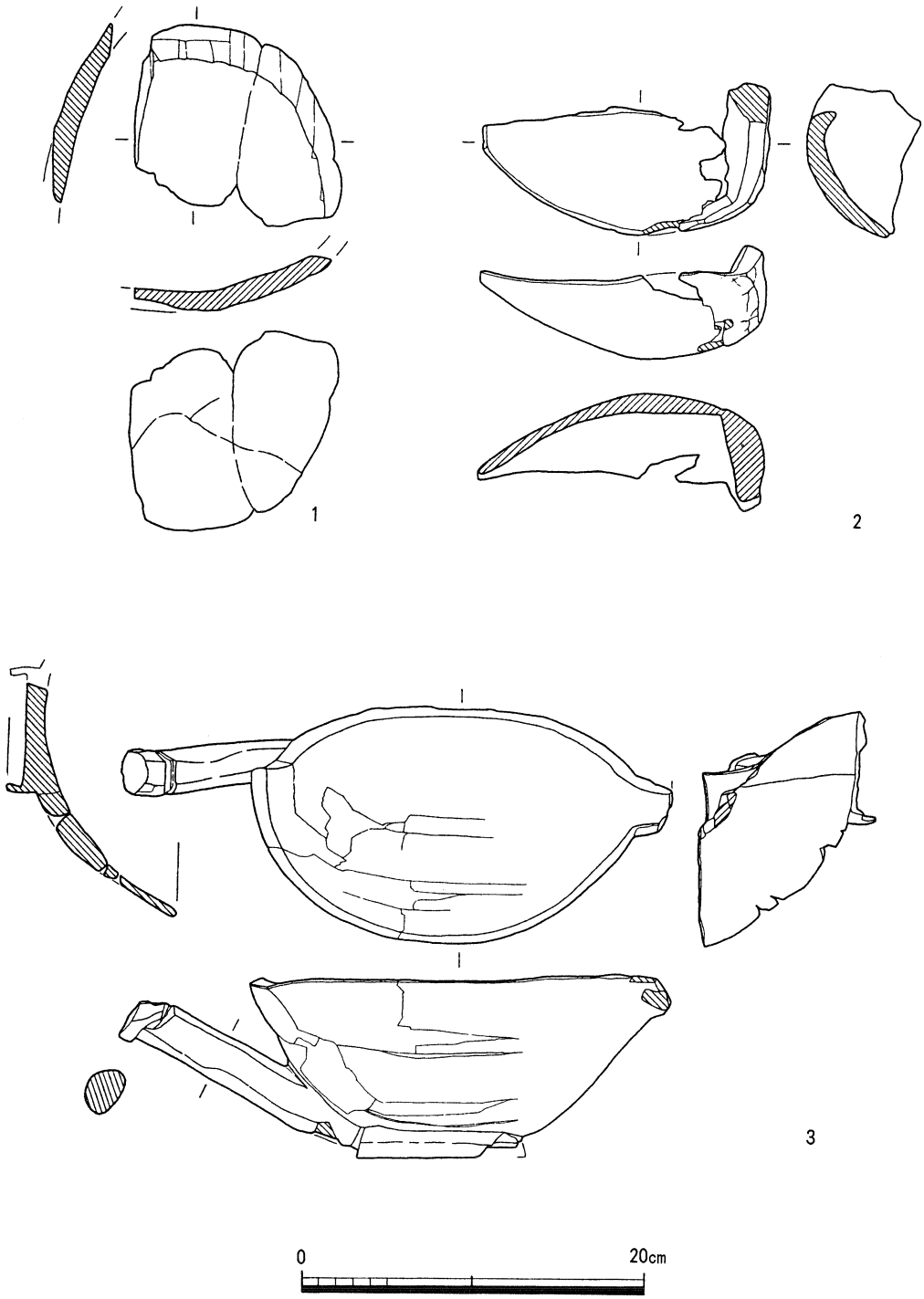
Ｆ　容器　（第58図）

（１）は皿状を呈する高杯の破片である。破片から推定すると、円形もしくは楕円形を呈するものと考えられる。器壁は厚く、凹面全体に火を受けている。

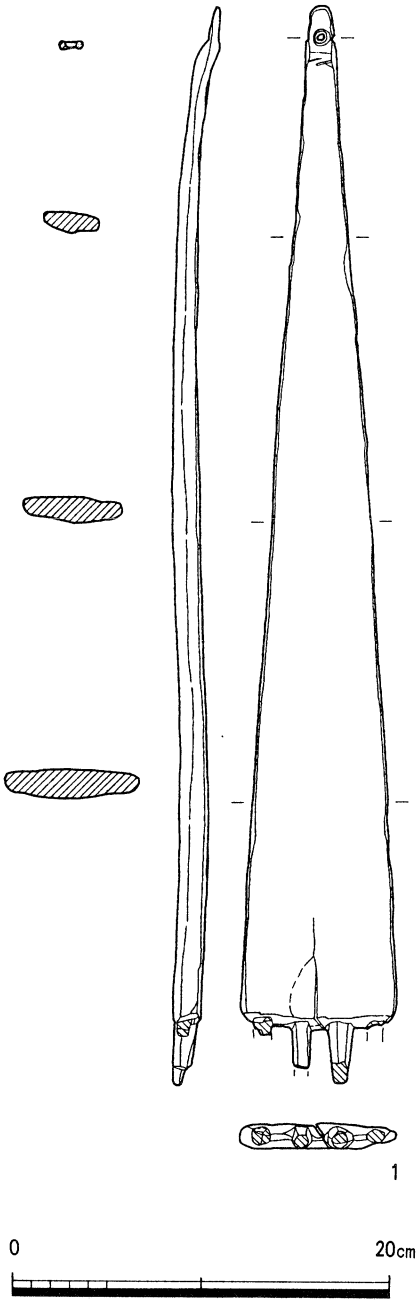
Ｇ　楽器

（１）　琴　（第59図）

琴尾の一部を欠損するが、ほぼ完形品である。平面形状は二等辺三角形状を呈する。上原分類によれば、４突起ＡＩａに分類されている。やや頭部が反り、断面は逆カマボコ状を呈する。



第58図　SD10・11出土遺物実測図（39）



第59図　SD10・11出土遺物実測図（40）

頭部は剣先状に尖り、集弦孔と考えられる孔を穿つ。その孔の側縁には弦固定用の切り込みが施されている。頭部を側面からみると、集弦孔付近のみ上下からの加工により明確な境を形成する。しかも、加工痕は顕著である。一方、琴尾は現存3本の突起が残存しており、現在は欠損しているが、突起の痕跡が残っていること、位置関係から4本突起に復原できる。残存している突起は上部を削り込み段をつくる。端部にいくにしたがい、やや斜めになる。突起ごとの加工は面取りが残り、加工痕が顕著である。上原分類によりB類の宝珠形の切り込みが弦固定用と考えるならば、当遺跡出土の琴をB類を考えた方がよいかも知れない。

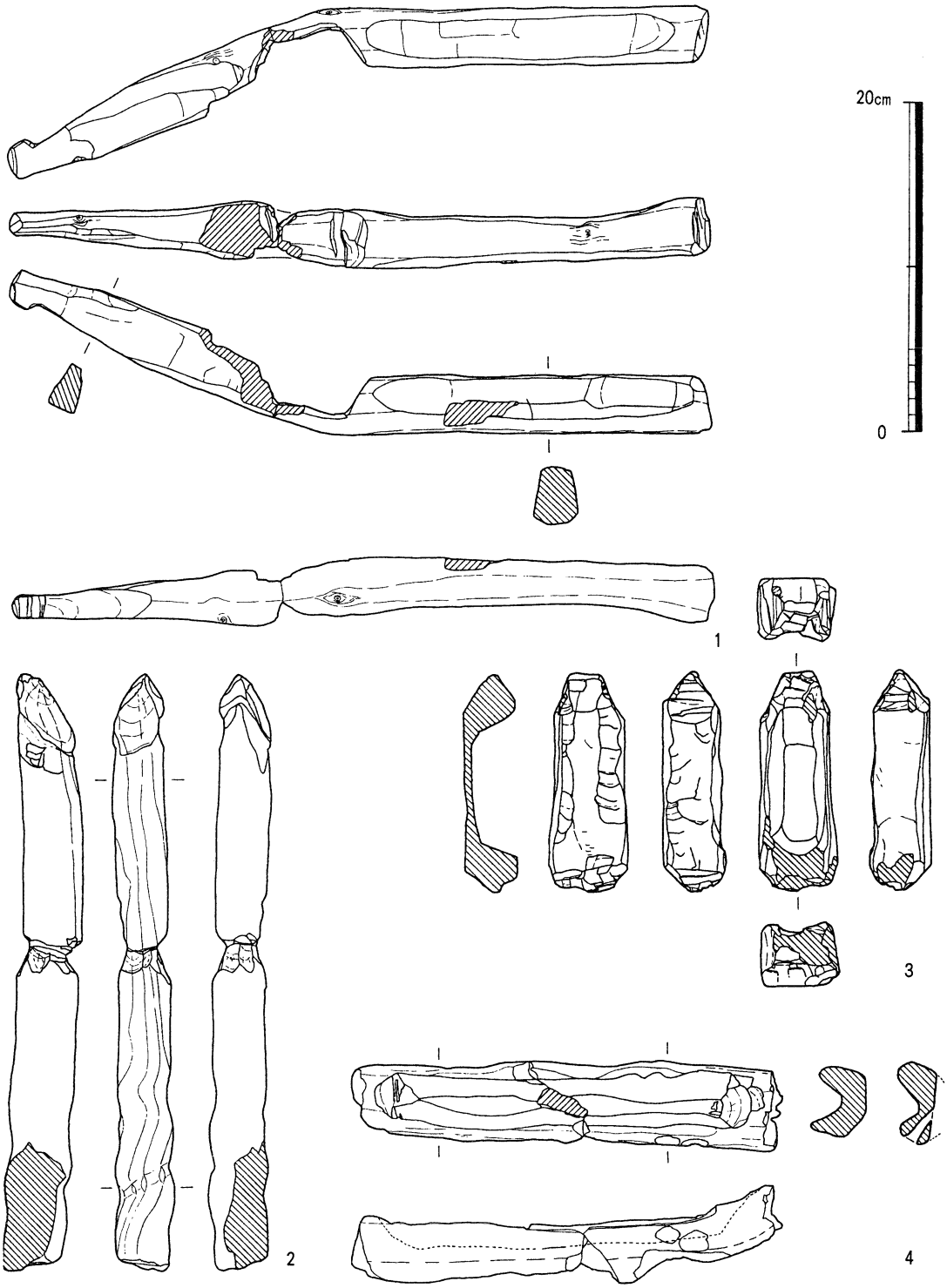
H　祭祀具　（第60図）

1　鳥形

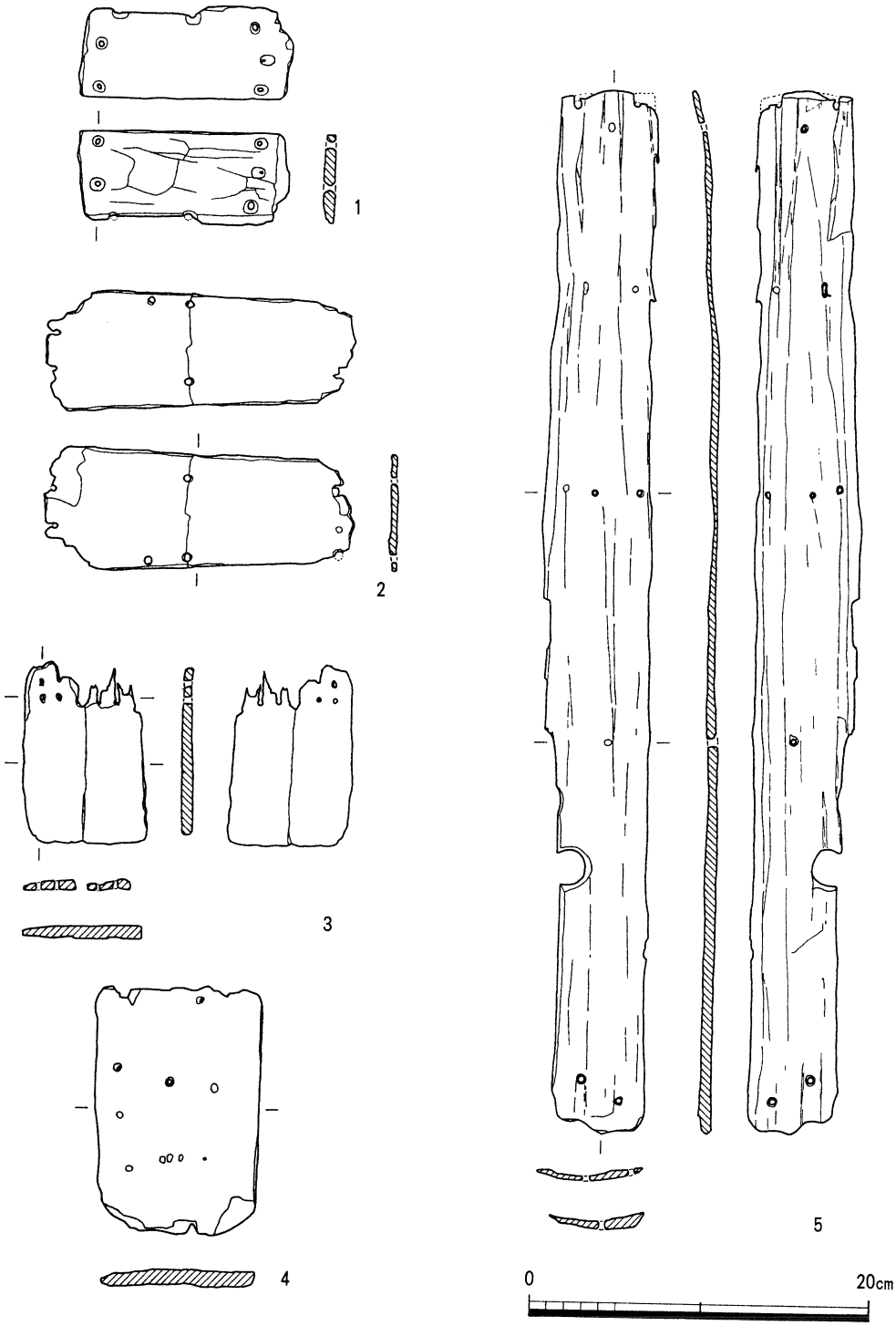
平形鳥形（B類）の中でも側面観を表したBⅠ類と考えられるものである。屈曲した材を利用し、頭部は4面からの削り込みを施し、先端にいくにしたがい狭くなるが、頭部を表す加工は下面からの切り込みによるもので形成する。胴部が屈曲する部分で、上部から大きな切り込みを入れる。その他の胴部の調整は両側面からの加工痕が残るが、その他は自然面を残す。形態的にはPL116-16604の大阪府山賀遺跡例が最も似る。

2　陽物形

自然面を多く残すもので、加工が認められるのは、先端部と中央部のみである。先端部は平面的にも側面的にもリアルな亀頭形を成形する。『木器集成図録』の池上遺跡例にも勝るとも劣らない出来上がりと考えられる。中央部の加工は斜方向からの切り込みが全周して認められ、切り落とす



第60図　SD10・11出土遺物実測図（41）



第61図　SD10・11出土遺物実測図（42）

第62図　ＳＤ１０・１１出土遺物実測図（43）

為の加工ではなく陽物形全体を目立たせる（他の部分と区切る）為の加工であると考えられる。

3　舟形

（3，4）とも舟形と考えられるものであるが、残存状況が良好で、加工痕の顕著な（3）に比べ、全様は保っているが腐朽の著しい（4）に分かれる。（3，4）はいずれも立体舟形の中でも内部を刳抜くＡ１類である。（3）は船首と船尾の区別がつくもので、船首は４方向からの加工で形をつくるが、先端は尖らない。一方、船尾は船首ほどではないが、鈍い角度で４方向から加工が施されている。両側面及び舟底についても加工が施され、加工痕が顕著である。（4）はかろうじて原形を保ってはいるが、両端部を欠損しているため船首、船尾の区別はつきにくいが、右側の端部が上がっていることより、右側の端部が船首である可能性が高い。加工は前述のように確認しにくいが、内側の刳抜部分に若干認められる。

Ｉ　雑具　（第61図）

1　箱部材

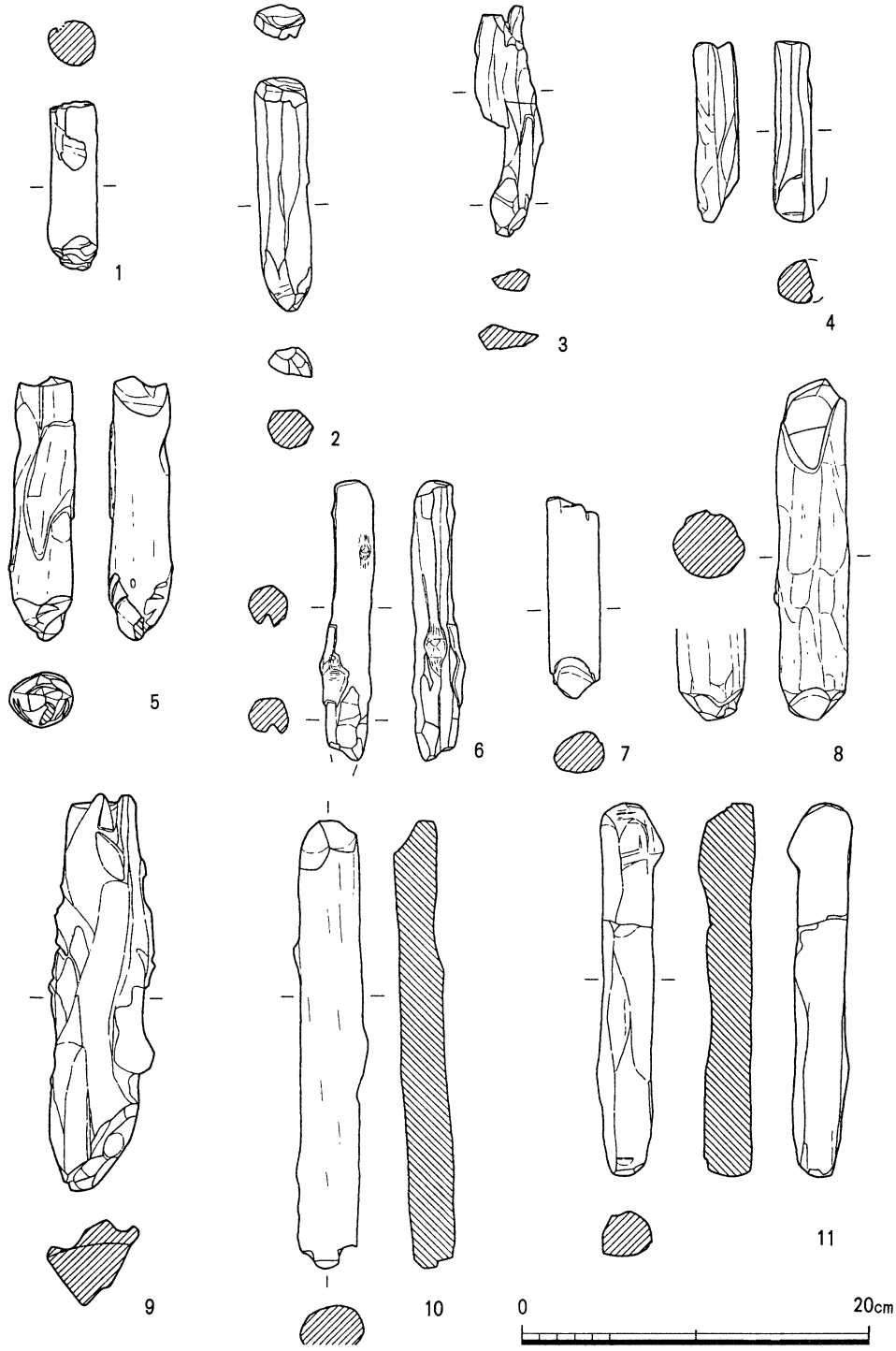
（1）～（5）は箱部材と考えられるもので、（1）～（4）が小型、（5）は大型の部材であると考えられる。（1）～（4）は20cm以内、（5）は60cmを越える長さをもつ。（1）、（2）は側縁部近くに規則的な孔の配置を行うもので、φ３～４㎜程度の孔をもつ。（3）は破損部近くに、二列に分かれた現存６孔（推定12孔）が確認でき、規則的な配置が認められる。（4）は（1）、（2）と同様、側縁部近くに孔の配置がみられるが、草の根による破損もみられることから、孔を特定できない。（5）は大型の部材であるが、この部材の特徴は両端付近に配置された３孔である。側縁部と中央部にも孔が配置されているが、どのような配置になるか想定できない。

Ｊ　編物・樹皮　（第62・78図）

1　編物　（第62図）

編物は合計３点図示した。

（1）は３点中最も残りがよいもので、出土した当初、把手が片方に残存していた。規模は、直径27.0cm、短径21.5cmの楕円形を呈するものと考えられる。立ち上がりの部分と考えられるところからすれば、深さは７cm程度の深さをもつものと考えられる。編み方は繻子編みを基本として編んでいるようである。（2）は（1）に比べ残存状況は良くない。現在の規模は直径18cm、短径15cmであり全体の１／３程度が残っているものと考えられる。編み方は、綾編みを基本に編んでいるようである。（3）は最も残存状況は悪く、断片しか残っておらず、全体の状況を推定することができない。規模は長辺11.5cm、短辺8.0cmである。編み方は格子状に編



第63図　SD10・11出土遺物実測図（44）

んでいるが、これは、編み方の特徴であるのか（1，2）にくらべ、繊維と繊維の間隔が広く、隙間が多い。

2　樹皮　（第78図）

幅3.6cmの樹皮を渦巻き状に巻いているものである。結束用の樹皮と考えられる。

K　杭　（第63〜64図）

先端を加工しているものの内、先端部の加工が鋭利なもの、および大型のものを杭とした。（1）から（7）までは小型の杭と考えられるもので、全長15cm、直径3cm前後のものである。加工痕の鋭利な（3，4，6，7）と鈍い（1，2，5）に分かれる。これは工具の種類の違いと考えられ、前者は鉄斧、後者は石斧によるものと考えられる。先端部以外の加工は（2）の全面に加工痕がみられる以外は、自然面を残すものが多く、加工は認められない。（8）〜（14）は全長20cmを越えるものが大半で、直径3cm前後である。木取りは丸木およびミカン割材を使用。加工は、（8）以外下端部にみられ、その加工も鉄斧の使用が考えられる大きなものが多く、3方向もしくは4方向からの加工が行われるのみである。いずれのものも使用によるものか先端を欠損するものか、丸くなるものが大半である。（15）は上端部が枝分かれしたもので、直径2cm以下の長い細棒を使用したもので、先端に鉄斧の使用と考えられる鋭利な加工痕が明瞭に残る。（16）〜（18）は直径4cmを越えるもので、加工がみられるのは両端部のみである。その他の部分は自然面を残す。下端部は（16）が石斧、（17,18）が鉄斧による加工と考えられ、加工痕に違いがみられる。一方、上端部は（17）は一方向から、（18）は全域に加工がみられる。（17）の先端部には使用によるものと考えられる欠損がみられる。

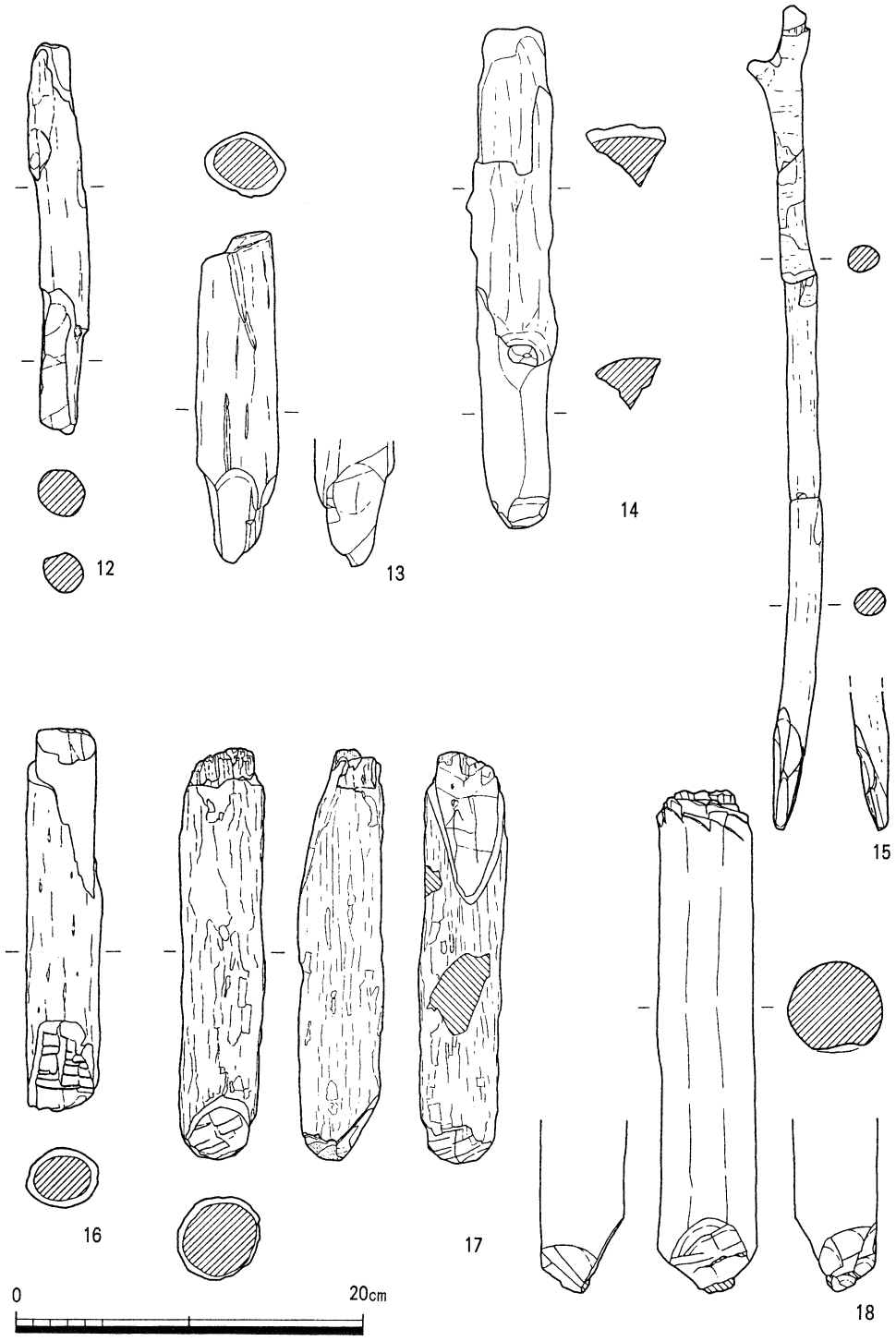
L　その他の木製品

これから以下の木製品については、明確な器種の限定が行えないものが大半で、現在、残っている加工痕等の、木製品の特徴により分類を行った。

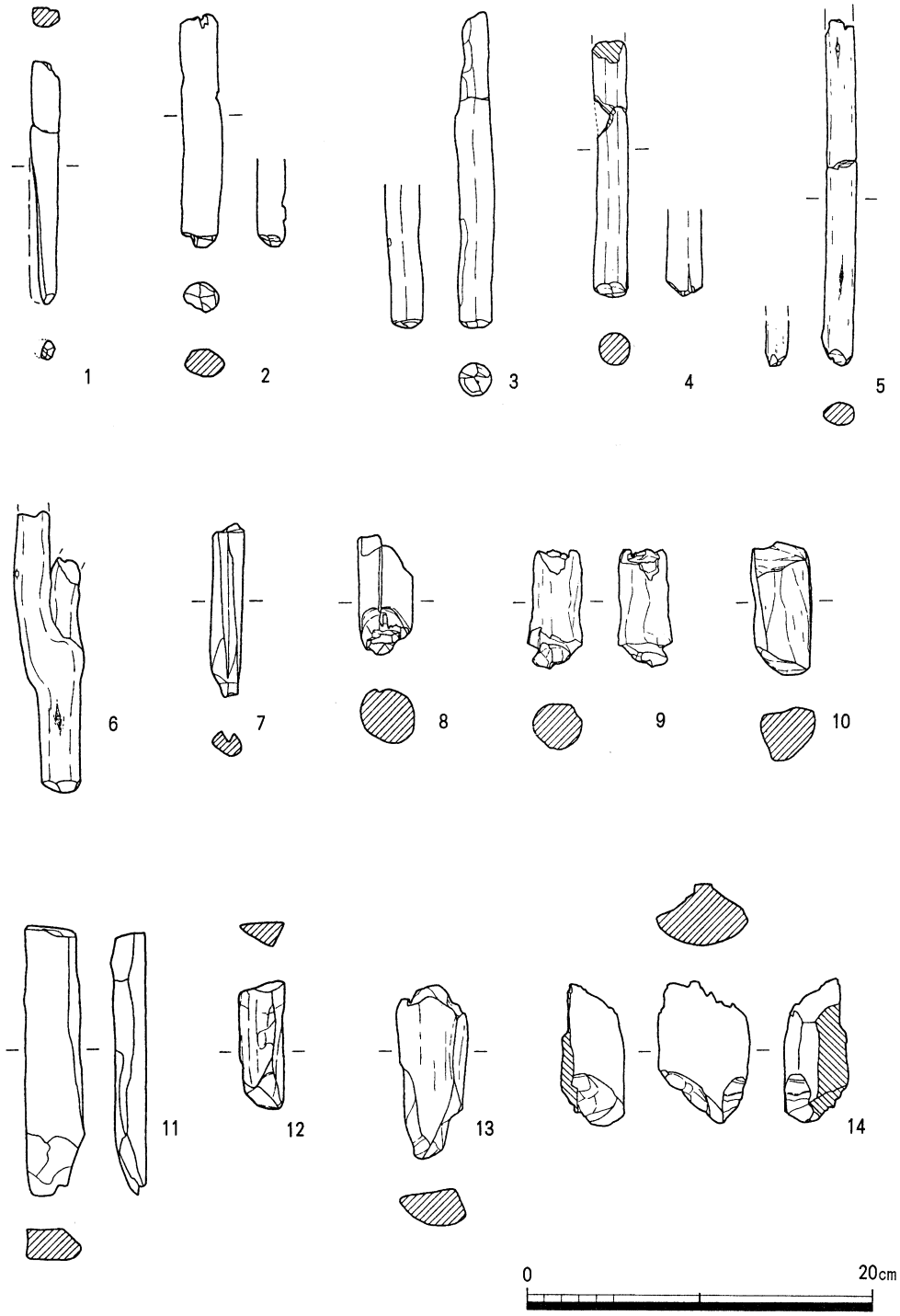
1　先端加工棒　（第65図）

直径20cm以下のものが大半を占める（1〜7）。上端部を欠損して全長は不明であるが、最も残りの良いもので20.0cmを測ることから、当初はもう少しあったものと考えられる。いずれも先端に加工痕が確認できるが、先端部は鋭利ではなく鈍い。加工痕は2もしくは4方向からの加工が確認できる。（8，9）は先端部に加工がみられる丸木材である。（10〜14）は先端に加工が認められるもので、ミカン割材を使用する。加工痕はみられるが、加工材の用途は不明である。

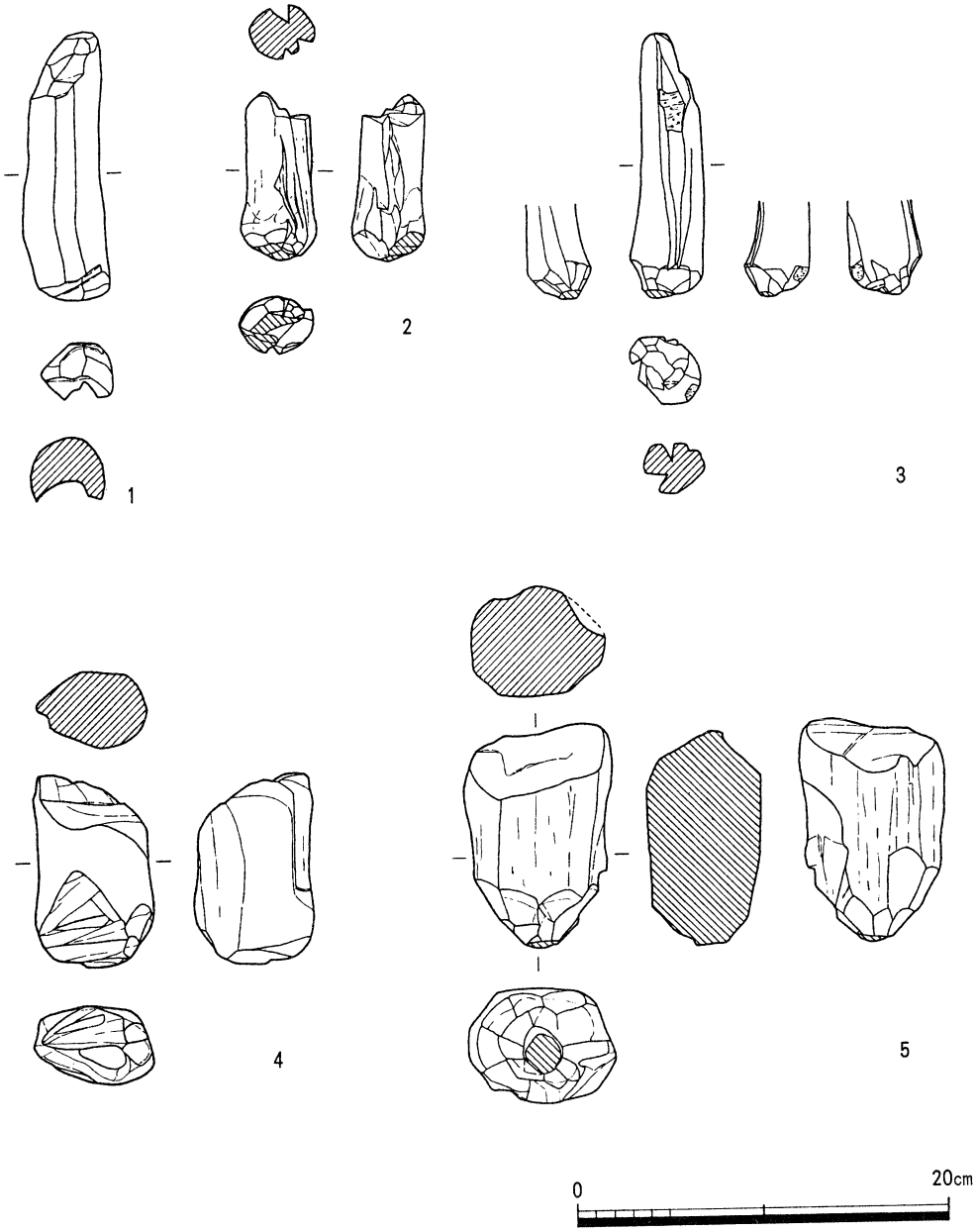
2　先端加工木　（第66・67図）



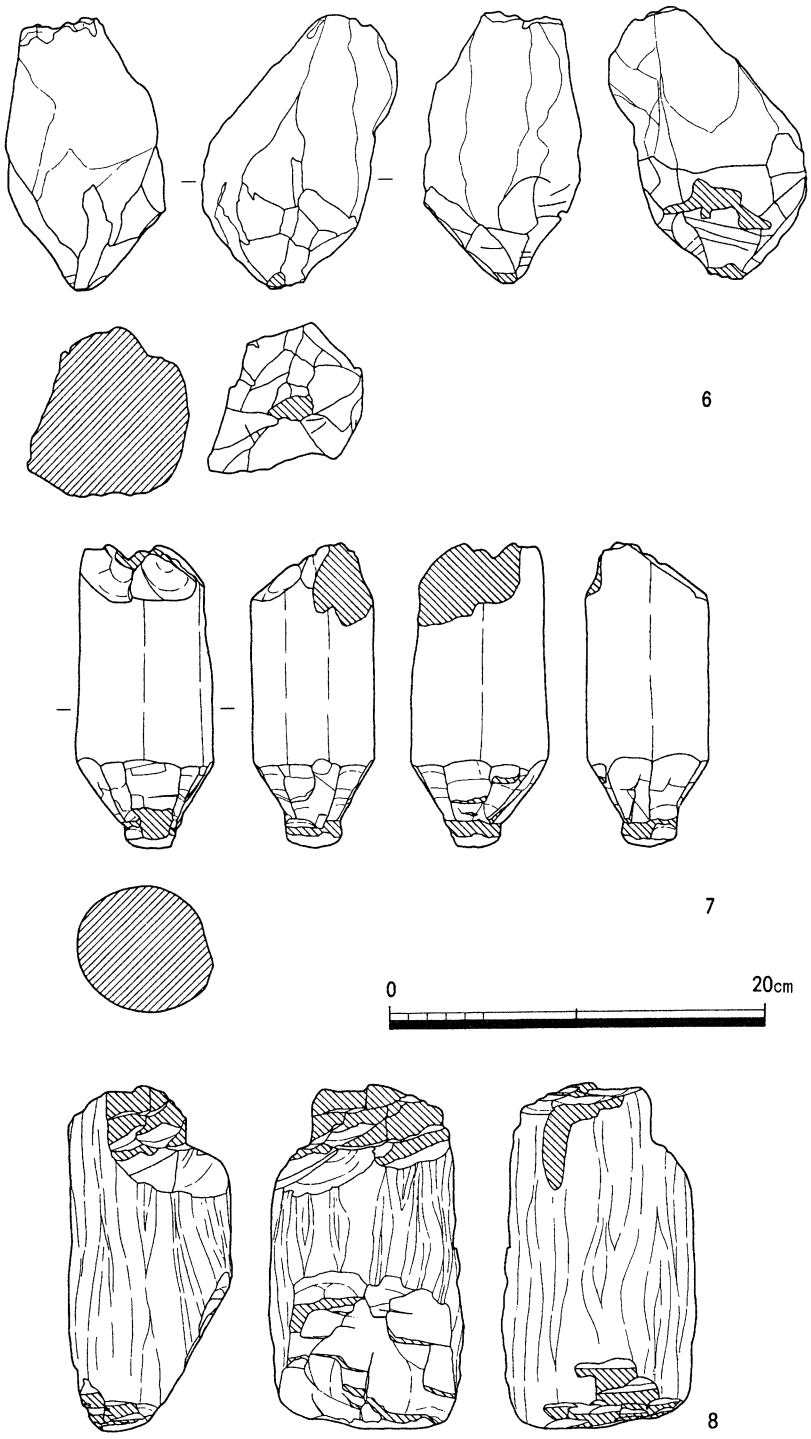
第64図　SD10・11出土遺物実測図（45）



第65図　SD10・11出土遺物実測図（46）



第66図　SD10・11出土遺物実測図（47）



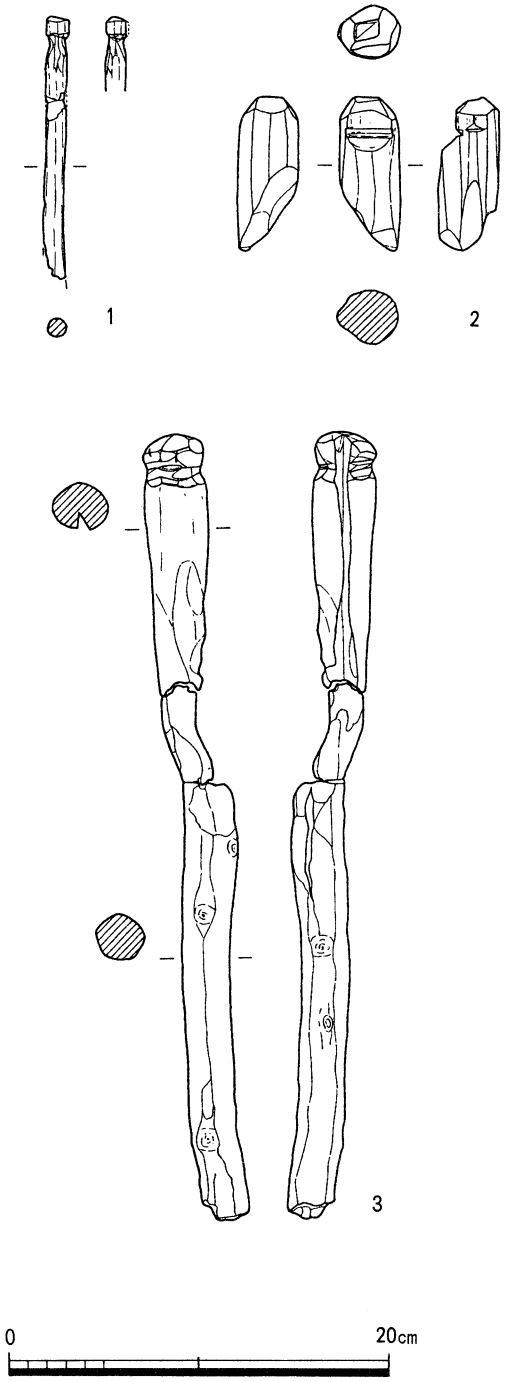
第67図　SD10・11出土遺物実測図（48）

（１～４）は先述した先端加工棒の直径をやや大きくしたもので、芯持ちの丸木材を利用し、直径４㎝前後を測る。全長は15㎝程度のもので、先端の加工は多方向から行われているが、先端加工棒と同様先端は鈍い。

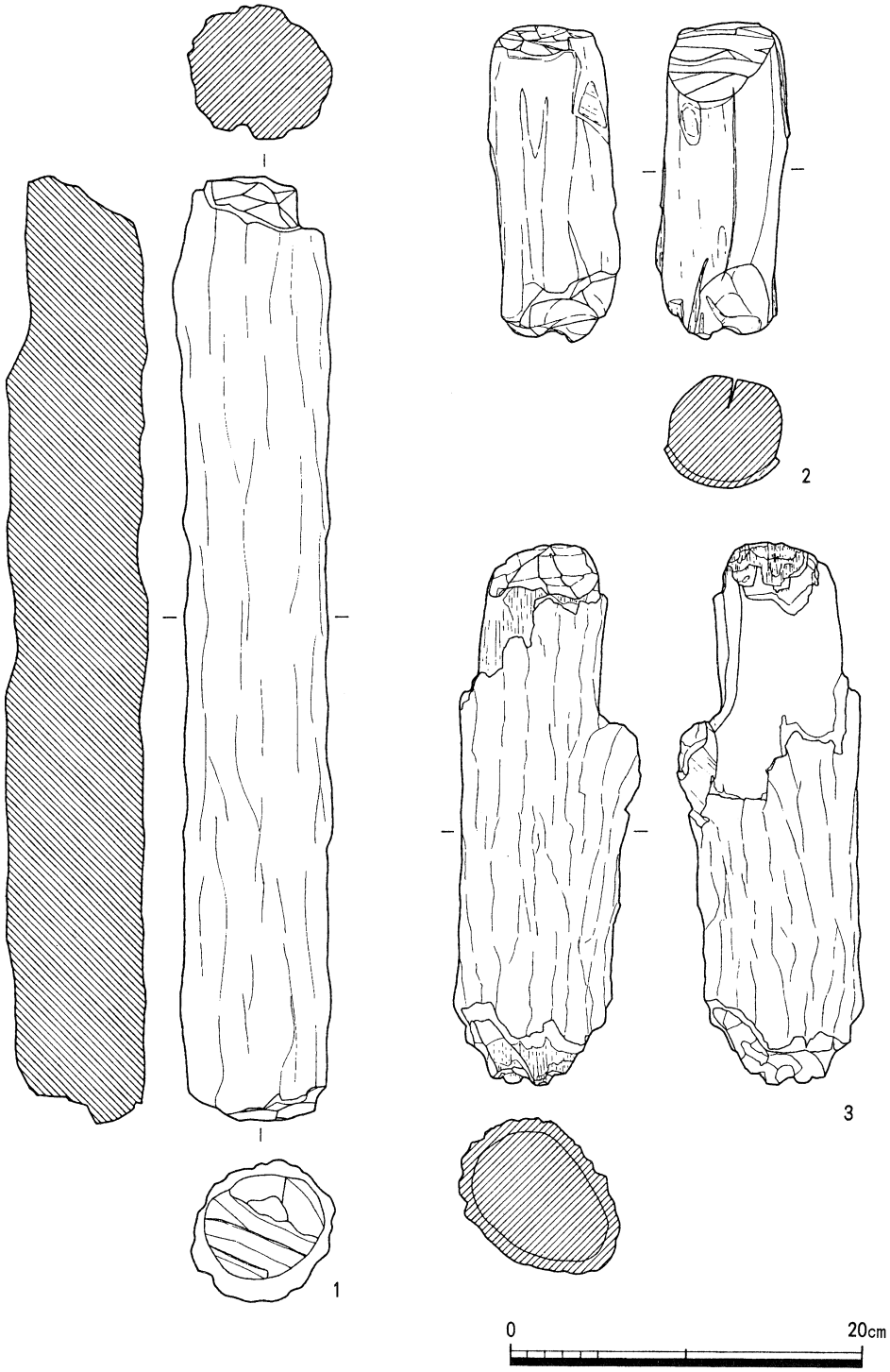
（５～８）は（１～４）をひとまわり大きくした芯持ちの丸木材を利用したものである。（５～７）の先端部の加工は多方向から施されており、加工も丁寧である。特に、（６）は先端部以外にも加工痕が明瞭である。（８）は先端部を大きく２方向から加工したもので、側面は樹皮がそのまま残る。（５～８）のいずれも先端部の加工に比べ、上端部の加工は粗い。加えて先端部の末端は未加工であることも共通する。

３　有頭棒　（第68図）

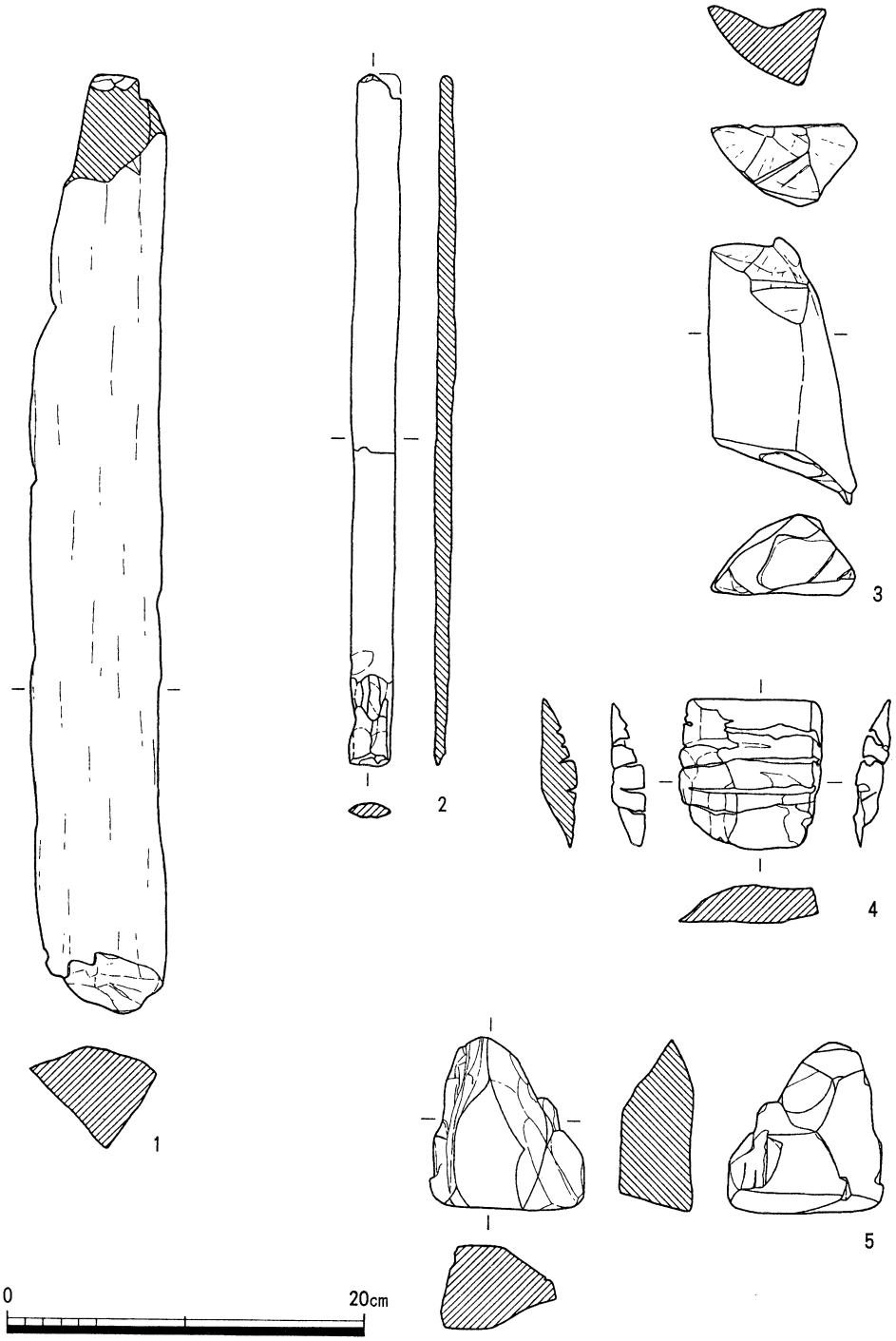
（１）は直径1.0㎝の丸棒の側面を削り込み頭部をつくる。頭部周辺の加工は細かく施されているが、他には明瞭な加工はみられない。先端部を欠損する為、用途は不明である。（２）は側面および端部に加工が施されているもので、加工痕は明瞭である。一側面からのみ削り込みを施し、頭部をつくる。（３）は端部側面に削り込みを施し、頭部をつくる。頭部周辺の加工は明瞭であるが、他の部分については加工はみられない。現存長42.0㎝を測るが、端部を欠損しているため、元の長さを推定できない。規模からして欠損している先端部を地中に打ち込み、固定する何かの紐かけ棒かもしれない。



第68図　SD10・11出土遺物実測図（49）



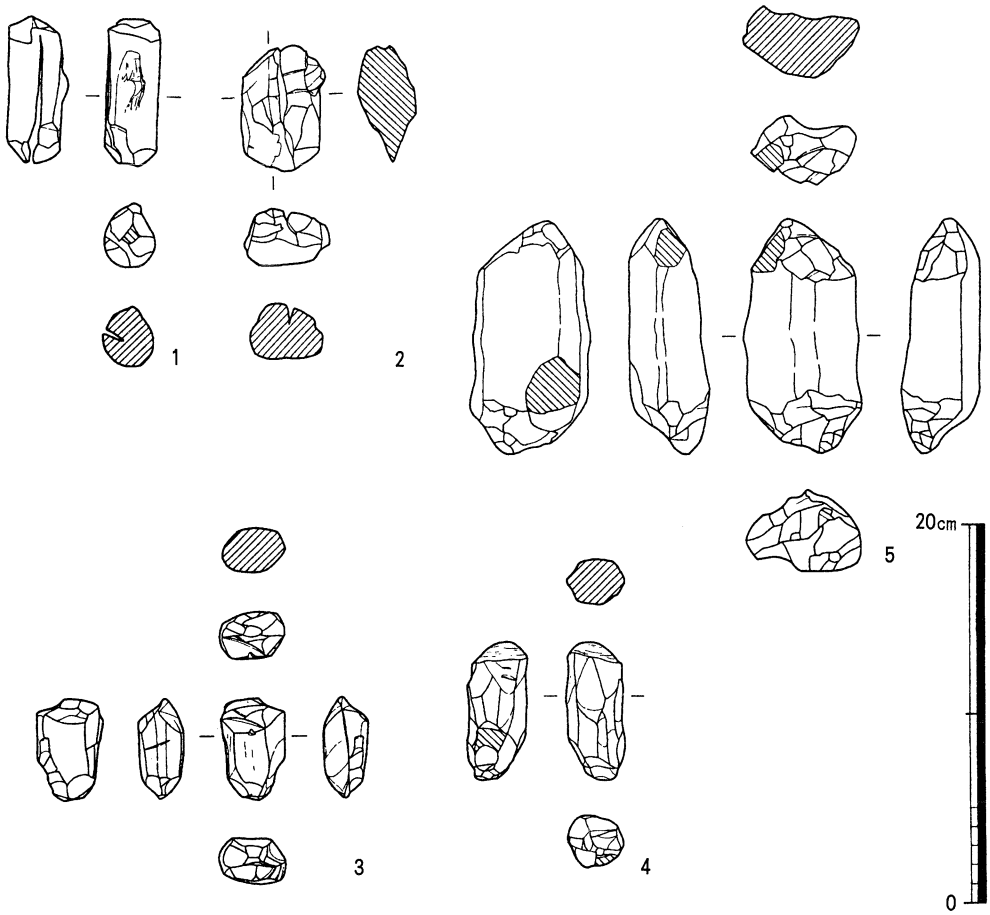
第69図　SD10・11出土遺物実測図（50）



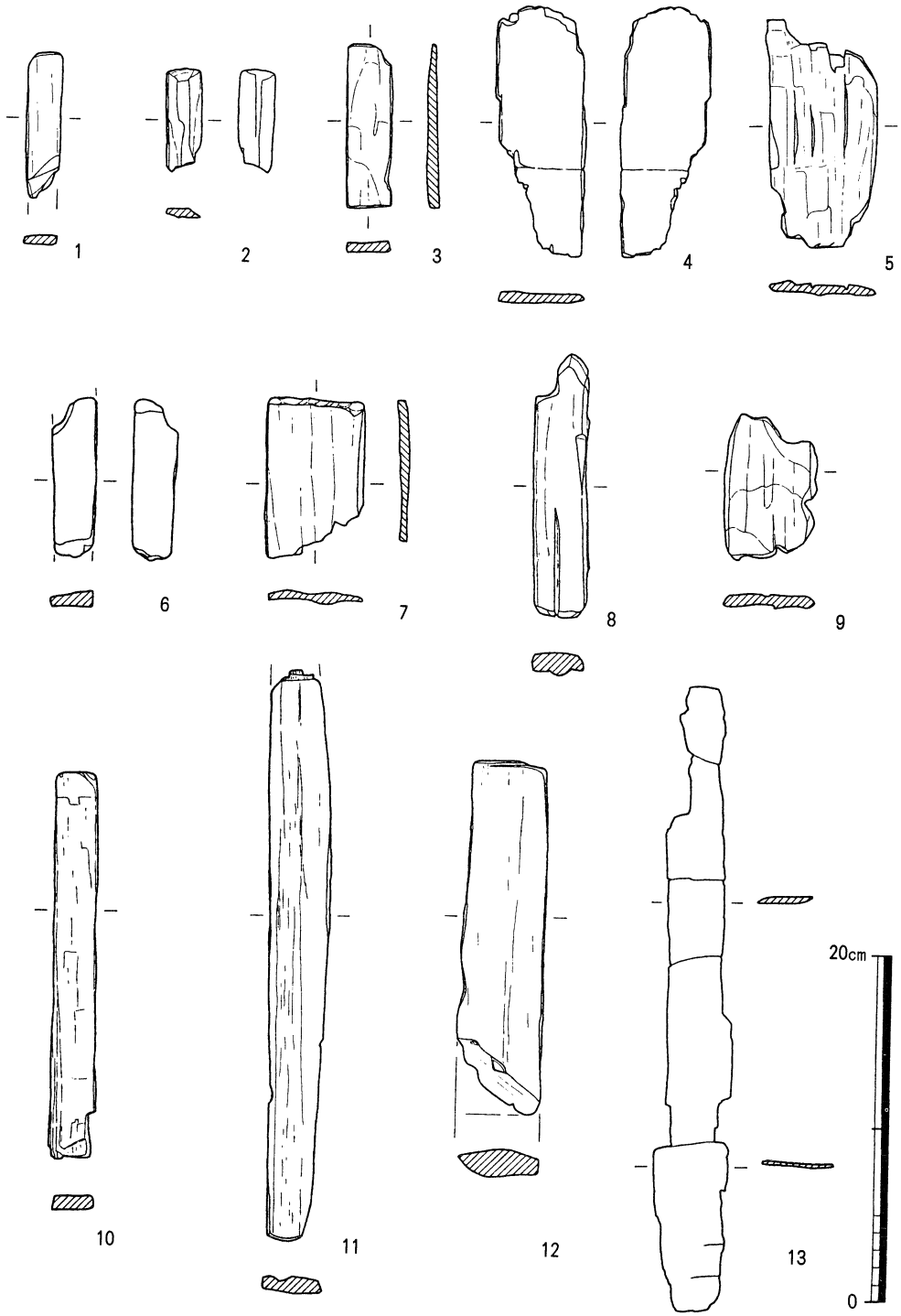
第70図　SD10・11出土遺物実測図（51）

4　両端加工木　（第69図～71図）

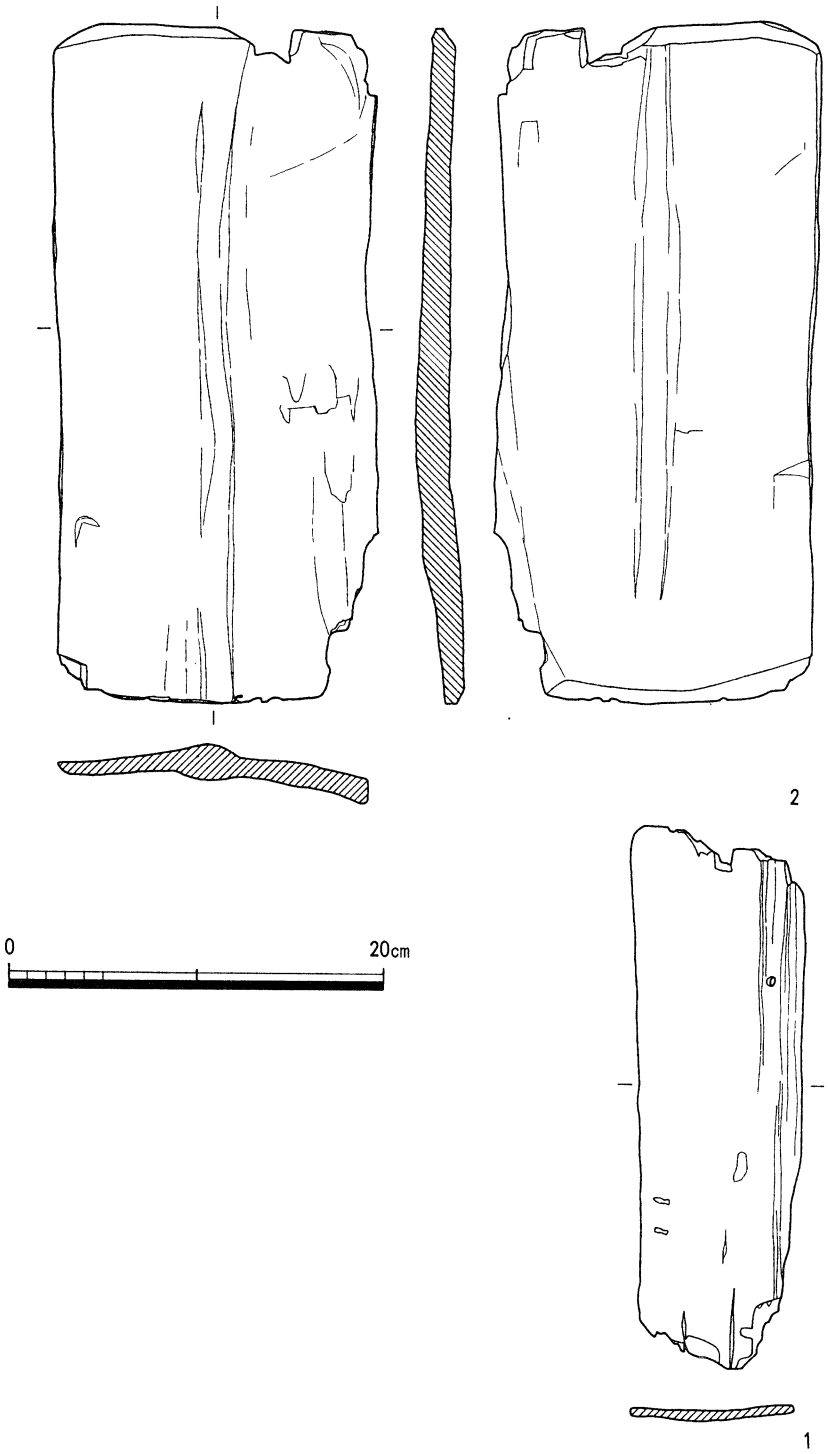
両端加工木としたものは大きく２つに分類できる。１－両端に加工はみられるが、木取りのための加工であって、整形するための加工があまりみられないもの、第69図（１～３）のように皮付丸木材の両端に加工がみられるもの、第70図（１～５）のようにミカン割りを行っているもの、厚材の両端を加工しているもの、等の一群と、２－全長5.4 ～12.5cmを測り、両端の加工は多方面から行われており、残る面についても加工が施されるもの（第71図１～５）、いずれも加工痕が明瞭である。ただ、この加工木について用途は特定できない。



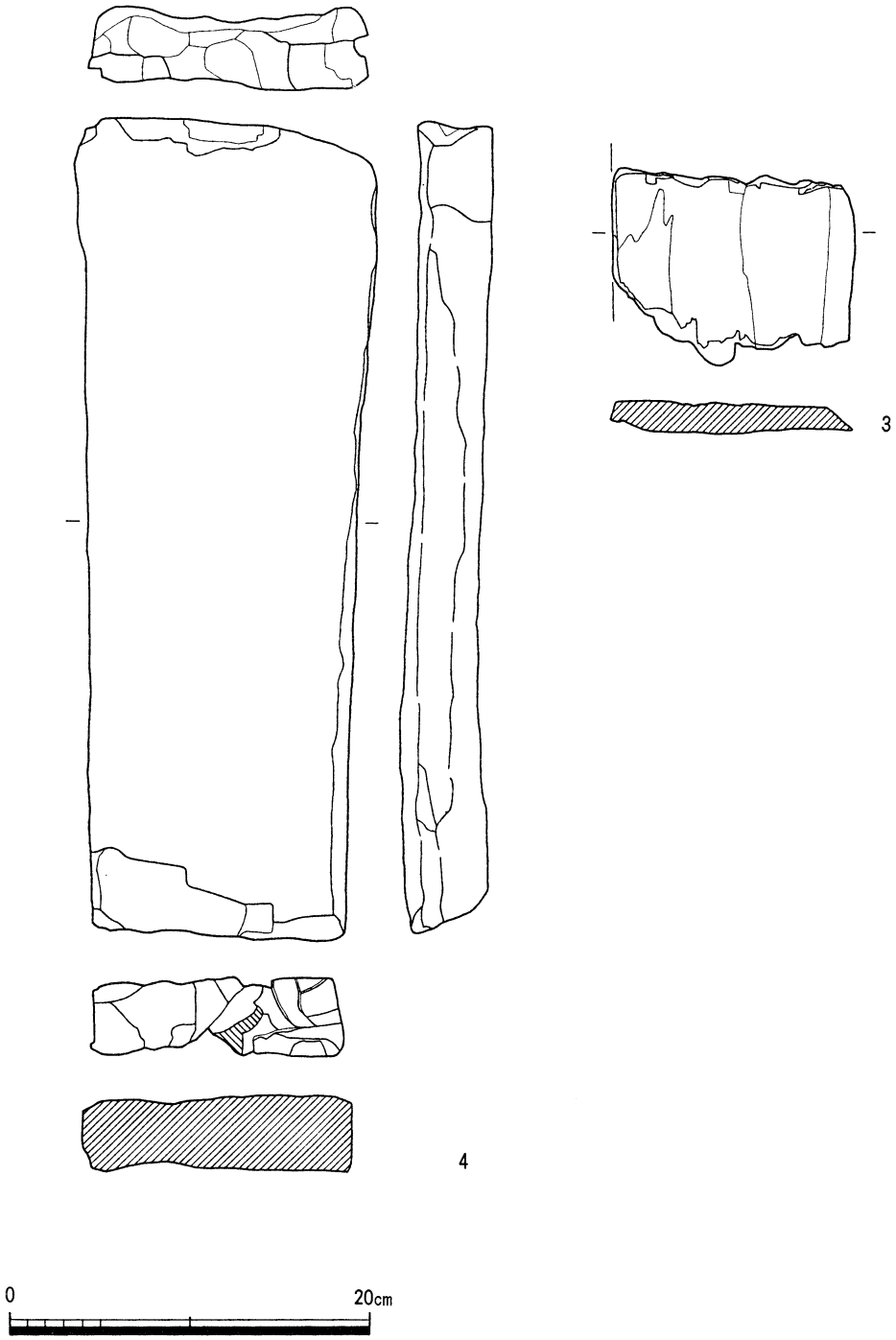
第71図　SD10・11出土遺物実測図（52）



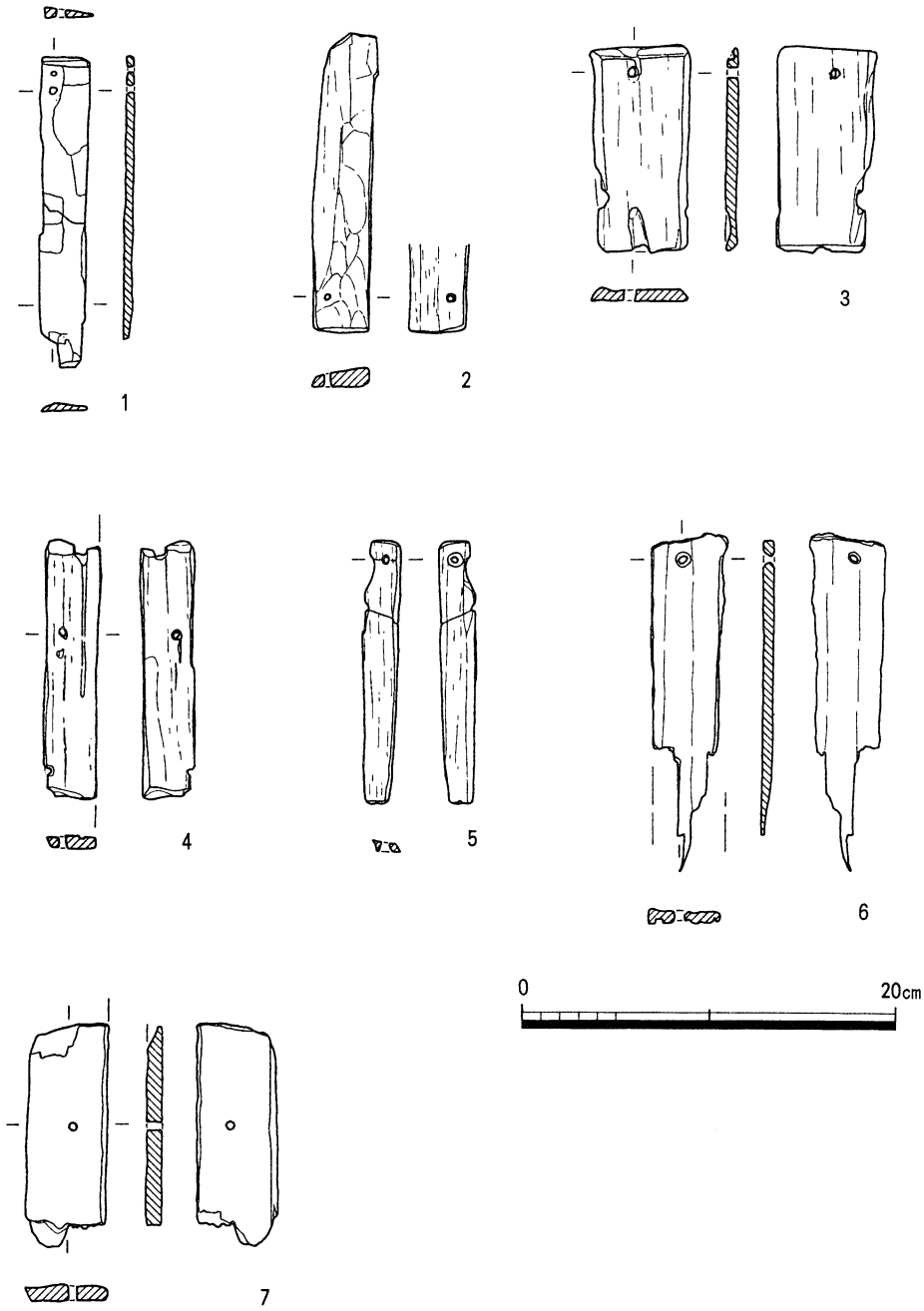
第72図　SD10・11出土遺物実測図（53）



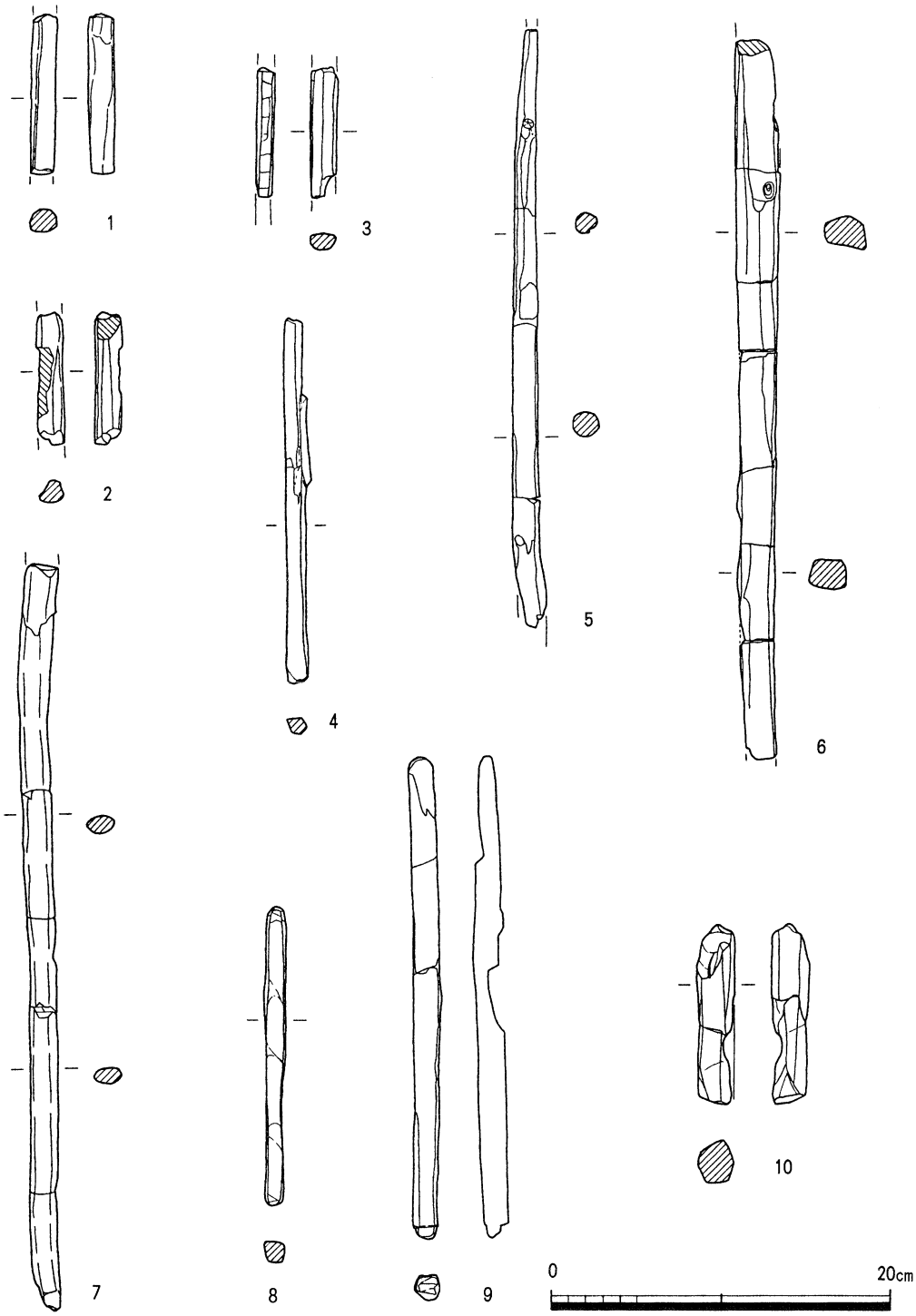
第73図　SD10・11出土遺物実測図（54）



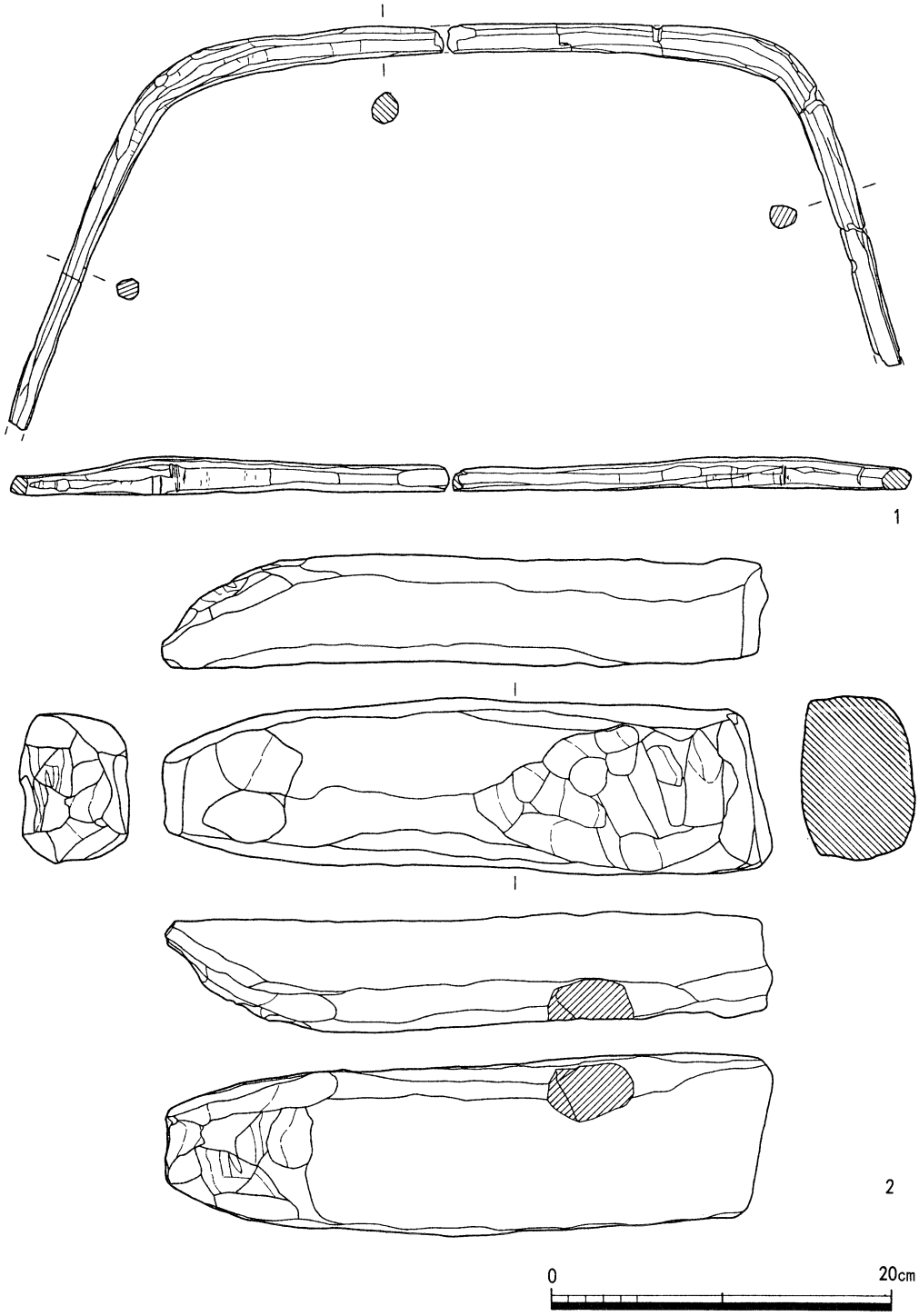
第74図　SD10・11出土遺物実測図（55）



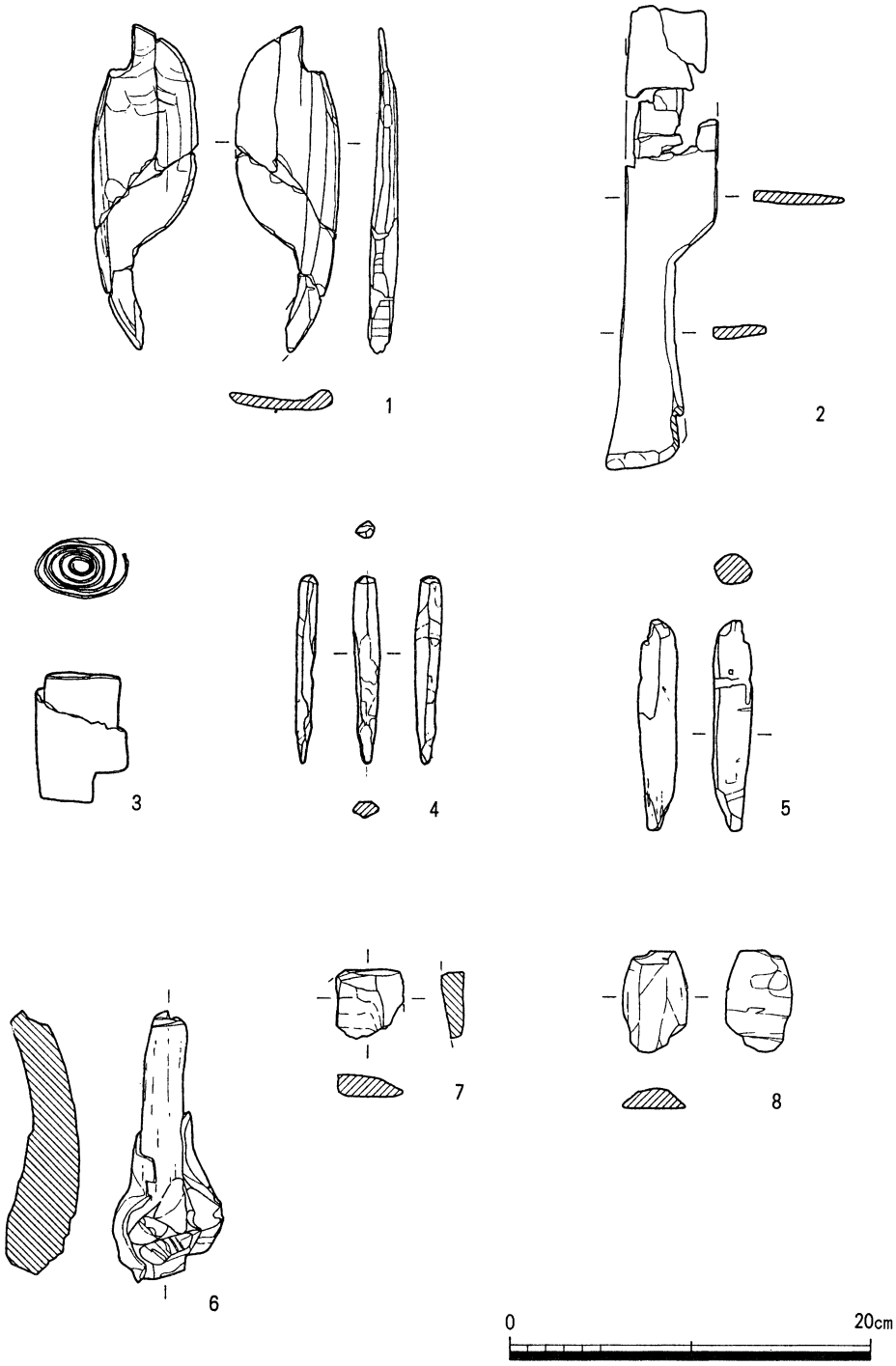
第75図　SD10・11出土遺物実測図（56）



第76図　SD10・11出土遺物実測図（57）



第77図　SD10・11出土遺物実測図（58）



第78図　SD10・11出土遺物実測図（59）

5　板材　（第72図〜74図）

板材についても大きく２つに分類した。板材（小）としたものは、幅５cm前後、全長30cmを越えるものもあるが、大半は20cm以内のもの、厚さ１cm前後の規模をもつ。加工痕を明瞭にもつ（１，２，３，７，８，10）ものもみられる他、両側縁が直線的に加工され、両面とも平坦な面を多く残すものも多い。いずれの板材も完結するものがないため、用途は特定できない。一方、板材（大）としたものは、板材（小）としたものに比べ、大型である。（２，４）には両縁部および小口部に加工痕が明瞭にみられる。このうち、（２）の長辺部の断面が屈曲していること、中央部が高くなっていることより柄孔は存在しないが、農具の未製品の可能性が考えられる。また、（４）については厚さが4.5cmと厚いこと、全長45.9cm、幅16.5cmを測り、大型であり形が整っていることから、何らかの工具の原材と考えられる。

6　有孔板　（第75図）

板材の縁辺部もしくは中央部に１もしくは２の孔を有するものである。いずれの板材を欠損する部分が多いが、全長20cm以内のものが大半と考えられる。孔径は直径0.5cm前後を測るが、同じ孔径で貫通するもの、両面がやや大きくなるものがみられる。両面および側面は平坦面を保ち直線的である。特に（２）の加工痕は顕著に残る。

7　加工棒　（第76図）

（７）を除くすべてのものに面取りが行われており、断面は多角形を呈する。最も残りの良いもので42.4cmを測るが、大半は残存状況は悪い。一部、（９）のように柄状の突出がみられることより、何らかの部材と考えられるものも存在するが、両端を欠損するものも多く、用途を特定できない。

8　加工木　（第77図）

いずれの加工木も、相当な加工が施されているが、器種を特定できないものもある。（１）はコの字形を呈する木製品である。中央部で欠損するため、本来この状態で接合するのか不明である。両側の屈曲部が最も太く、2.2cmを測る。屈曲部から離れるほど細くなる。加工は全面に施されており、屈曲部の内側に縦方向の加工が顕著にみられる。（２）は先端部に多くの加工が施されているもので、全長36.0cm、幅9.7cm、高さ6.6cmの規模をもつ。先端部は下方からの加工がほとんどであり、加工痕も粗い。先端にいくにしたがい徐々にすぼまる。その他に加工がみられるのは、上面後部に粗い加工がみられ、面を平坦にしている。加工状況からすれば、未製品であることは間違いないが、小形の舟形木製品と形状および成形方法が似ており、先端部が尖ることから、上面から刳抜を行えば、大形の舟形木製品になる可能性が高い。

9　庖丁形木器　（第78図）

（１，２）は庖丁形を呈するものである。（１）は一側面が尖り、両面からの加工により一側

面が先端部から徐々に厚く縁取り、湾曲しながら独立し、把手状を呈するものである。途中で欠損するため、先の形態は不明である。残存長17.7㎝、幅5.7㎝、把手の最厚部1.2㎝を測る。全面に加工が施されており、整形は丁寧である。（２）は把手の部分が端へいくほど広がるもので、刃部は残存状況は悪いが、背と刃が平行を保つ形態をする。刃部は両面からの加工により尖る。残存長25.6㎝、刃部幅5.0㎝、把手幅（最大）4.3㎝、（最小）2.7㎝、厚さ0.7㎝を測る。木庖丁と呼んでいるものとは、明らかに用途が違うと考えられるが、形状から庖丁形木製品とした。

10　先端加工木　（第78図）

（３，４）は先端を加工するもので、（３）は先端以外に全面を加工する。断面形状は多角形を呈する。（４）は先端部に２方向の加工が施され尖る。全長は（３）が10.2㎝、（４）が11.5㎝を測る。

11　加工木　（第78図）

（５）は樹皮が残存するもので、下端部に枝払いと考えられる加工痕が残る。

４　ＳＤ14　（第79図）

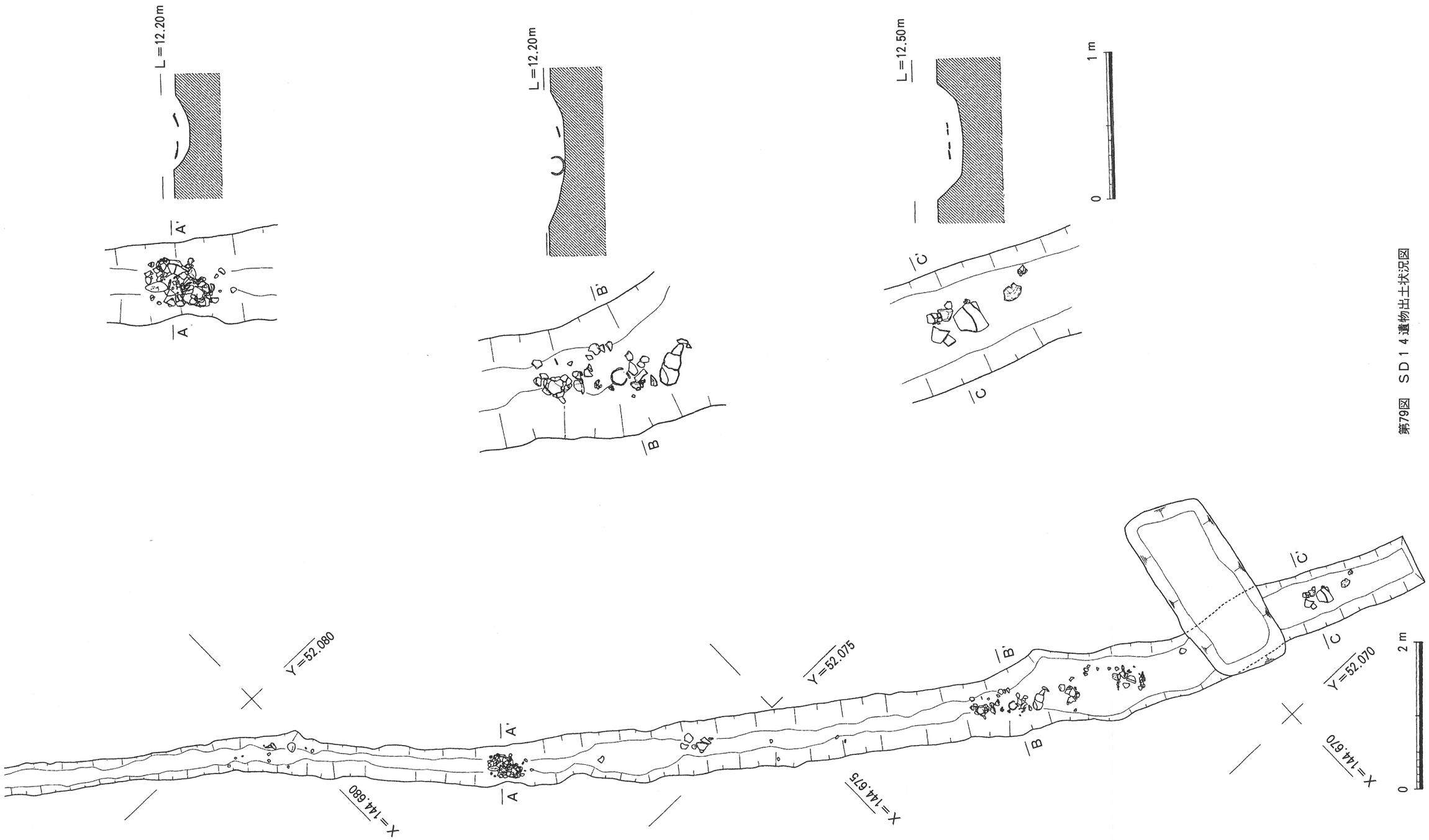
調査区東端において検出した溝である。方向は北東に向かって下り、調査区北端近くで削平の為消滅する。検出長40ｍ強であり、溝幅は最大で0.70ｍ、最小は0.30ｍ、深さは最深部で0.19ｍを測り、北にいくにしたがい浅くなる。遺物は南半部で多く見られ、北半部は後世の削平の為か、残りも悪く、出土量も少ない。出土状況は溝底から10㎝程度、土器が浮いた状態で確認できることから、溝が機能を失ってからしばらくして一括投棄されたものと考えられる。土器の磨耗が著しい状況からすれば投棄されてから徐々に埋没していったものと考えられる。この溝の機能としては周辺に同時期の遺構が存在していないことにより不明であるが、水路等の機能が考えられる。

ＳＤ14出土土器　（第80図）

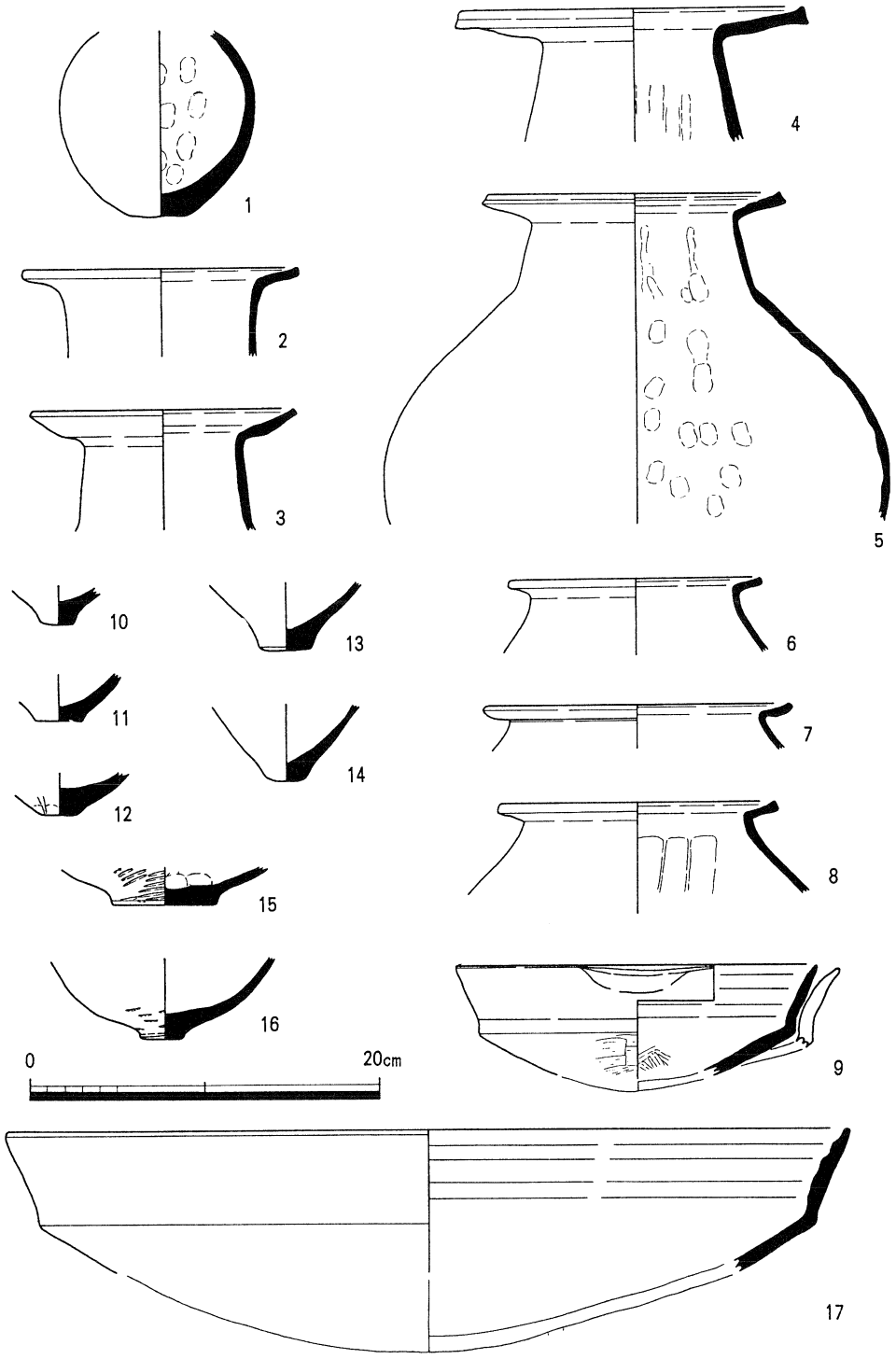
SD14からは、量は少なかったものの弥生時代後期の土器が出土している。出土機種は高坏を除く壷、甕、鉢が出土している。いずれの土器も磨耗が著しく調整の不明なものが多い。

壷（１～５）

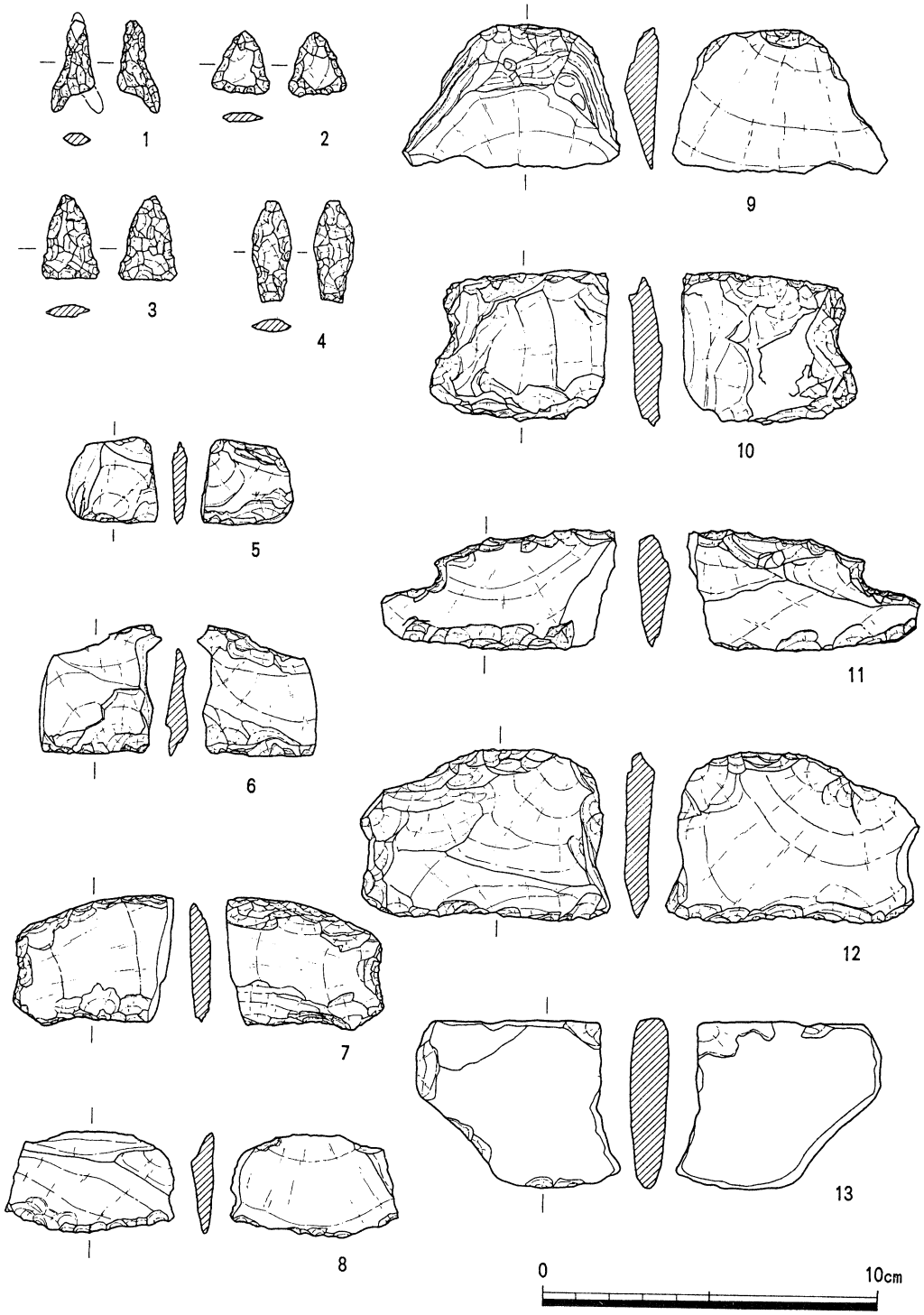
（１）は細頸壷である。頸部以上を欠損するが、胴部以下はほぼ残存する。胴部は球形を呈し底部はわずかに平底を残すのみである。磨耗のため外面の調整は不明であるが、内面には指頭圧痕が見られる。（２～５）は広口壷である。（２）以外は頸部が内傾し屈曲して水平もしくは斜上方に広がる口縁部を持つ。口縁端部は肥厚しない（２・３）と肥厚する（４・５）に分かれ、口縁部内面に凹線文状の凹凸が見られる（５）がある。（５）を見る限り胴部は大きく



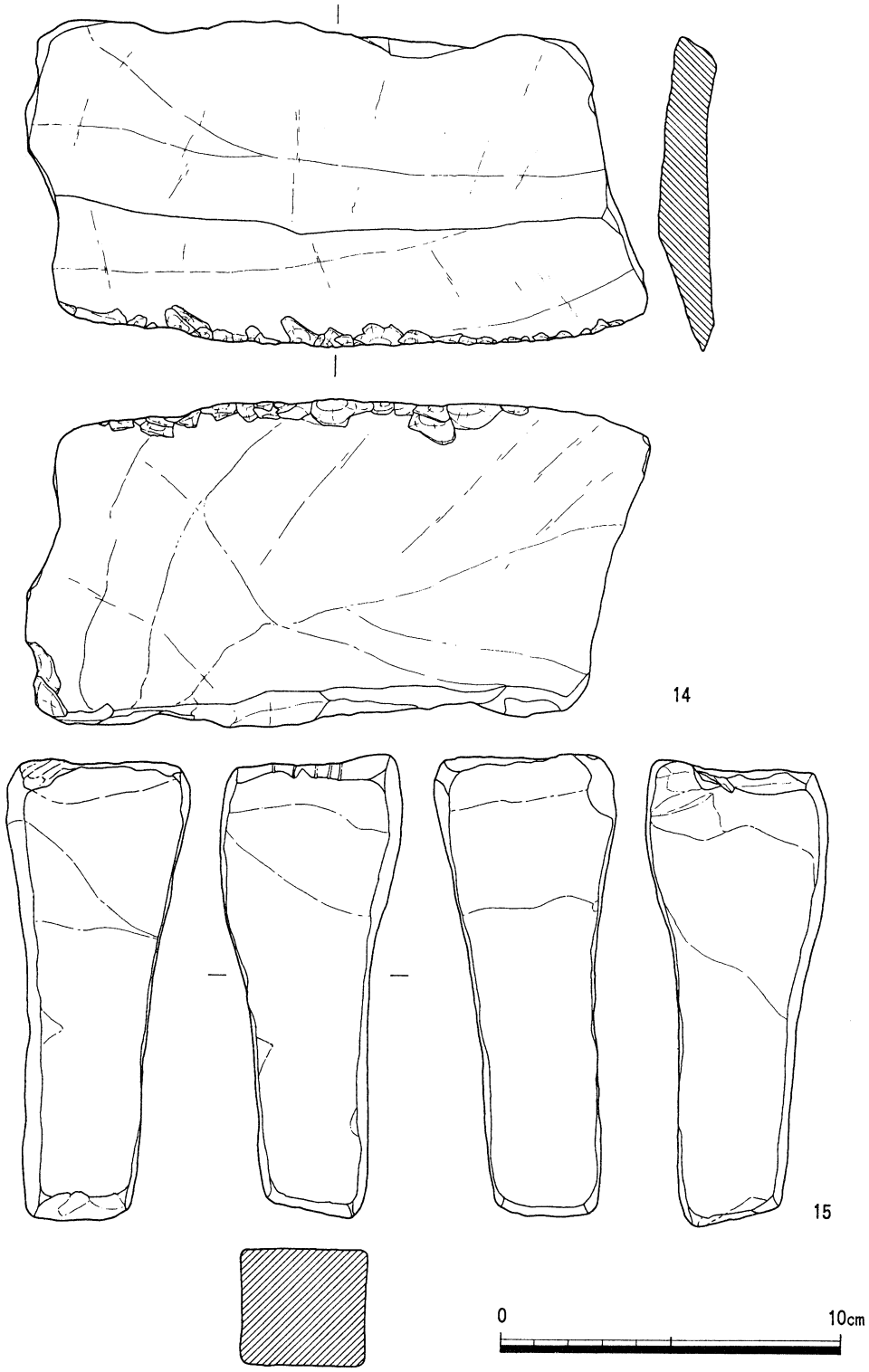
第79図　ＳＤ１４遺物出土状況図



第80図　SD14出土遺物実測図



第81図　遺構外出土遺物実測図（１）



第82図　遺構外出土遺物実測図（２）

張り、丸底に近い底部を持つものと考えられる。胴部内面には指頭圧痕が顕著に残る。

甕（6～8）

ナデ肩の体部から頸部は鋭く屈曲し、短い口縁部を持ち口縁端部を上方につまみ上げる。体部内面に指頭痕がみられる。

鉢（9～17）

（9・17）は同形態の大型と小型の鉢である。同時期の高坏も同じ形態をする。四状体部から屈曲し、やや外反しながら立ち上がる口縁部を持つ。口縁内部にはナデによる凹凸がみられる。（17）は破片であり片口がみられないが、（9）のように片口を持つものと考えられる。（10～16）は底部である。（15）以外はかろうじて平底を持つ。（10～14）は直線的な体部を持ち、（15・16）は内湾して立ち上がる体部を持つ。（15・16）の外面にはタタキ調整がみられる。これらの土器はそれぞれの器種の特徴から弥生時代後期末（下川津Ⅳ）に属すると考えられる。

遺構外出土遺物　石器　（第81,82図）

第1遺構面の遺構検出を行っている段階において確認した石器である。量はあまり多くない。確認した石器は、縄文時代に遡るものも一部含まれるが、大半のものは弥生時代に属するものと考えられる。石器の種類は、石鏃、石庖丁、削器、砥石、大形削器等がみられる。

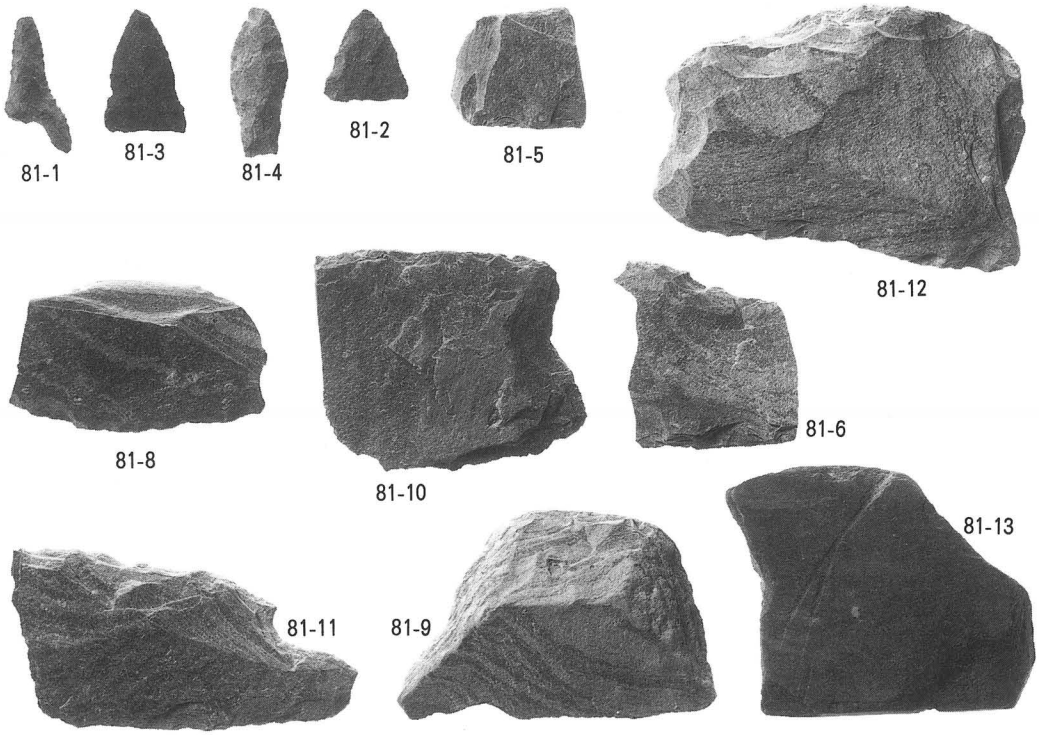
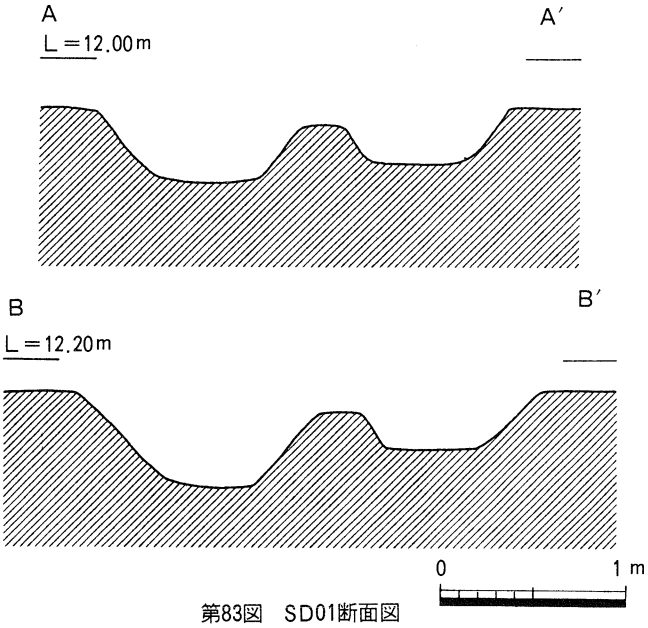


写真4　遺構外出土石器

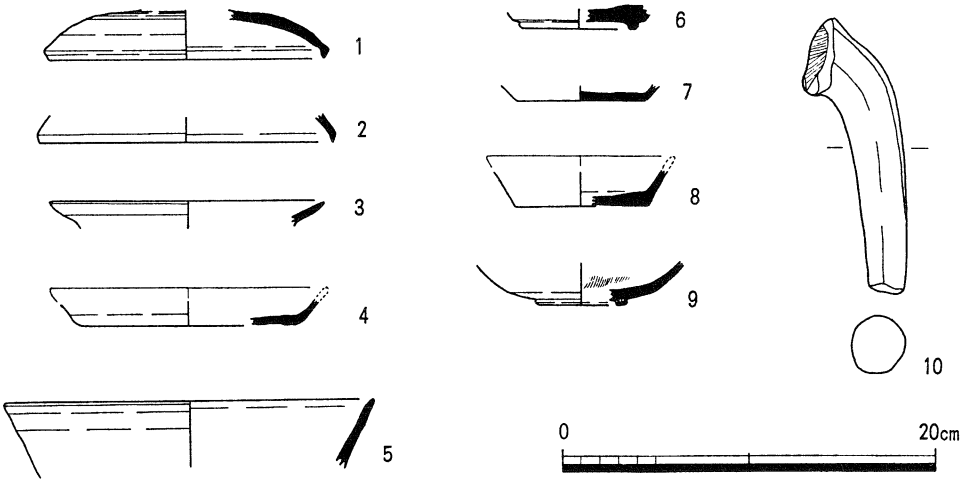
第５節　古代から中世の遺構と遺物

１　ＳＤ01　（第83・84図）

調査区西端に位置する溝である。北端で小溝が分岐する。主軸包囲はＮ－９°30′－Ｅを測り、検出長35ｍ、幅2.15ｍ、深さ0.34ｍの規模をもつ。断面形状は中央部が高くなるＵ字形を呈する。西側の流路に比べ東側の流路の底面が、10cm程高い構造になっている。土層埋土は単一層である。出土遺物は須恵器、土師器、瓦質土器などが出土しており、これらの遺物より最終埋没は12世紀後半頃と考えられる。



第83図　SD01断面図

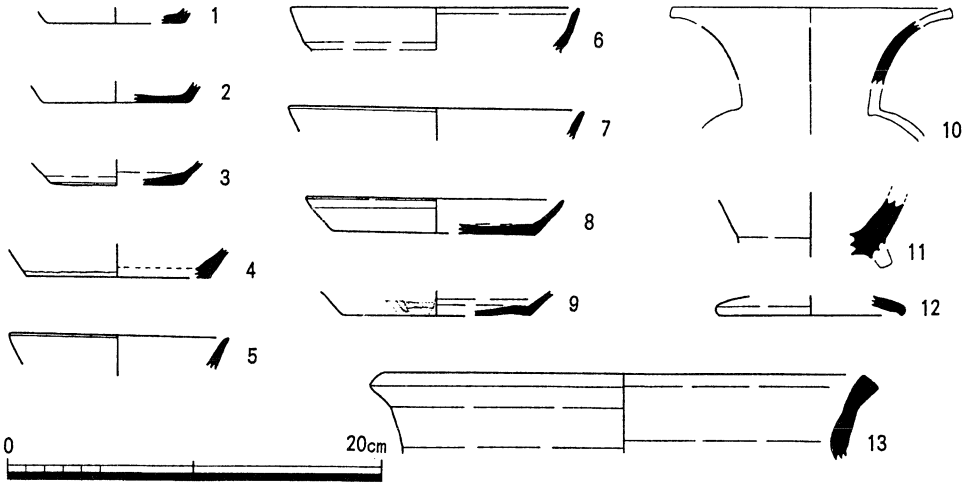


第84図　SD01出土遺物実測図

２　調査区西端包含層出土土器　（第85図）

ＳＤ01の上部から調査区西端までの範囲において堆積していた灰黄褐色シルト中に包含されていた土器である。いずれも細片が多く、全体の判るものは極少数である。出土した土器の器

種は、須恵器が大半で、皿、杯を中心にその他、若干の大型品を含むが、大半は小物である。これらの包含層出土遺物は、包含層直下のＳＤ01出土遺物と同様な時期のものが出土しているが、包含層出土遺物の方が、ＳＤ01出土遺物に比べ古い時期のものが多く出土している。



第85図　調査区西端包含層出土遺物実測図

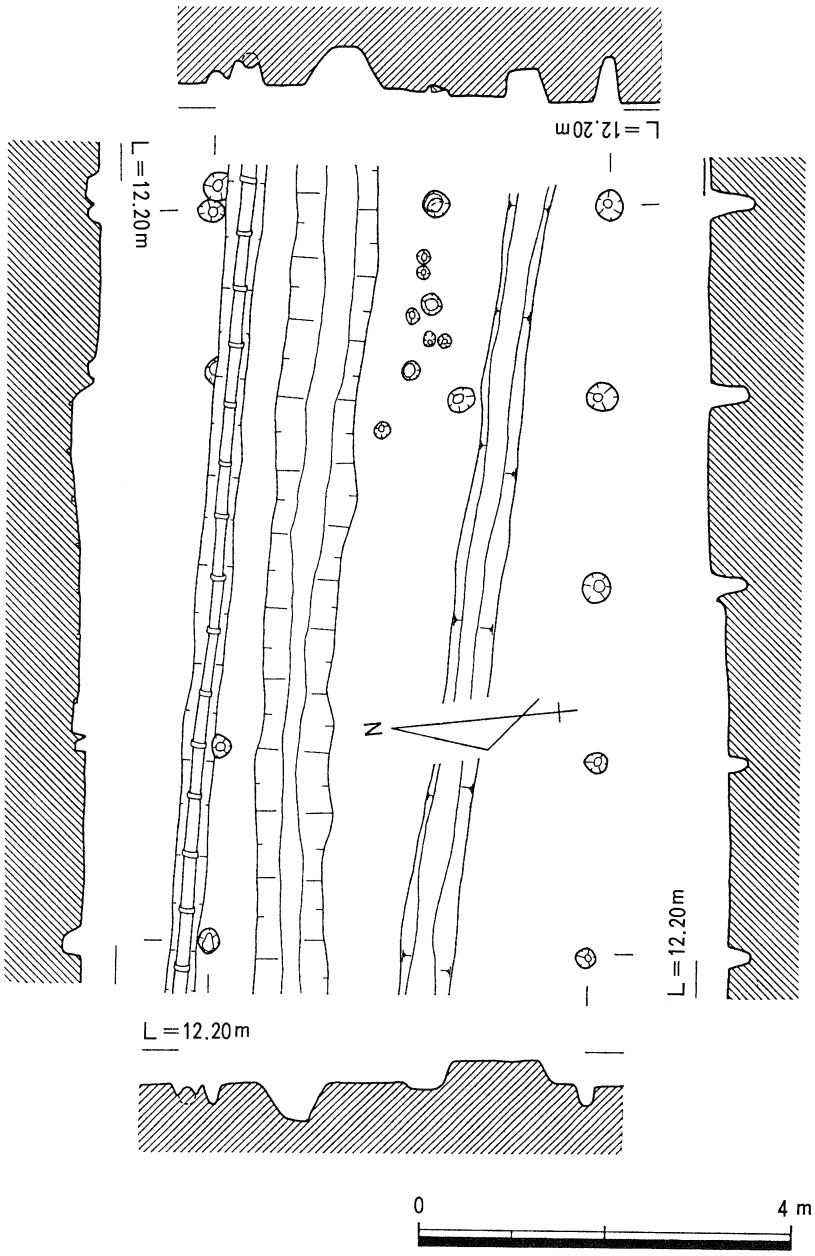
第６節　近世の遺構と遺物

ＳＢ01　（第86図）

調査区中央部に位置し、ＳＤ07をまたぐように存在する掘立柱建物である。主軸方位はＮ－95°30′－Ｅを測り、桁行（４間）8.14ｍ、梁行（２間）4.20ｍの規模をもつ東西棟である。芯心間の距離は1.70～2.35ｍと一定でなく、柱穴規模についても直径0.20～0.33ｍ、深さ0.08～0.50ｍと一定ではない。Pit６には根石が存在する床面積は32.76㎡の規模をもつ。出土遺物はないが、近世頃の所産と考えられる。

ＳＢ02　（第87図）

調査区中央部北半ＳＤ09の東側に位置する掘立柱建物である。主軸方位はＮ－10°－Ｅを測り、東列が不明であるが、桁行（２間）4.00ｍ、梁行（１間）4.00ｍの規模をもつ南

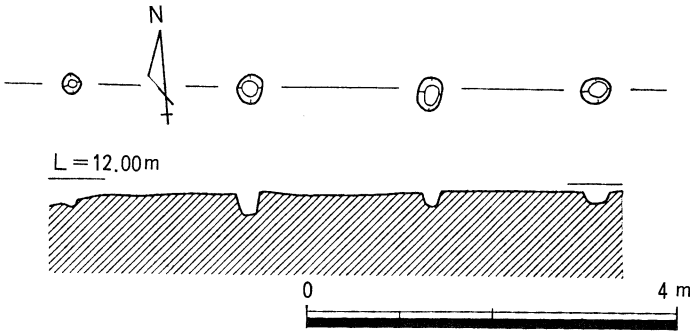


第86図　SB01実測図

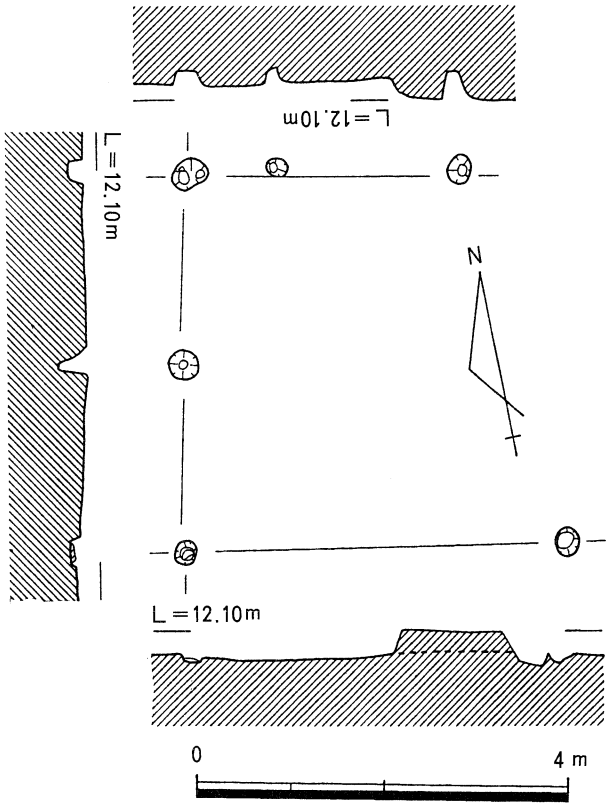
北棟である。芯心間の距離は、南北は2.00mで一定しているのに対し、東西は2.95〜4.00mと一定でない。柱穴規模は直径0.25〜0.38m、深さ0.10〜0.30mと一定していない。Pit 5には根石と考えられる石が存在する。検出したPitの配置等の関係から建物にするには若干の不安がある。出土遺物はないが近世頃の所産と考えられる。

ＳＡ01　（第88図）

調査区中央部南半、ＳＢ01の南側に位置する柵列である。主軸方位はＮ－96°－Ｅを測り、（３間分）の柱穴で構成される。規模は5.70m、芯心間の距離は1.85〜1.95mと誤差は少ない。柱穴の直径は0.30m、深さ0.10〜0.24mである。出土遺物はないが、近世頃の所産と考えられる。



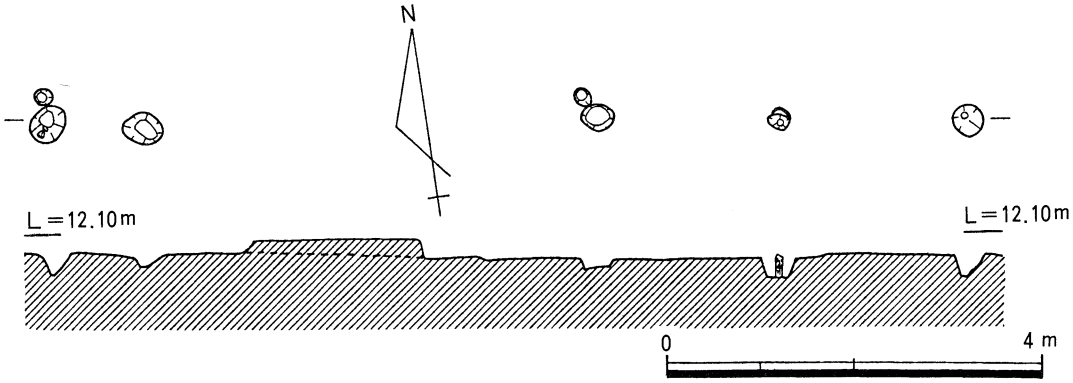
第88図　SA01実測図



第87図　SB02実測図

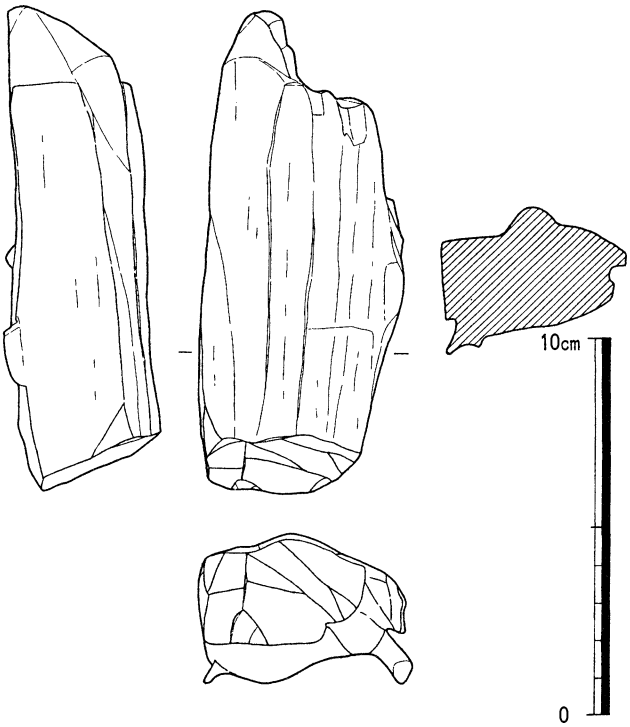
ＳＡ02　（第89、90図）

調査区中央部北半、ＳＢ01の北側に位置する柵列である。主軸方位はＮ－97°50′－Ｅを測り、４間分の柱穴で構成される。規模は9.76m、芯心間の距離は、1.00〜2.00mと一定ではない。柱穴の直径0.35〜0.40m、深さ0.10〜0.25mを測る。Pit 4には柱材が残存している。出土遺物はないが、近世頃の所産と考えられる。用水路の下ににげる。規模は長辺1.20m、短辺0.50m以上、深さ0.28mを



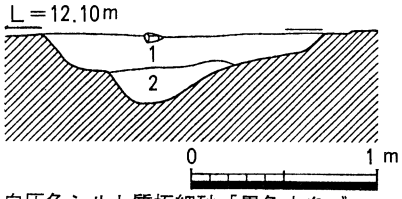
第89図　SA02実測図

測る。出土遺物はないが、近世頃の所産と考えられる。



第90図　SA02柱材実測図

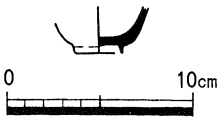
ＳＫ02　（第91、92図）



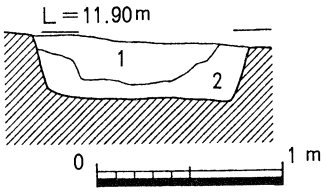
1.白灰色シルト質極細砂［黒色土をブロック状に含みＦｅを多量含む］（10YR7／1）
2.灰黄色シルト質極細砂［黒色土をブロック状に含む］（10YR６／２）

第91図　SK02土層図

用水路の東側、ＳＤ06の南側に位置する。形状は不定形であり、底面中央部が凹む。規模は長辺1.20m、短辺1.10m、深さ0.35mを測る。土層埋土は２層に分層できる。出土遺物は、染付磁器の盃が１点出土している。



第92図　SK02出土遺物実測図



1.灰白色シルト質極細砂［黒色土をブロック状に含む］（10YR7／1）
2.灰白色シルト質極細砂（10YR7／1）

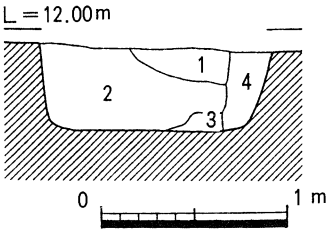
第93図　SK03土層図

ＳＫ03（第93図）

ＳＫ01の東側、ＳＢ02の南側に位置する。平面形状はほぼ円形であり、断面形状は台形を呈する。規模は、長径1.30m、短径1.14m、深さ0.30ｍを測る。土層埋土は２層に分層できる。出土遺物は、陶器摺鉢２点、陶器蓋１点が出土している。

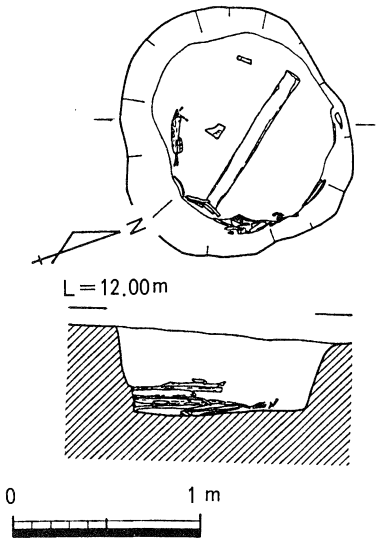
ＳＫ04　（第94〜96図）

調査区中央部北半、ＳＡ02の南側、ＳＫ05の西側に位置する。平面形状はほぼ円形であり、断面形状は台形を呈する。規模は南北1.20m、東西1.30m、深さ0.45ｍを測る。底面に幅0.05ｍ、長さ0.85ｍの板が置かれており、壁面に貼りつくように、たが状の竹が直径0.85ｍに３段めぐる。土層埋土は４層に分層でき、堆積状況からすれば、第４層が裏込土、第１〜３層が流入土もしくは埋土と考えられる。出土遺物、骨等の出土はないが、土坑内部の状況からすれば墓の可能性（座棺か？）が考えられる。

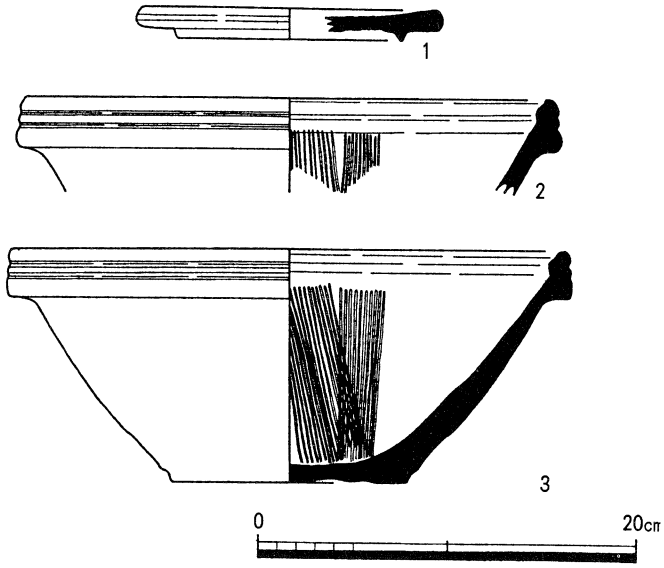


1．灰白色シルト（10YR７／１）
2．明黄褐色粘質シルト（10YR６／６）
3．黒色粘土（7.5YR1.7／１）
4．灰黄褐色砂質シルト（10YR６／２）

第94図　SK04土層図



第95図　SK04実測図



第96図　SK04出土遺物実測図

ＳＫ05

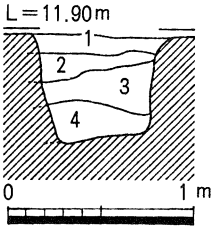
調査区中央部北半、ＳＢ01の北側、ＳＡ02の南側に位置する。平面形状は、不正円形である。規模は長径1.30ｍ、短径1.10ｍ、深さ0.05ｍを測る。土層埋土は１層である。出土遺物はない。

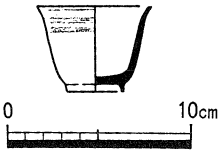
ＳＫ06

調査区中央部北半、ＳＢ01の北側、ＳＡ02の南側に位置する。平面形状は、楕円形である。規模は長径1.24ｍ、短径0.60ｍ、深さ0.06ｍを測る。土層埋土は１層である。出土遺物はない。

ＳＫ07　（第97、98図）

調査区中央部北半、ＳＢ01の北側、ＳＡ02の南側に位置し、ＳＫ08に切られる。平面形状はＳＫ08に切られているため南半分の状況は不明であるが、長方形になるものと考えられる。断面形状は台形を呈する。規模は長辺3.00ｍ、短辺1.15ｍ、深さ0.37ｍを測る。土層埋土は４層に分層でき、ほぼ水平堆積である。出土遺物は、染付磁器の猪口が１点出土している。





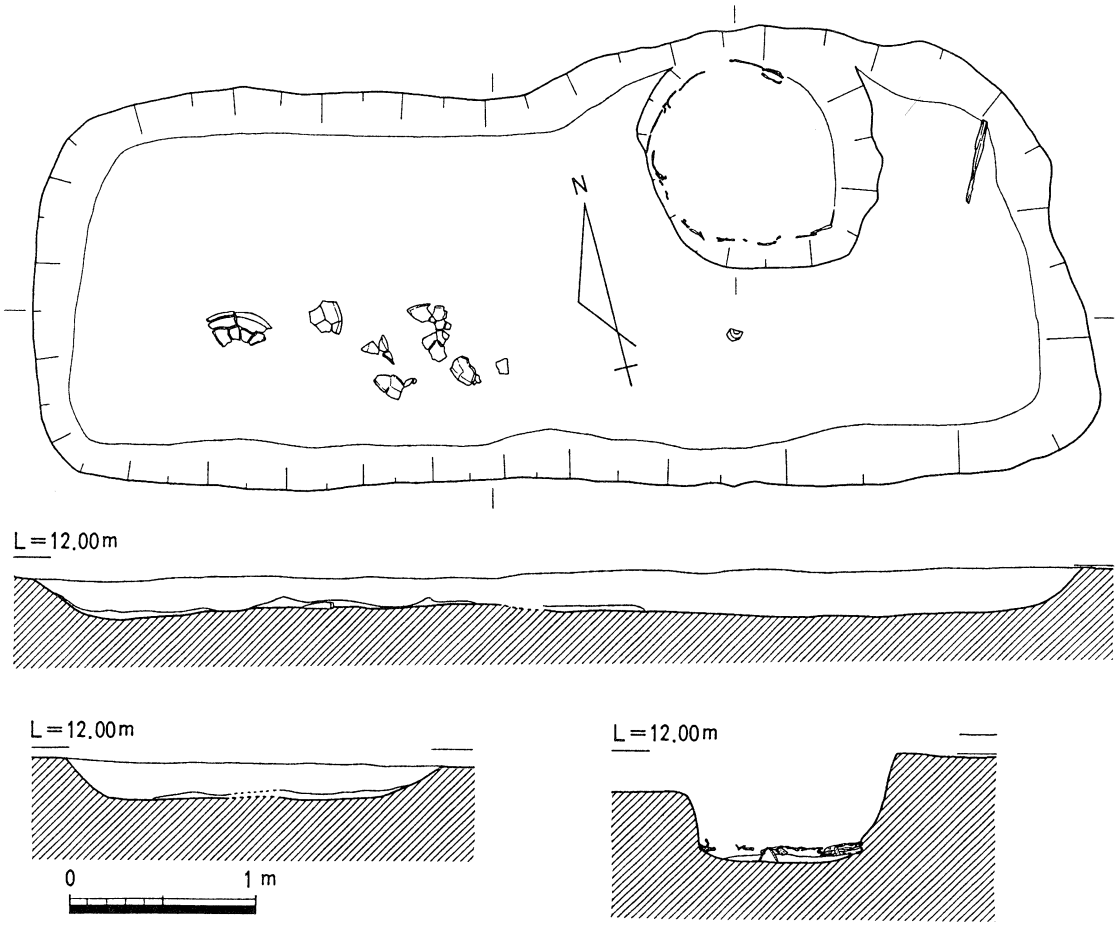
第98図　SK07出土遺物実測図

1．暗褐色粗砂（10ＹＲ３／３）
2．灰褐色砂質土まじりシルト（7.5ＹＲ４／２）
3．黒褐色粘土（５ＹＲ２／１）
4．明褐灰色粘質シルト（５ＹＲ７／１）

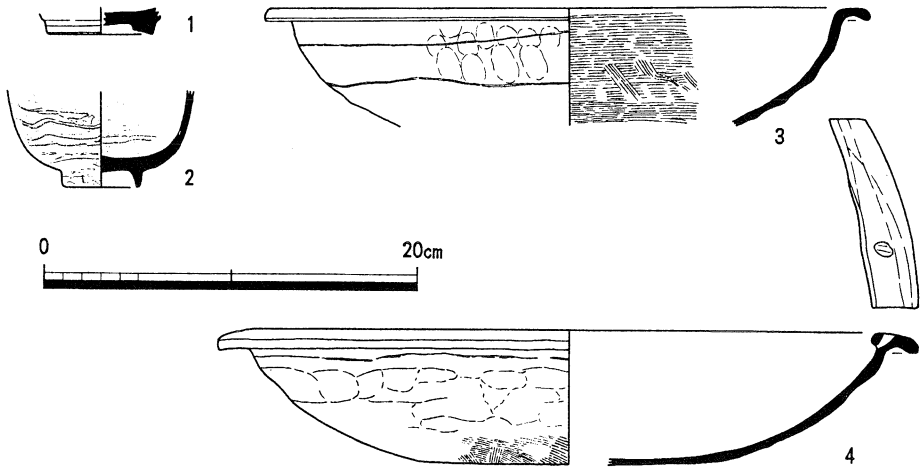
第97図　SK07土層図

ＳＫ08　（第99、100図）

調査区中央部北半、ＳＢ01の北側、ＳＡ02の南側に位置し、ＳＫ07、09、10を切る。平面形状は長方形、断面形状は台形を呈する。土坑北東部には底面からさらに深い、円形の土坑が存在する。ＳＫ08と円形土坑の関係は上面精査の段階で切り合い関係が確認できなかったことから、同一遺構であると考えられる。規模は長辺5.70ｍ、短辺2.40ｍ、深さ0.24ｍを測り、円形土坑、円形土坑は、直径1.27ｍ、底面からの深さ0.37ｍを測る。底面近くＳＫ04と同様に壁面にたが状の竹が２段めぐる。土層埋土は２層に分層でき、ほぼ水平に堆積している。遺物は土坑南西部に焙烙３点がかたまって出土し、やや離れたところから刷毛目唐津の碗が１点出土している。円形土坑は、内部状況及び他の土坑の状況から考えて墓の可能性が考えられるが、円形の土坑とＳＫ08の関係は残念ながら不明である。



第99図　ＳＫ08実測図



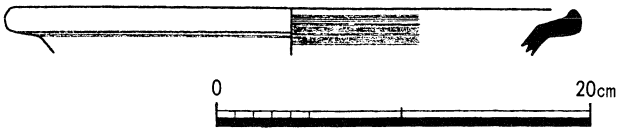
第100図　SK08出土遺物実測図

ＳＫ09

調査区の中央部に位置し、ＳＫ10を切り、ＳＫ08に切られる。平面形状は楕円形であり、断面形状は台形である。規模は直径1.25ｍ、短径1.20ｍ以上、深さ0.35ｍを測る。土層埋土は１層であり、出土遺物はない。

ＳＫ10　（第101図）

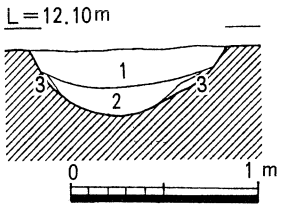
調査区の中央部北半に位置し、ＳＫ09に切られる。平面形状は、ＳＫ09に大半を切られている為不明であるが、楕円形を呈するものと考えられる。規模は長径1.30ｍ以上、短径0.40ｍ以上、深さ0.27ｍを測る。土層埋土は１層であり、出土遺物は刷毛目唐津の鉢が１点出土している。



第101図　SK10出土遺物実測図

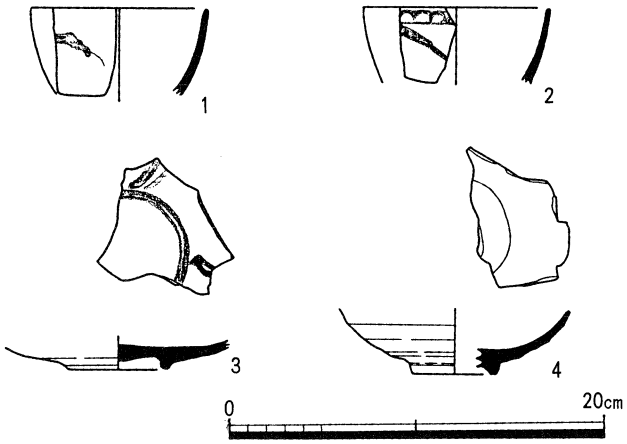
ＳＫ11　（第102、103図）

調査区の中央部北半、ＳＤ08の西側に位置し、ＳＫ12を切る。平面形状は長方形であり断面形状はU字形を呈する。規模は長辺1.94ｍ、短辺1.08ｍ、深さ0.36ｍを測る。土層埋土は２層であり、出土遺物は染付磁器の碗、皿等が出土している。根拠に乏しいが形状等から土壙墓の可能性が考えられる。



1．灰黄色シルト質極細砂（2.5Y７／２）
2．褐灰色粗砂（10YR４／１）
3．にぶい黄橙色粘土（10YR６／４）ベース

第102図　SK11土層図



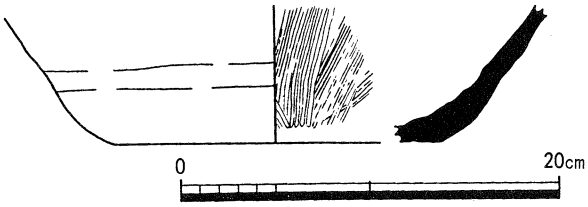
第103図　SK11出土遺物実測図

ＳＫ12

調査区の中央部北半ＳＤ08の西側に位置し、ＳＫ11に切られる。平面形状はＳＫ11に西側を切られているが、円形であると考えられる。断面形状は台形を呈する。規模は長径1.30ｍ、短径0.45ｍを測る。土層埋土は１層であり、出土遺物はない。

ＳＫ13　（第104図）

調査区の中央部北半、ＳＤ08の東側に位置する。平面形状は楕円形であり、断面形状は台形を呈する。規模は長径1.20ｍ、短径0.94ｍ、深さ0.25ｍを測る。出土遺物は陶器の摺鉢が１点出土している。



第104図　ＳＫ13出土遺物実測図

ＳＫ14

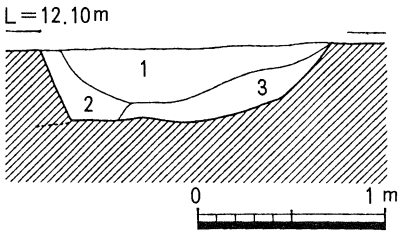
調査区の中央部北半、ＳＤ08の東側、ＳＫ13の南側に位置する。平面形状は円形であり、断面形状はＵ字形を呈する。規模は長径1.70ｍ、短径1.60ｍ、深さ0.42ｍを測る。出土遺物はない。

ＳＫ15

調査区中央部北半に位置し、ＳＫ16を切り、ＳＤ08に切られる。平面形状は不正形である。規模は東西0.70ｍ、深さ0.42ｍを測る。出土遺物はない。

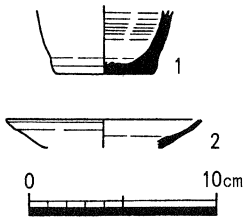
ＳＫ16　（第105、106図）

調査区中央部北半に位置し、ＳＫ15、ＳＤ08に切られる。平面形状は楕円形であり、断面形状は台形を呈する。規模は長径2.75ｍ、短径1.55ｍ以上、深さ0.40ｍを測る土層埋土は３層に分層でき、出土遺物は陶器の壷１点と土師器の皿が１点出土している。



1．褐灰色シルト質極細砂（7.5ＹＲ６／１）
2．褐色粘質シルト（7.5ＹＲ４／４）
3．黄橙色粘質シルト（10ＹＲ８／８）

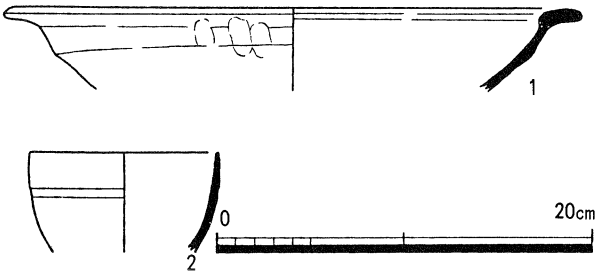
第105図　ＳＫ16土層図



第106図　ＳＫ16出土遺物実測図

ＳＫ17　（第107図）

調査区中央部北半に位置し、ＳＤ08を切る。平面形状は長方形であり、断面形状は台形を呈する。規模は長辺2.20ｍ、短辺1.60ｍ、深さ0.72ｍを測る。出土遺物は磁器の碗１点と土師器焙烙１点が出土している。



第107図　SK17出土遺物実測図

ＳＫ18

調査区中央部、ＳＤ07、08が合流部分の東側に位置する。平面形状は長方形で断面形状は二段掘になり、底面は円形を呈す。規模は長辺2.15m、短辺1.75m、深さ0.58m、底面直径1.20mを測る。出土遺物はない。

ＳＫ19

調査区中央部ＳＢ01のすぐ南側に位置する。平面形状は長方形であり、断面形状は、ゆるいＵ字形を呈する。規模は、長辺1.75m、短辺1.30m、深さ0.21mを測る。土層埋土は１層であり、出土遺物はない。

ＳＫ20

調査区中央部ＳＤ08の東側に位置する。平面形状は長方形であり、断面形状はゆるいＵ字形を呈する。規模は、長辺1.00m、短辺0.82m、深さ0.15mを測る。土層埋土は２層であり、出土遺物はない。

ＳＫ21

調査区中央部南半、ＳＤ08東側に位置し、ＳＫ22に切られる。平面形状は不正形であり、断面形状は二段掘になる。規模は、長辺2.30m、短辺1.70m、深さ0.40mを測る。土層埋土は単一層であり、出土遺物はない。

ＳＫ22

調査区中央部南半ＳＤ08の東側に位置し、ＳＫ21を切る。平面形状は楕円形、断面形状はＵ字形を呈する。規模は直径1.00m、短径0.85m、深さ0.33mを測る。土層埋土は２層に分層でき、出土遺物はない。

ＳＫ23

調査区中央部南半に位置し、ＳＤ08を切る。平面形状は楕円形、断面形状はU字形を呈する。規模は、長径1.10m、短径1.00m、深さ0.21mを測る。土層埋土は単一層であり、出土遺物はない。

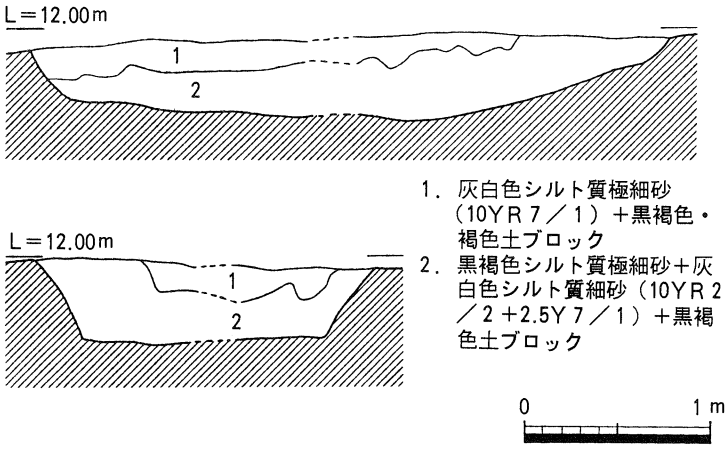
ＳＫ24

調査区中央部南半に位置する。平面形状は楕円形、断面形状はゆるいＵ字形を呈する。規模は長径1.05ｍ、短径0.90ｍ、深さ0.17を測る。土層埋土は２層に分層できる。出土遺物はない。

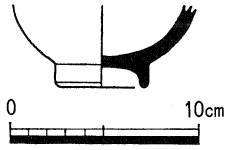
ＳＫ25

調査区中央部南端に位置する。一部分を検出したにとどまるが、平面形状は不正形、断面形状は台形を呈する。規模は長軸0.90ｍ、短軸0.40ｍ以上、深さ0.29ｍを測る。土層埋土は単一層で、出土遺物はない。

ＳＫ26　（第108、109図）



第108図　ＳＫ26土層図



第109図　ＳＫ26出土遺物実測図

調査区中央部南端、ＳＫ27の東側に位置し、ＳＤ10を切る。平面形状は楕円形、断面形状はゆるいＵ字形を呈する。規模は長軸3.45ｍ、短軸1.85ｍ、深さ0.45ｍを測る。土層埋土は２層に分層でき、出土遺物は染付磁器の碗が１点出土している。

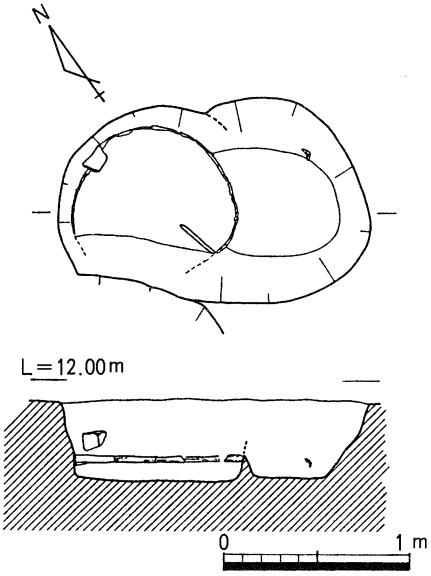
ＳＫ27　（第110図）

調査区中央部南端に位置し、ＳＫ28を切り、ＳＫ31に切られる。平面形状は、円が２つ重なり合った形になており、断面形状は台形を呈する。土坑西側はＳＫ04、08同様底面から10㎝上のところに、たが状の竹が１段円形に巡っている。規模は西側が直径1.00ｍ、深さ0.86ｍ、東側が直径1.10ｍ、深さ0.82ｍを測る。土層埋土は２層に分層できるが、水平に埋まっていることから土層の上からは同一の遺構と考えられるが、土坑内からの竹の本検出状況からすれば切り合い関係があるのかもしれない。出土遺物は東側から染付磁器片が出土しているが図示しえ

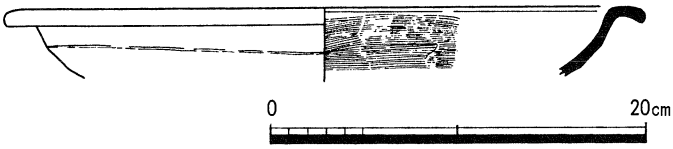
なかった。ＳＫ04、08と同様な状況から墓である可能性が考えられる。

ＳＫ28　（第111図）

調査区中央部南端に位置し、ＳＫ27、31に切られる。平面形状は、約２／３を切られて不明であるが長方形と考えられ、断面形状は台形を呈する。規模は長軸2.30m、短軸0.80m以上、深さ0.40mを測る。土層埋土を２層に分層でき、出土遺物は土師器の焙烙が１点出土している。



第110図　SK27実測図



第111図　SK28出土遺物実測図

ＳＫ29　（第112、113図）

調査区中央部南端に位置し、後述するとＳＫ30と同じくＳＫ31の中に並列する。平面形状は円形、断面形状は台形を呈する。規模は直径1.16m、深さ0.40mを測る。底部壁面に二段のたが状の竹が巡る。土層埋土は３層に分層でき、出土遺物は染付磁器碗２点、刷毛目唐津碗１点が出土している。この土坑も内部状況から墓と考えられる。

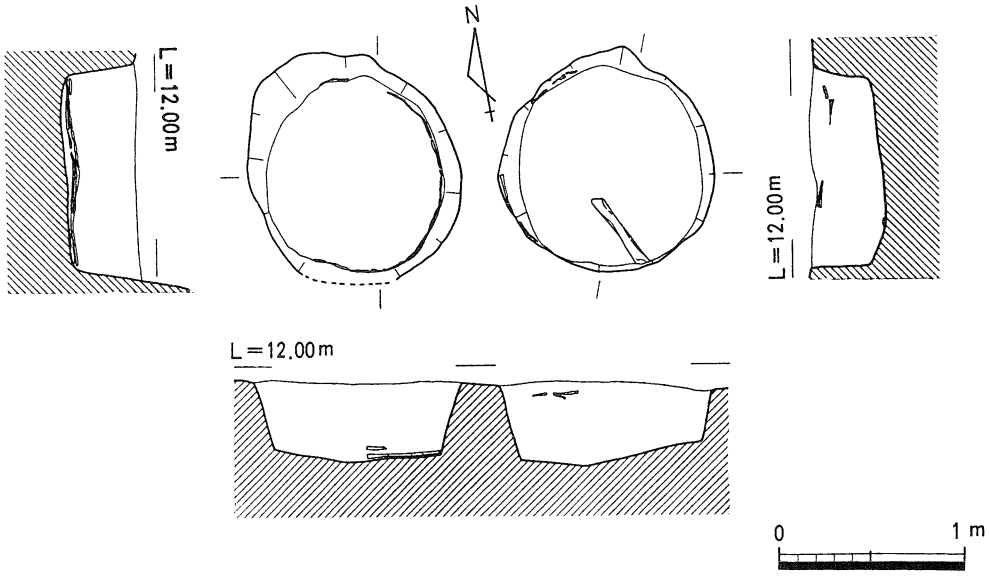
ＳＫ30　（第112、113図）

調査区中央部南端に位置し、前述したＳＫ29と同じくＳＫ31の中に並列する。平面形状は円形、断面形状は台形を呈する。規模は直径1.17m、深さ0.45mを測る。上部壁面に１段のたが状の竹が巡り、底部には板が存在する。土層埋土は２層に分層でき、出土遺物は染付磁器碗、刷毛目唐津碗、陶器皿などが出土している。この土坑についてもＳＫ04等の内部状況と同様であることより墓と考えられる。

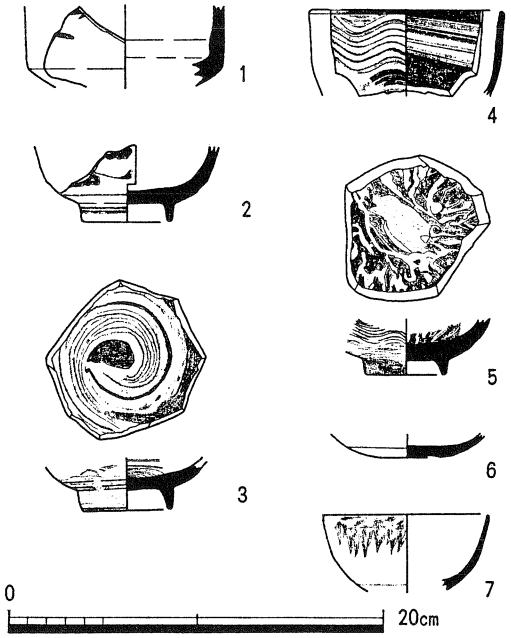
ＳＫ31

調査区中央部南端に位置し、ＳＫ29、30に切られる。平面形状は楕円形を呈する。規模は長軸2.65m、短軸1.20m以上を測る。ＳＫ29・30との配置関係からすれば両土坑（座棺）の掘り

方ではないかと考えられる。



第112図　SK29、30実測図



第113図　SK29、30出土遺物実測図

ＳＫ32

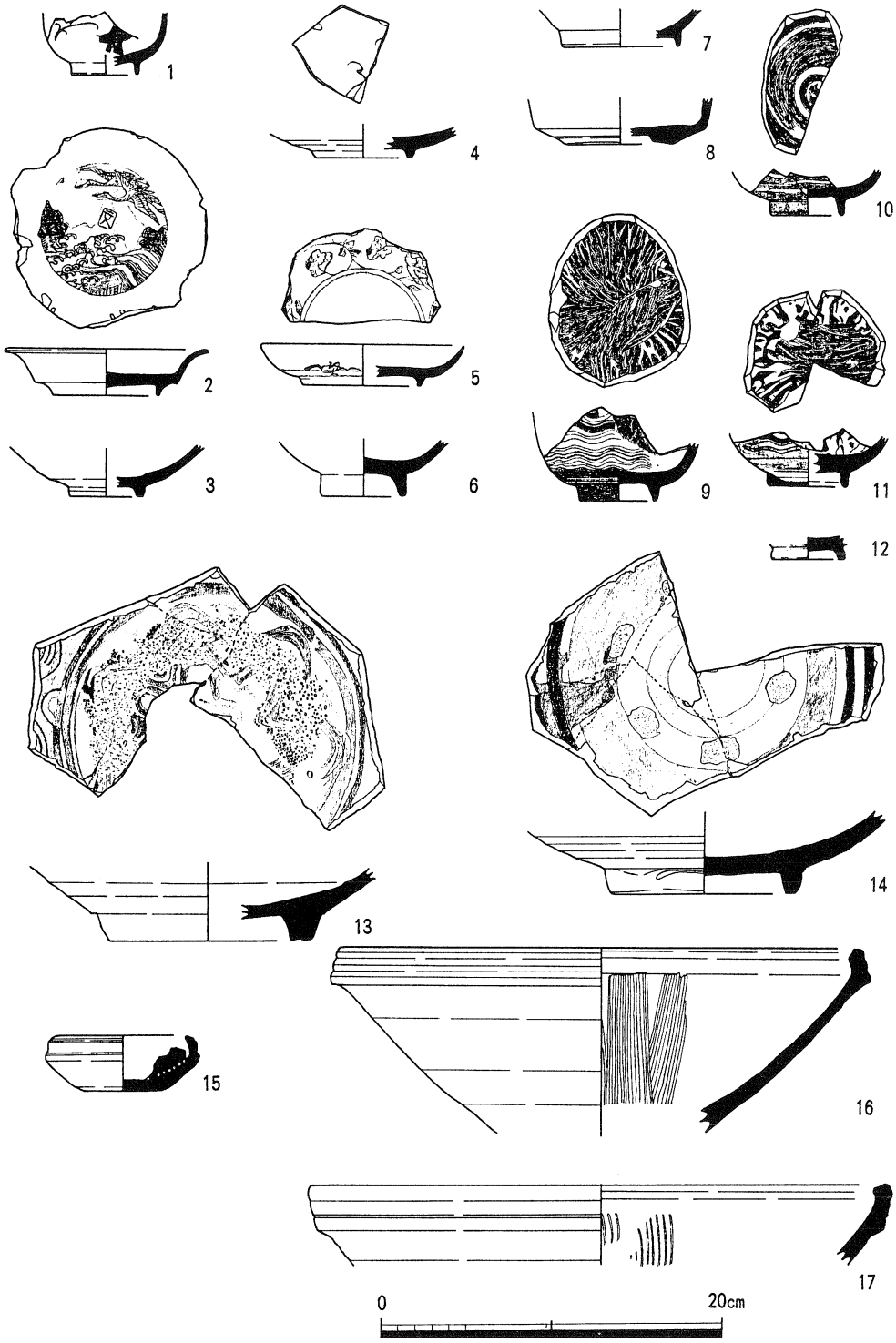
調査区東部北半に位置する。平面形状は長方形、断面形状は台形を呈する。規模は長辺1.10m、短辺0.90m、深さ0.17mを測る。出土遺物はない。

ＳＫ33

調査区東端に位置する。平面形状は方形、断面形状は台形を呈する。規模は一辺1.10m、深さ0.34mを測る。出土遺物はない。

ＳＫ34

調査区東端、ＳＫ33の南側に位置する。平面形状は長方形、断面形状は台形を呈する。規模は長辺1.30m、短編1.20m、深さ0.32mを測る。出土遺物はない。



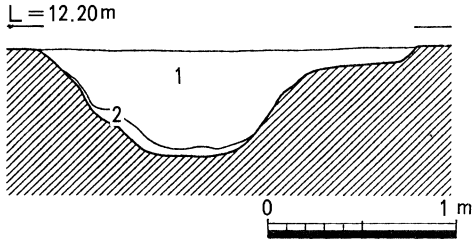
第114図　SE01出土遺物実測図

ＳＥ01　（第114図）

調査区西半中央部で検出した井戸である。井戸は12.5×７ｍの長方形状の掘方と下部は不明だが、上部は土師製の井筒を二段重ねて上部に石を巡らせる井戸本体から構成される。井戸は検出した段階で、上部に板材で蓋をしていただけで、蓋を除去すると湧水が認められ、底は確認していない。これに付随するものとして、土管を連ねた暗渠が存在する。この暗渠は、全長0.6ｍ、直径0.1ｍの土管を使用したもので、土管の配置は南側で東西16ｍを測り、中央部から北に９ｍ伸び、東西に分岐する。西側に分岐したものは、途中ＳＥ01に分岐し、そのまま西へ伸びる。一方東側へは29ｍ伸び、直角に北に曲がり、調査区外へ逃げる。ＳＥ01と、これらの暗渠は配置の状況から、セットの使用が考えられるが、南側の土管の両端が完結していることより、ＳＥ01からの排水のみの使用とは考えられず、現段階ではその用途は不明である。また、掘方に比べ、井戸本体の規模が小さいことから当初、大規模な、湧水池が存在したものを後に井戸として整備した可能性も考えられる。なお、ＳＥ01出土遺物としたものは、掘り方の埋土中より出土したものである。出土遺物は、肥前系の皿、碗、盤、他、陶器の擂鉢が出土している。

ＳＤ05　（第115図）

調査区西部用水路の東側に位置する溝状遺構である。南側でＳＤ06と合流している。主軸方位はＮ－９°30′－Ｅの南北溝である。規模は幅2.00ｍ、深さ0.57ｍを測る。断面形状はＵ字形を呈し、西側の方が急に下がるのに対し、東側の方は幅0.50ｍの平坦面をもつ。土層埋土は１層であり、土の状況からすれば、一度に埋められたと考えられる。出土遺物はない。



1．灰オリーブ色シルト質細砂（５Ｙ６／２）
［黒色土、浅黄色シルト質細砂、褐色土をブロック状に多く含む］
2．暗褐色シルト質極細砂（10ＹＲ３／４）

第115図　ＳＤ05土層図

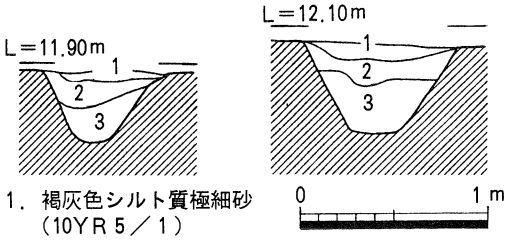
ＳＤ06

調査区西部用水路の東側に位置する溝状遺構である。前述のＳＤ05と合流し、西側は用水路に切られ、東側はＳＸ01に切られて不明である。主軸方位はＮ－111°30′－Ｅの東西溝である。規模は幅2.00ｍ、深さ0.33ｍを測る。断面形状はＵ字形を呈する。出土遺物はない。

ＳＤ07　（第116図）

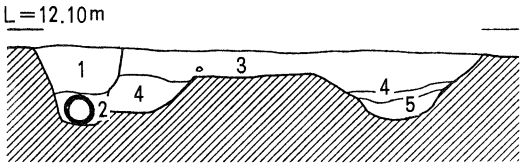
調査区中央部に位置し、西側はＳＸ01に切られ、東側はＳＤ08に合流する溝状遺構である。

はU字形を呈する。土層埋土は３層に分層できる。出土遺物はない。



1．褐灰色シルト質極細砂（10YR５／１）
2．灰黄色シルト質細砂＋灰白色細砂（2.5Y６／２＋2.5Y８／２）
3．黄灰色シルト質極細砂＋浅黄色細砂（2.5Y６／１＋2.5Y７／３）ラミナ状堆積

第116図　SD07土層図



1．白灰色シルト質極細砂［地山黒色土をブロック状に含む］（7.5Y７／２＋7.5Y７／１）
2．黄灰色シルト質極細砂（2.5Y６／１）
3．黄灰色シルト質細砂［Feを含む］（2.5Y７／２）
4．灰色シルト質極細砂（５Y６／１）
5．褐灰色シルト質極細砂［Feを多く含む］（５Y７／１）

第117図　SD08土層図

ＳＤ08　（第117、118、119図）

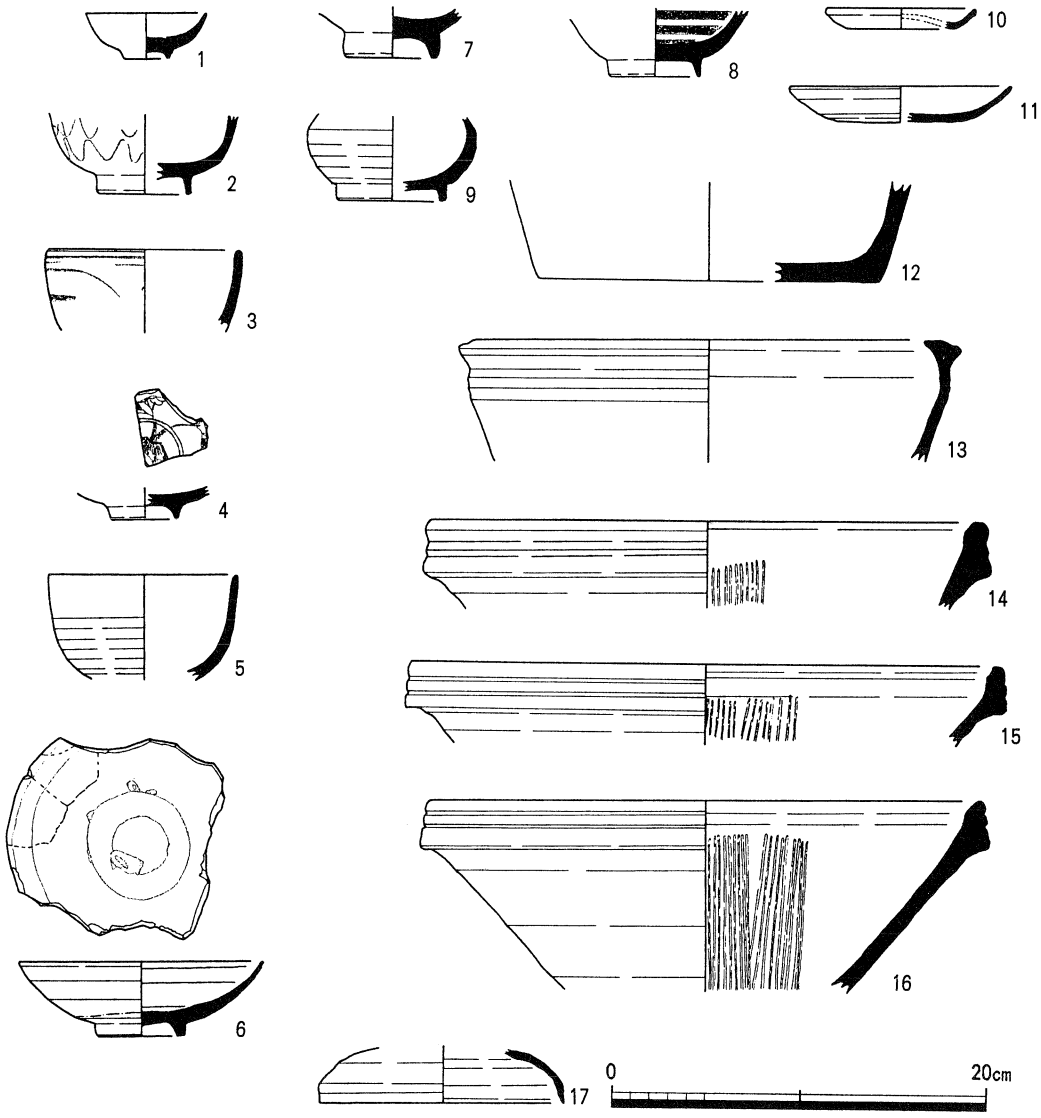
調査区中央部に位置し、ＳＫ17、23に切られる溝状遺構である。中央部でＳＤ07と合流し、南側は後世の削平のため消滅する。主軸方位はＮ－12°－Ｅの南北溝である。規模は幅2.40ｍ、深さ0.35ｍを測る。断面形状は中央部が高くなり、底近くで２条に分かれる。土層埋土は３層に分層できる。出土遺物はＳＫ17北側で焙烙片が多く出土している他、陶磁器片も多くみられる。

ＳＤ12

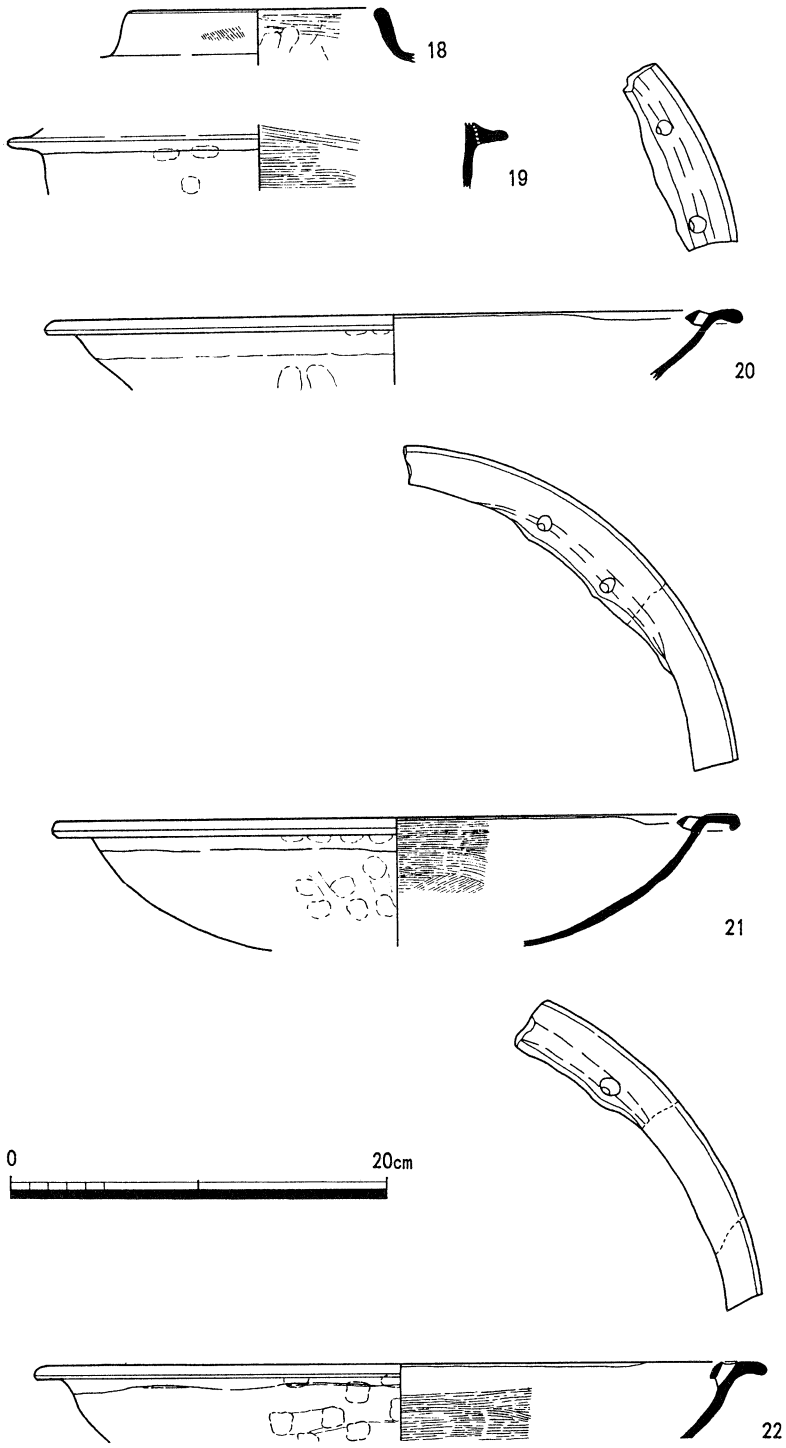
調査区中央部南端に位置し、ＳＫ26に切られる溝状遺構である。主軸方位はＮ－98°－Ｅの東西である。後世の削平のため遺構の残りは悪い。規模は溝幅0.45ｍ、深さ0.09ｍを測る。断面形状はゆるいU字形を呈し、出土遺物はない。

遺構外出土遺物　（第120図）

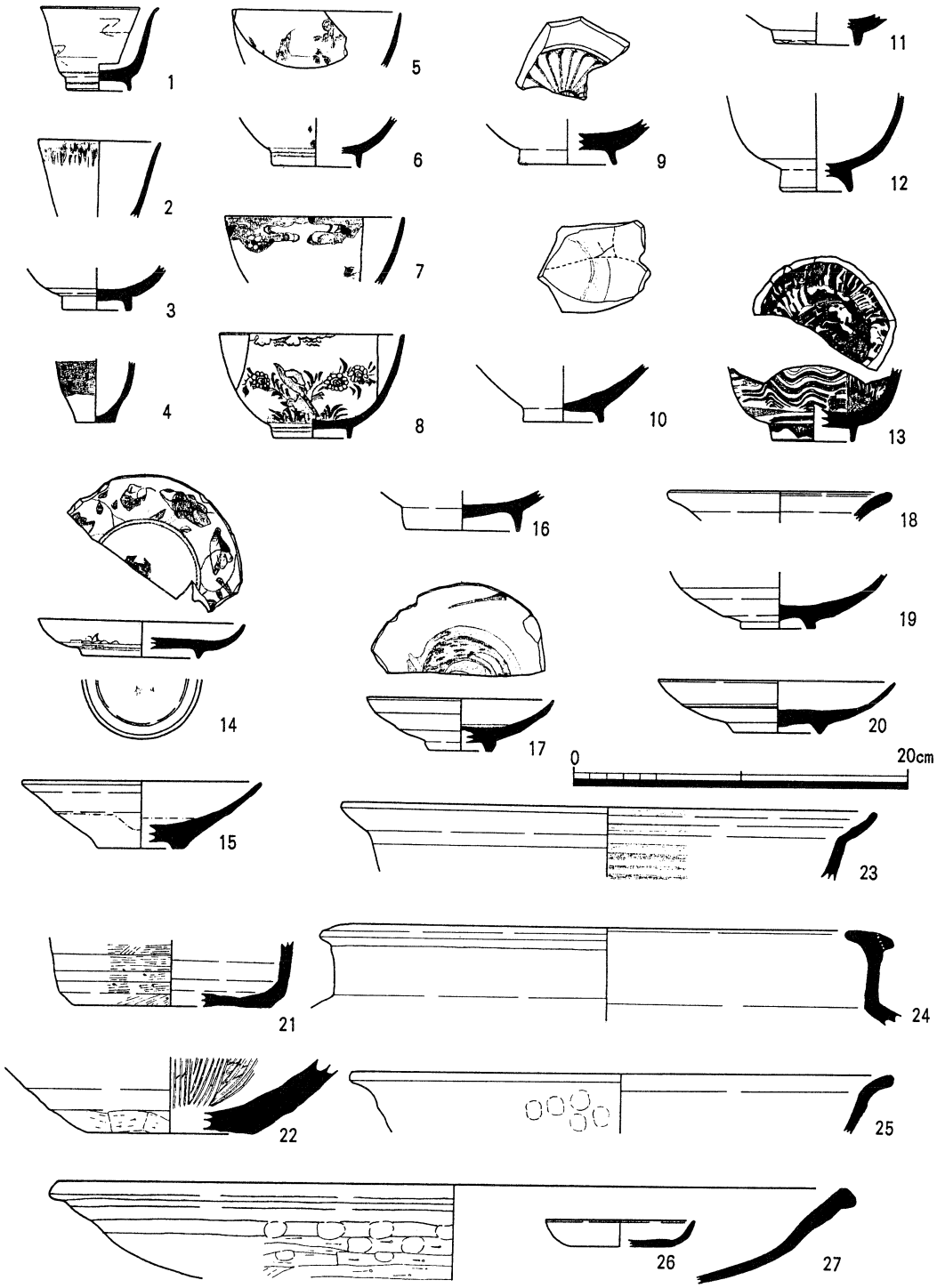
第１遺構面である近世の遺構を検出する段階で出土した遺物である。出土遺物の大半は、近世の遺構に伴うと考えられるものである。出土遺物量は多いが、ここでは、代表的なもののみを図化した。出土遺物は、肥前系陶磁器、陶器甕、土師器焙烙、鍋等が出土しているが、これらの遺物は、第１遺構面（近世遺構面）の遺構から出土した遺物の時期と同時期である。18世紀後半を前後する時期の遺物と考えられる。



第118図　SD08出土遺物実測図（1）



第119図　SD08出土遺物実測図（２）



第120図　遺構外出土遺物実測図

一般国道11号高松東道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第四冊

井手東Ⅰ遺跡

（本文編）

平成７年３月31日発行
編集　高松市教育委員会
高松市番町一丁目８番15号
発行　高松市教育委員会
建設省四国地方建設局
印刷　㈲メディア・ハウス